

東路の津登終

高野參詣日記

藤原實隆

四月の頃。住吉天王寺に詣つべき志ありて。十九日伏見へまかりて。般舟院はんしゅういんに暫く休みて。船の事など催しもよほおほせて。この津より船出ふねでして。爰こゝかしこ逍遙し侍るに。鵜殿三島江うどのなど云ふ所。いとおかしく見え侍り。えなみとか云ふ渡りにて。夕立ゆふどとほりして。權かゝのしづくもいと堪え難くなん。船の中かく遙かなるべしと思えず。何の設けもなくさうぐしかりしに。天昭庵とやら云ふ所より。盃求め出でて來れる。輿きんぎょあることになむ。かくて臥待ふしまちの月さしあがりて。短夜みぢかよも残りなき程に。大阪おほさかといふ所に至りて。かねてたのめ置きし人尋ね侍りしに。いとかひがひしくあるべして。よしある宿りに導みちびき入れて。とかく勞いたはり侍りしに。各々船の中の苦くるしさをも忘れ果てぬ。つとめて此の所の本堂たるべきよし申せしかば。こゝかしこ見廻みめぐらすに。心こゝろ詞ことばも及ばざる莊嚴美麗そうざんのさまになむ侍りし。かくて和泉の堺南庄さかいの光明院より。迎への輿こしなどあぐられしかば。宿やどりを出でまかり立ちしに。堺の者として。人々(光明院檀那)あまた迎へとて出で來れり。則ち相伴ともなひて金堂こんだうにのぼれり。御舍利おんしやくりを頂戴し。同じく日本に始めて渡りし

大般若經一卷。夢殿より持來の法華經など拜見し奉る。緣起住僧よみ申す。靜かに聽聞して隨喜の涙押へがたし。法華經を拜みて。心の中に思ひつゝいけ侍りし。

むば玉の夢どのよりやみぬ世をもこゝに傳へし法の言の葉。諸堂巡禮。寶藏にて靈寶ども悉く拜見し。宿縁淺からず有難くおぼえ侍り。聖雲院にて御影

ども拜み奉りて。奥の方見廻らし侍れば。淨土曼陀羅くち損じて形ばかり也。これなむ西山上人不斷念佛勤行ありし所なるべきと。往事を感じて涙を流し侍りぬ。龜井の水を掬して。

まれに來て結ぶ龜井のみづからや浮木に逢る類ひなるらん。一和尙みちに出逢ひて。五首歌奉納し侍りし事を喜び申され侍る。かくて某とかやの坊にて盃

勸めて。人々少し打ち休みて。是より住吉社にまうで。御神樂まゐらする。十首歌奉納せしめ。所々伏拜みて。神宮寺に詣で。更に御前の橋より松原に出で。濱のあたり逍遙して。

このまゝに住よしといひて故郷は忘れ貝をもいざや拾はん。和泉の堺にまかり越すとて。道すがらの名ある所ども。言ひ盡すべくもあらぬ見ものなり。霰

松原といへる所を過ぐとて。見れば世の常の松にも似ず。ふきからしたるやうにも見え侍れば。木がらしの吹絞るいろと見る許り名にあらはるゝあられ松原

南庄光明院に至りて。様々にいたはり饗され侍り。夢庵に音づれしかば。やがて尋ね來り。夕

つけて又かの寄宿の寺へも罷り侍り。明る日は光明院より夢庵をも招請して。齋を設けらる。廿二日。高野に參詣の事思ひ立ちて。宗珀と云ふ者をあるべと頼みて罷り立ちはべり。さのと

云ふ所に興かきすゑたるほどに。市人騒ぎたつるを見て。和泉なるさゝ市人立さはぎこのわたりには家も有りけり

大鳥の社。信田の杜など云ふ所ども打過ぎて。いづくのほどにか社のある前に。興かきすゑたる所へ。根來よりの迎へとて。馬二匹ひかせて。人あまた走り來りて。食籠錫のものなどもた

せたり。思ひがけずなむ覺え侍りし。かの寺の十輪院といふは。當寺一山の學頭碩學の聞えありとなむ。坊には昨日灌頂を行ひて。後朝の營みさはがしければ。弟子の實相院といふが許に

留むべきよしの案内となむ。とかくして根來に至りしに。衆徒十人餘り立連りて。迎へ入るべきのよしなり。旅のやつれ思ひがけぬ事に侍れば。様々に色代し返して。興ながら大門の中ま

で乘たりし。後にきけば。下るべかりける所に侍りとなむ。かくて直ちに諸堂巡禮し侍り。山中みるものゝ如くにて。かたはら痛さ云ふばかりなし。本堂傳法院にて思ひつゝいけ侍りし。

高野山わかれてこしも殊更に法をつたへむ世々の爲めかも。雖もみ不動を拜見して。

動きなき身を分てけるすがたぞと血の涙をもながしてぞ見る

覺鑿上人の詠歌に。夢のうちには夢もうつしもゆめなれば覺めなばゆめも現とはしれ。と云へる。續後拾遺集に入るにや。思ひ出されて。

いつさめむうつしも知らず七十の今日だに同じ夢の世の中
實相院と云ふ所につきて。是彼れうち休み居たるほどに。初夜の鐘を聞て。

明けば又急ぎていでむ假まくらねよどねごろの鐘きこゆ也

廿三日。雨氣ありと人々申せしかども。急ぎ立て粉川の施音寺に詣でし。拜み侍りければ。堂のさまなど莊嚴巍巍々として。殊勝きわまりなくなむ。本尊は十一面の千手觀音となむ。額の文字。施音の二字は常の文字にて。寺といふ一字なん古文にはべり。誰人の筆にか侍る。すぐれたる見ものに侍り。御前に念誦の程。思ひつゝけ侍りき。

法のため此身はほねを碎きても粉川の水のこゝろにござな

あるべせし紅葉の洞の月もありとたのむ光や暗を照さむ

是は玉葉集に。此寺の觀音の御歌とて入れる事あるを思ひ出てよめる。紀伊川を渡るとて。

水上は吉野ときけば紀の川のみなみの花まであかぬ色かな

河を過ぎて。向ひの河原に輿かき据えて。各々雨包みなどする程。こゝよりぞ雨つゝみするかりごろも紀の川上の朝わたりして

時鳥の聲をこゝにて始めて聞き侍りしに。輿は雨皮して包みめぐらして。何方も見えざりし。ねむなく。

いく聲も只こゝになけ時鳥いづれのやまぢさして見ましを

この道殊の外遠くて。十八町の坂は。四十八町よりも一里の遠き所どもありて。俗に結解なしとかやいふとて。周桂法師戯れに。

あまげとは見つゝも出て濡れにけり結解なしなるけふの道かな

かくて山中に到りて。雨甚しく風烈しくて。え行きやらす。谷より吹き昇る風身をくだきて。更に一足も進み難きよしを申して。山の上に輿かき据えてありしかば。

老の坂くるしきをこそ凌ぎしになどあめ風の身をくだくらん

辛うじて風少し止みしかば。高野の御山に上りつきて。一心院の輿坊と云ふに至りて。人々休みぬる程。郭公のしきりに聞えしかば。

高野山佛法僧の聲をこそ待つべきそらに鳴くほどいぎす

廿四日。草鞋をつけて。諸堂巡禮し侍れば。大塔は柱ども立ち。心柱などきりて。造作のあらましもなり。金堂はかたの如く取立たるさまなるに。三鉢の松もむかしのは焼けて。その種生とて。いがきし廻らしたるを見て。

今はそのまつ曉や近からん千歳ふる木もいきかはりけり
奥院へ詣づる。道すがらきし置きしにも。思ひやりしに過ぎたる哀れさ。有難さになむ。

ふりそふや天津空なき雨もたいそでの上なるけふの山路に

御廟の前の堂（今度供養の堂なり）燈明その數なく光り輝きてえも言はず。住僧出あひて。大
師御所持の鈴杵。水晶の御念珠など。頂戴せさせられ侍りき。

仰ぎつゝみるにいよ／＼高野山光り出づべき室のどほそか
内より賜はりし御爪のきれを納め奉る。裏紙にかき付けし。

つめの上の土よりまれの身を受けて佛のみちは手に取つべし

この御爲め。別に卒都婆立てさせ侍り。其外はかなき卒都婆あまた立てさせ侍りき。人々髪を
納むる裏紙に。

むば玉のその黒かみの一すぢに暗路をながくみなはるけてよ

自らの年來落ちたる齒ども取置かせたる。二つは。觀音の像新しく造りたてさせ侍るに。腹
身に奉りて。残り二十餘り侍るを納むとて。

いかばかり法をぞ知りし報とかち盡しける耻かしのみや
よしあしの萬づを掛し口の齒の果ては我身を捨てざりつる

還向の道。空晴れて日の光り明かなりしかば。

雲ぎりの迷ひもきえて出る日やけふの祈りを空にうくらん

廿五日。有明の月の出でたるを見て。

高野山此あかつきの月だにも待出づる程ぞひさしかりける
宿坊を出づとて書き付侍りし。

思ひ入りし一つ心のおくを聞きて歸らん塵の世をいかにせん

かくて根來の十輪寺に着て侍りしに。夜に入りて講向を行ふを聽聞して。

苦しくも岩ねまつがねこし道を忘れ果ぬるのりにはかな

廿六日。今しばしも留まりて。これより和歌吹上も見侍れかし。そのしるべ侍れば。人を走せ
て申し侍るべし。又連歌も一座など。さまざま止め申せしかども。えざらぬ事とて。立出で侍
るほどに。發句とて願に乞ひ侍りしかば。筆にまかせて。

ほとゝぎす鳴くねごろなる三山かな

かくて佐野といふところの。少し道よりは入りたる方へ。宗珀しるべして。晝の休みに。かい
つ物など調べたるも。珍らかになむ。高師の濱の松原の下。天神の社の前に輿を立てし。

袖のうへに松吹く風やあだなみの高師のはまの名をも立らん

暮にせまりて堺にかへり着きぬ。

廿七日は。すこし休みぬれば。宗仲が寮にて一盞など侍りき。

廿八日は。阿彌陀寺へ招請ありしかば。まかり向ふて。大師の御作の辨財天など拜見尊とくな

ん。近き寺の風呂に入りて。夕つけて歸るほど。堺の濱見廻りて。光明院に歸りしかば。宗碩

京より詣で來て。歸京の道の事ども申し調へぬるよし申しはべる。いと嬉しくなん。

廿九日。高野參詣の前より。二十首題を配りたりしを。けふ夢庵にてとり重ねべきよしありし

かば。彼處にまかりて侍りしに。歌舞に及びてかの興淺からず。

旅宿郭公

いざとひて都のつとに草まくらさそはまほしき子規かな

江上眺望

漕かへり入江のふねの夕なみにさかひ知らるゝをのが浦々

寄杣木戀 但この歌宗碩に遺令書之了

みや木引こゑに答るやまびこも我うちわびてなくは知らずや

五月朔日。光瑱といふ者連歌興行すべきよし。頻に申侍りしかば。光明院にて一座ありしに。

濱松の名にやこたへしほどしきす

みじか夜をしき浦なみのこゑ

牡丹花 宗碩

すししきを光りに月は秋立て

二日。堺を立ちて住吉に詣で。御神樂まらせて思ひつゞけし。

神も又まつとしぞ思ふすみのえや立かへるけふの浪のしらゆふ

天王寺に詣で。聊か志の御燈明など。又献つらせ侍りし。龜井の水にて。

後前のちぎりもあらし結びあぐる龜井のみづのふかきこゝろは

西門の念佛堂にて。武庫山出現の彌陀三尊。太子の御筆今に儼然たり。唐土より渡せる善導大

師等身の御影も。此所に眼精誠生身に向へるが如し。此堂になん西行法師が座もありけるとか

や。一年の地震に碎けうせぬるよし答へ侍り。哀れなる事なり。此本尊靜に拜見して。

うつしとめて暗をぞ照す玉はやすむこの山より出でし光りは

爰にて堺よりの衆皆暇乞し侍りしを。猶高津といふ所まで。各々慕ひもうで。かしこにて光

明院ひるの餉などまうけて。これより歸られ侍りき。渡邊より能勢源五郎與馬など迎にをこせ

て。是より船にのり移りて漕出るほど。能因法師が雲井に見ゆる伊駒山も思ひ出られ侍り。樓

のきしなど云ふもこゝと云ふ所なり。大江殿の跡とて。今も松の緑に見え侍り。

名にたてる其世の儘か尋ねばや大江の松のしるひともがな

長柄の渡り過ぐる頃。心地わびしくて尋ねも見ず。過ぎて後なむかし。そこと申せしかば。橋ばしらふりぬる跡も問ふべきを過しながらに夫と見ざりき。暮れかゝるほど。芥川の善住寺といふ所の塔頭に着き。明る日出たりしに雨ふりていとわびし。水無瀬に罷り御影堂に参り。暫く念誦して。夫より都に趣て申の終許りに此蓬屋に歸り着ぬ。

高野参詣日記終

あづまの道の記

仁和寺僧正尊海

天文二年神無月後の四日に。東の方へ用の事ありて下り侍るに。遙かに都を顧みて。すみなれし都の空をわかれては遠くなるまでかへり見るかな。逢坂の山を越るとて。いつ返りいつ逢坂のせきならん知れず知られぬ旅の行末。唐崎の松を見て。炬を躡えざる年ばかりなる法の師。あとに獨り在さん事を思ひ出で侍りて。今日よりや思ひを志賀の浦見ても松はひとりの故さとの空。比叡の山の東坂本にて雨に逢ひて。旅人も出でざりければ。空も徒然と心うくして。旅ごろもしほれぞ初るかみな月しぐるとは無きたる春の雨。船の上より大比叡の雪を見て。富士の山を思ひ出でし。浪の上のおひえの雪のちも影にまだみぬ山を思ひやるかな。木の葉の船の中にて。同道の人云ひ捨の發句所望しければ。取あへず。

さいなみやたゝむ木の葉の沖津ぶね
浦半の山をしぐれ行く雲

をちかたの空にあしたづこゑさへて
島の里と云へる所に泊りて。

盛親
五郎四郎

都出て新むまもりのかりまくら夢ばかりこそ行きかへるらん
津久間と云へる里にて。道にくたびれぬれば休みて。餉急げども。宿の主人は其事無ければ。

とくせなん津久間の里のはたごいひつれなき人は鍋も焚かずや
朝妻の浦に泊りて。其の朝起き侍りて。

見し夢のあさづま舟のたちかへるなみだばかりを袖に残して
醒が井の里。濁醪と云へるを飲みて。

あしけれど飲みてなをさん二日ゑひけふ醒が井の水くさき酒
日は照りながら。伊吹が嶽を見れば。打曇りてさながら雪の降る如くなれば。

寒ゆるそらは日影のさしながら伊ぶきあろしや雪とふるらん
不破の關屋のあれけるを見て。

板びさしまばらになれば山風の不破の關もる月ぞさやけき

垂井の宿に泊りて。其の夜の嵐はげしくて。朝氷結ぶを始めて見て。

小夜風のつもる木の葉の下くゝる水の垂井のうす氷かな

稲葉山の麓井の口と云へる所に。一日逗留し侍りければ。伴ひ人の多く世にはかなくなりし由
云ひ侍れども。誠しからねば。まかり行きて問はんと思ひ侍るに。知る人事の由を語れば。

世の中を人はいなばの峯におふる松やなか／＼果敢なかるらん。

尾張の國策と云ふ所に。一夜を明し侍れば。其の里にいと美しき若衆ありけり。酒など喫べて。
其の朝旦起き別れければ。

梓弓やなの里びと一すぢにおもひ忘るゝよこぐもの空

でんがくが窪と云へる野を行けば。山賊出る由申して。いぶせく驚かされて。
あぶれたる山だちどもが出合ひて申刺やせん田がくがくぼ

守山と云へる所に泊りて。旅寝いと寒かりければ。

守山の里の名におふやど假れば小夜もすがらに袖ぞ時雨るゝ
矢作の里。岡崎と云ふ所に泊りて。よしある事あれば。左様の事思ひ出でし。

ものゝ夫の矢矧の里の跡とへば昔しになりて知るよしも無し
今橋と云へる所に泊り侍り。浮世の事ども思ひつゞけて。

人なみにたゆたふ事は古へもうきよ渡りのかゝるいまばし
遠江の國濱名の橋のあたりになりて。

行末はさぞな心もつくばねのみねと濱名のはしにかけばや
引間野と云へる所に泊りて。

知るべして袖を引間の野を行けば萩やをばなの雪のふるえに
あまがたに知る人あれば。そこに落着きて暫し足など休め侍れば。
彼の尊翁に應じて。霜月廿一日に。道芝居士發句所望なれば。

いろ見えて香はぬ花か木々の雪

さえて風なき松の朝あけ

打むかふをちの山の端のどかにて

山内刑部少輔館にて。一座興行。

つきてふれ雪やみやこを忘れ草

冬にいろある宿の梅が香

春寒き月にうぐひす鳴きそめて

都に馴れし人の。此の所に下り身罷り侍れば。彼の廟前に至りて。松風さびしく吹きければ。

道芝

道等
道悦
道直

馴れし人よ如何にと言問へば答ふるばかり松かぜそ吹く
庵主の返し。

都よりしほれこしても絞るらんなきがあと問ふ今日の袂は

庵主侍れば山家さびしからんとて。常々問ひ給ふ人に。

都より住みよかりけり奥やまの心を知ればさびしさも無し

また庵主返し。

都出でし心のまゝのころかは又やまざどを憂しと思はぬ

是より不二見んとて立出ける道に。原と云へる所に。庵主に手習ふ人の里あれば。そこに至り

て夜もすがら若き人達と語り侍りて。

夢うつゝ何とさだめん假まくら替はす言葉のうちに分れて

同じ家の主人。居かけなど云ひつけ侍れば。何となく心の奥床しくて。

思ひきやにむらぬものを我こゝろ今朝しも何のいもるせよとは

是より掛川と云へる所に行きて。知る人を尋ねけれど。逢はぬを恨みて。

うらみこしくずてふぬのを掛川の掛るもほさぬ涙なりけり

又此の所にて夕暮淋しくて。遙かに都の方を見送りて。

こゝにきて日の入る方を眺めやる山より西やみやこなるらし
小夜の山をこゆるとて。

立かへりいつか越えなんどばかりも頼めおきける小夜の中やま
菊川の宿を通るとて。

冬がれの山路のくさもうつろへる霜のした行くきく川のみづ
岡部の里越え行くに。語るべき友もなければ。

置く霜のかべの里にともなく獨り過行くすぎの下道
宇都の山をこゆるとて。

如何なればうつつの山とはむば玉の夢より云ひし名にや有けん
大井河を渡るに。都のあたりに同じ名あれば。それさへゆかしくて。

都にしかよふころのおほるがは名に立つ波はかへりもやする
木枯の森のあたりに。くすみと云ふ所に寺あり。そこに泊り月の影寒きを見て。

川波のさえゆくまゝに山の端の月に障らぬ木がらしの森
賤機山に浅間大菩薩あり。夫へ詣で歸るさの道。雪うすく散るを見て。

から衣しづはた山にをり掛くる時雨やゆきの下染やせん

遠江にて見しよりも。今駿河にて富士を見れば猶まさりて。

あさ夕に幾度ながめこすよりも近まさりする雪の富士の根
三河の國八橋のむかしを問ふに。唐衣の歌あはれに思ひ出で。

言の葉のたぬしとぞなる杜若かけしころもの由縁こひしも
鳴海の浦に出て月を見て。

山の端のかすみの出るほど見えて月に鳴海の浦まづかなり
星崎の浦を遙かに見わたして。

春の夜の海に出でたる星崎のほのかに見ゆる浦のともし火
都にかへる事嬉しくて。

都へとひなのながぢを立かへるかすみの衣にしきなりせば
春雪と云へる題にて。

ふると見て積りもぞする春の雪の庭の本草にあまる露かな
十四日。立春なれば。

山はまだ霞むともなきあしたより人のこゝろの春や立つらん
是より登りぬれば。道芝離別の短冊を路次まで贈り給ふ。

ひとぞあるえやは又とも契り置かん老の行くへのけふの別れは
やがて使を返し。

老の波立わかかれても出舟の逢ふ瀬を又と頼みぬる哉
此の返歌にそへてたちなれし人々の方へ。

思ひ立ちし旅よりもうき假まくらあまた馴れにし宿の別れは
浦づたひして歸るとて。富士の面白きを見て。

旅ならで見まく欲しきは富士の根の晴行く波の月雪の空

是より登る道すがら。藤枝長閑寺と云ふ所に善徳寺あれば。立より侍れば。和漢の一折興行。
發句所望あれば。

ゆきやらで花や春まつやどの梅

喜 卜

友三話ニ歳寒ニ

九 英

控レ氷茶煎レ月

善徳寺 承芳

又是より遠江天芳道芝庵に歸り。年を越し侍るに。明年の二日子の日なれば。

今日と云へば野邊の小松のうら若み子の日に千代を引くためし哉

同七日に。若菜の題にて。會興行。

なべて世のけふの若菜に言の葉のなぐさめぐさや積り添ふらん
十二月十八日の夜。於ニ中御門一座御興行の發句申せと仰せければ。

あけぼの、雪のうへ見む山もなし

月に色そふ松の寒けさ

鴈がねも氷るあらしの小夜ふけて

中 藏

同廿三日の夜。月待に又一折。

ふる雪のつもるやとしのすゑの松

山風さむみ峯の朝あけ

中 藏 喜

いる雲をわする、月のかけすみて

清見が關に至りて。是より奥へは行かざりければ。

心よりこゝにさそはれ清見がた關とめらるゝなみのあらがき

是より三保の松原を遙かに見送りて。

朝なぎにあまの小舟のほのくゝと三保の松原なみやこゆると
故さどに歸るこゝろをどがむなよにしきに勝る墨のところもは
知らむかし水の上行くかつをむし我あしぶみに習ふこゝろは

あづまの道の記終

武藏野紀行

北條氏康

天文十五年仲秋の比。武藏野を見んとて。此の年月思ひ立ちぬる事なれば。人々あまた打連れ
て。小鷹狩して遊ばんと。皆々狩の装束して馬にうち乗り。先づ鎌倉にまうでける。あなれ此
處の古跡を眺め。八幡山より四方のけしきを眺め。小磯大磯を見渡せば。鴛や鷗の波に立騒ぐ
を見れば。

をし鴨の立つや白なみ磯べよりあまのみるめを袖に受けばや
大いその波路を分けて行く舟は浮世を渡るたつき成るらん
過にし庚子の年。宿願の事ありて。此の宮に詣でけるが。漸々八とせの餘りに成りぬらんと
ぞ覺え侍れり。若宮の御前に参りて。

頼みこし身はものゝ夫の八幡山いのる契りは萬代まで
さてこゝ彼處の谷々山々。由比の濱。大鳥居。古寺古跡をながめ。明くれば。藤澤の北松井の
庄に。三田彈正忠氏宗が宿所に一泊して行くに。是なん小淘綾の磯と云ふ。

きのふ立ちけふこゆるぎの磯の波急いで行かん夕暮の道
此は八月上旬。朝霧深く分入りて行くに山あり。いは山と云ふ。此の山の後ろは甲斐の山。北は秩父など申し侍る。夫より武藏の國勝沼と云ふ所に着きぬ。齋藤加賀守安元。此の所の領主なり。常々道々の事申し遣はしければ。山海の珍物數を盡し饗應しける。此の所に二日逗留して。夫より武藏野を待行くに。誠に行けども果のあらばこそ。菽芒女郎花の露に宿れる虫の聲。あはれを催すばかりなり。

武藏野といづくをさして分つらん行くも返るもはてしなれば
古への草のゆかりも懐しければなり。是も紫の一本のゆるなるべし。

隔つなよわが世の中のひとなればしるもしらぬも草のひとつ本
明れば八月十三日。朝ぎり彌々深くして。道も定かに見え分ず。馬に任せて行き。長井の庄に着きぬ。誠や若むらさきの巻に。かゝる朝霧をわけ入らんとするも是なるべし。大澤の庄などを行くに。漸々隅田川にも着きぬ。河面を見れば。誠に白き鳥の。嘴と足と赤き鳥の群居て。魚を食ふさま。昔しを思ひ出でし。

都どり隅田がはらにふねはあれどたゞその人は名のみあり原
向ひは安房上總まのあたりに見渡さる。茲に葛西の庄淨興寺の長老。年八十餘に及べるが迎ひ

に出でられ。寺内に立寄り。一宿すべき由申されければ。河を渡りかの寺に行きて一宿するに。夜に入り風冷かに吹きたり。松風入琴と云ふ事を思ひ出でし。

松風の吹くこそ聞けばよもすがら調べことなる音こそ替らめ
明れば。駒をはやめ歸らんとて。元の路にさしかり。いつこよるぎの磯づたひ。日數つもりて。今日は八月中旬にも成りぬ。小田原にこそ着きにけり。

武藏野紀行終

吉野詣記

三條西公條

去し年の秋。圖らず年來臥しなれたる床離れて。行くべき心地もなくて。あはれ修行にも立出でなばやと思ひつゝ。とかくまざれしに。紹巴とて。筑波の道に志深くて。この頃都の住居し侍りて。夜晝來り訪ひけり。去かも敷島の大和の國まで。道たどくしからず。芳野の花見るべきよし誘ひけり。さればとて。人々に言觸るゝ事もなくて。むげに顔しらぬ人にて。宗見と云ふ人ひとり召連れ。今茲天文廿二年二月廿三日の朝。ひそかに都を出侍るとて。思ひつゝける。

名殘思ふいもせに逢へる道やあると吉野の奥を尋ねてぞ問ふ
鳥羽よりみつのみまきに罷りけるに。近き年々水のうれひに堪へかね。堤を築くとて。はるく
と橋渡したる。けふも營みけり。この所ぞ領しける所なるに。あはれ今年は秋もゆたかにて。
思ふまゝに水の害をも去りぬべしと。夏雨の神助を心に仰ぎて。
はびこりし水の堤にしるてかのうかりし年のあきもわすれん

岩田の小野などいふ所を過ぎて。天神の森にいたる。薪など云ふ所を見やり。杜の蔭なる里にて駒に水かひ。各うち休みて。いづみ川のあたり打過ぎ。柞の杜に到りて。

春にだに柞のもりはよそよりもわけて霞もうすきいろかな

奈良坂越えて。般若寺の文珠堂に立寄りしに。程なく日暮れ。旅の舎に夜をあかしけり。

廿四日。春日の社にひそかに詣でけり。さまを變へて後は(十三)けふなん始めなりけり。

なれくし袖は霞にそのかみをあらず隔つる神がきのうち

紹巴。

立かへりそのかみならぬ袖の色もまたさらめやは春の藤波

賽後默禱道中風雨難。

雨後餘寒春色微。白櫻未發野梅飛。天其一笠山三笠。爲我龍神莫濕衣。

これより高圓のかたはら。羽買の山の下に。客養寺とて志深き人住みけり。様々の興を盡せる

こと限なし。けふは地藏菩薩の縁日なれば。弘法大師建立の寺十輪院に到れり。石にきりつけ

られたる佛菩薩。歴々として殊勝の靈地なり。やがて興福寺諸堂結縁し。東大寺大佛殿をはじ

め。八幡宮に参り。念佛堂の舍利頂戴し。二月堂に参りたるに。雨すこし降りて。笠など取寄

せて。知足院など見て。宿りに歸りにけり。

廿五日。けふは殊更の日に當れり。聖廟御法樂年々内裏に参りしも。けふは御暇賜はりて候はざりければ。

梅にまつ匂ひをこそよ八重ざくら

霞にふかき庭のはる風

紹巴

かくて一二句づゝ申しあひ。道中にて百韻終りける。是より佐保姫の社に参りしに。空殊の外

に牙かへりて。風吹きあれたり。紹巴。

行く袖に川かぜさむし佐保ひめのかすみの衣われにかさなん

とよめりける返事に。

さほ姫はよしかさずともくも霞たえまの日かげ衣にやきん

眉間寺に参りしに。糸櫻盛りなり。紹巴。

ぬきとめぬ露のほひも春風のはなは櫻のいとにみだれて

とありしかば。

糸による猶くりかへし花ざくら打散る露もぬきてとよめん

遙かにのぼりて見るに。

あさみどり遠山眉のひまゝにかすみを分るはる風ぞふく

不退寺ふたいじに到りて。業平なりひら自筆じひつの影えいあり。おぼろげには開ひらかざるよし申せしを。宗二むねにとて。彼のあ
たりの知り人にて。よく云ひより拜見せしに。容顔ようがんの美麗びれい端正たんせいなる。現在の人に向ふが如し。

春やむかしわが身ひとつはどばかりに言ひしやけふもむかふ儂

これより法華寺。海龍王寺。超勝寺。西大寺に参りて。かの僧正そうせう遍照へんせうの。絲いとよりかけてとよめ
る柳。むら／＼見えたり。永き日は暮れやらで。菅原すがはらの伏見ふしきに到れり。菅丞くわんじやう相降誕さうかうたんの跡とて。
ちいさき梅の木などありて。みしめ引渡したる跡あり。招提寺せうたい。薬師寺。大安寺。元興寺ぐわんこうじなど
結縁けちえんし。又宿所に歸りにけり。やつれたる姿も憚はやり忍びたりしに。大乘院よりうち／＼聞きつ
けて。音づれたる人ありければ。ひそかに夜に紛れて逢ひ奉りて歸りぬ。此宿りたる家あるむ
は。由よしある人にて。二階を新らしく作り。簾青すだれあをやかにかけ渡し。向ひ見れば。伊駒山いこまやま手にとる
ばかり向へり。かの壁かべに書き付けたる。
春さむみすだれをしばる梓あつたゆみいこまは雪のはなも有けり

紹巴。

玉すだれあぐる伊駒の山のはを宿にふしみのはるの夜の月

廿六日は。在原寺ありはらでら。柿本寺かきのもと。人丸塚ひとまるづか。木像もくぞうの人丸おはしけり。

けふぞみる言葉は筆にかきの本もとより朽ちずのこる姿を

道少すくし行きて。ある女わらべに問ひければ。むかしの筒井つつみ筒づにかけしとよみし井のもと
など。教へける。かたの如く残り。石上いそのかみふる野の田づらをゆきて。布留ふるるの社やしろを拜みて。

咲く花にけふこそわくれ七十どに近きもあはれふるの中道

とありしかば。紹巴。

分わけなれしこかげながらも惑ふ哉あとはふるの、花の中みち

内山にて暫く足を休め。長岳寺ながたけ。釜口かまぐち。號なづす。愛染明王あいせんめいおうに赴まをき二夜をあかしけり。この寺の護ごり。柳本とて。

やさしく情深なまけし。凡そ浮屠ぶとは桑下さうかの三宿をだに戒められしに。この柳本こそ。千夜ちよをもあかすべ
き宿りとは覺え侍れ。夜の白波音しらなみおとせず。二六時中。愛染明王あいせんめいおうの不退ふたいの供養護持くやうごじの力もたのもし。

里人のどがなくてしもをさむらん蒲かばのくちぬる名さへ聞えて

廿七日。本堂に参りて。

愛染堂前花繞れ松。方池龜出水溶々。忽除い業障ごうざう。洗せん煩惱ぼんごう。十二時中不退鐘。

又寺に歸りて。夜に入て。柳本。範堯はんぎやうといふ盃さしさしいで遊びけり。

廿八日。柳本大神に参りて。あなし川を渡り。檜原ひはら大御輪おほみわ寺に参りたりしに。寺のさま美うらしく。
よの常の造りつく様にさまあらず。楔くさびなど云ふ物も用るず造れるさま。物がたりせり。傍かたはらに三輪明神さんりんめいじんの
王子わうじの入定にふてうの所あり。王子寶殿わうじほうでんにとぞ入らせ給ひし時の兩足の跡あと。顯然けんぜんとしてあり。錦にしんにて覆おほ

ひあり。開きて見るに。その跡聊か踏違へたり。顯當を表し給ひしよし神秘など語れり。殊勝の事どもなり。これより三輪に詣でけるに。神前のさま殊更神さびたるに。菩提草筵敷きて。かの範堯が盃さし出し。此所のはしづかどて。名ある者なるよし申して。寒食の飴。端午の粽。取供したる物さし出して。酒しるずして。思ひつゞけよるよし申しけり。年ふとも又や待ちみん三輪の山はなの都のそでのにほひをとりあへず。

うちとくる心もあやしみわの山たづぬる我をしる人にして深く誰となくして過ぎぬるを。見顯しけるにやどて。紹巴。

花の香はどがむばかりもみわの山しかもかくるゝひとの袂を是より範堯は歸りにけり。さのゝ渡りすぐる程。風いたく吹きて。雨風にやなど申しけれど。空は一點の雲もなし。

にはかにもふりこむ雨の雲もなし駒うちわたすさのゝ夕風かくて。つば市より泊瀬に参りぬ。ところのさま源氏物語に書けるさながらにて。暫し花の陰に立寄れば。誠に波路に向ふ心地せしかば。

漕ぎよせよ花のしらなみあまを舟はつせの山のはるの夕かせ

本尊の御前に参り。折しもうた歌へる女二人。法樂と覺しくて。歌うたへるあり。その詞に。花の都人歌よませ給へやと云ふを。打聞くより。誠に花の都人は紛れなけれど。歌よみなむ事は胸つぶれて。彌口をぞ閉ぢける。暫らく念誦して本尊に向ひ奉れり。寺は未だ周備の姿も見えず。造畢せしめば開帳あるべきを。まのあたり拜み奉るも有難くなん。かくてやしほの岡。二本の杉より川をわたり。多武峯ある坊につきぬ。廿九日。梟の聲近く聞えけるは。未だ夜も深きにやと思ひつゝ。起出でければ。はや明ゆく曙の色も外には似ず。物あざやかにして。かの東坡先生が。草木數へつべしと云ひける山も。かくやと見えて。空も猶さえかへりけり。

さえかへり猶はる風はふくろうの聲もかすまぬ明ぼのゝ山朝のほど。社頭に参りければ。莊嚴巍々として感涙おさへがたし。

我身世をすてゝも仰ぐみねのてらたかきは花の涙數々

松杉戢々晚霞間。鳥語鯨聲寺更閑。武是元來止戈事。談峯可レ諱此談山。

坊に歸り。あしたの營みなどして。ねつぎと云ふ社に参り。往來の岡の觀音に参れり。三十三所の中に。まことに人のゆきゝも繁く見えたり。橘寺にて太子の尊容拜み奉れり。あまたの中に優れさせおはしましけり。橘の木あり。その實さへ残りて香はし。山を佛頂山と號して

石碑あり。その文。佛頂山の三字鮮かなり。今も常にこの山には花ふりぬるよし申しけり。折しも堂前の櫻盛んなり。花の下にておのゝ酒のみけり。

のりの花そらに降らせし天つ風さくらがうへはいま心せよ

ふるでらの名に立花や其葉さへ實さへ花には櫻さへさく

これより飛鳥川を渡り。安部の文珠堂に参りけり。岩屋ありて奥もの深し。耳なしの山かけ打過ぎ。蘇我川打渡りけるに。板橋はるかに見えたり。

うち渡しゆくゝとへばそが川のそがひにみえて霞む板橋

程なくいはれ野に到りぬ。萩などあるよし聞けど。今は道もなき野邊なり。思ひ廻らすに。蘇我と書きて。いはれと訓めるにやとおぼえ侍りし。

しるべせんまはぎやいづれいはれのゝいはれをとはん古枝だになし

かくて今宵は。高田はつせの寺に泊りぬ。この寺の僧又山世とて。心やさしき人あり。舊識の如く心を運び。此處彼處道しるべし。ありがたき志にてありける。

卅日。この寺を立出でぬるに。曲川まで。若き人。送りに馬など引かせて來り。酒肴めて立別れけり。二月もけふのみなるに。桃花こゝかしこさきて。川のまがり。曲水の興など催すべき所のさまなるよし申して。

さかづきに千歳もめぐれもゝのはな川はまがりの水にうかべて
暮れてむろべといふ所につきぬ。

三月一日。けふは各々此處にて足を休めけり。十五首の當座あり。此のむろべのあるじ。文道に心ざし深くて。歌の道にも心がけたる人なり。さやうの物語りなどして暮れぬ。明れば。これより吉野へ赴くべきよし申しけり。廿五日の雨吟。道中にて終りぬ。芳野の花は未だ盛んならざるよし申せしかば。まづ高野山に参るべきよし申して。道のことなど云ひつかはせる。曉方道遙院夢に見え給へり。

二日。どまりを出たちて。戸だて山。まつち峠を越え。櫻井の水をすぎて。高野山にのぼりぬ。禿坂。不動坂など。聞しよりも峻しく。このあたりは乗物もかなはざれば。辛うじて登りつきぬ。ひそかに宿りにつきにけり。伴ひし宗見といへるも。旅のよそほひおろそかにして。足元も堪え難きよし申して。伴はざりけり。かの宗二。又奈良にての家あるじなど。伴ふべきよし申して來けり。

三日。けふは道遙院忌日に當れり。嬉しくて粥強飯などもとりあへず。朝霧を拂ひて奥の院に参れり。節日のしるしにや。衆徒そでを道もさりあへずぞありける。参りて拜み奉るに。白き犬。いがきのあたりに伏したり。利生のよし人々申しけり。喜びながら御前をたつて。灯笼堂

に参り。大師の念珠五鈷など頂戴し。大塔諸堂結縁して宿に歸れり。この十年ばかりに成りぬるにや。参詣せしこと思ひ出で。一度参詣高野山。無數罪障道中滅。の記文もあり難きに。二度までの参詣宿縁淺からず。

横嶺縦峯不_レ耐_レ登。友人携_レ手又支_レ藤。再來尤喜桃花節。前度劉郎一箇僧。

たらちねも又たらちめのは、こ草摘うしなはんけふ爰にきて

あの一_レ旅の装ひして下山す。昨日も山中野火どころく見えし。今日は又大きな木焼けて。折かへりたる中より炎あがれり。右は山。左は深き谷。足もとにも火燃へける木の下を通れる。まことに避雨の陵をすぐる心地も。かくと見えたり。下りつゝ見れば。麓なるかね川昨日渡りしに。けふは橋打渡りてきつきけり。水村山郭酒旗風の姿。杏艶桃嬌奪_二晚霞_一。空の麗らかさも心地よげなり。節日の盃よび出して。各々祝ひけり。この行くさき。清水と云ふ川は。吉野川の未なれば。いつしか此頃は花の面影も浮びて急ぎ渡り。日くれぬれば。繪堂に泊り。後夜の念佛など聽聞して明しけり。

四日。高天寺に到りぬ。初陽毎朝來の梅の木。近き頃の風に折れたるよしを申して。一丈ばかりの數圍枯朽したるあり。側に小枝あり。くちてだに梅もたかまの花の色に入雲を聲に残すうぐひす

櫻花あり。いま盛りなり。

きてみれば山のかひよりみし雲の上に高天の花はさきけり

これより上は乗物かなはざるよし申せしかば。誠に山伏の姿にて。葛城の峯金剛山へと志しけり。この山の名高き。於_二南海中_一有_二一淨土_一。常在_二說法_一。法喜菩薩。名_二金剛山_一の名文も。此の世の外_二の心地_一して。道すがらの險しき。鳥の聲も絶えたる所に雪残り。み山木など。冬の盛りの姿にて立てる。まことに鳥の通ひもなき故と。人々申しけり。晡時に辛うじて登りつきぬ。楯と云ふもの焚きすさびたる爐火のもとに寄りて。道すがらの寒さつくらふ程もなく。點心など云ふもの取賄なひ備へたり。長く道たえたる山の上に。かゝる貯へのとりあへざりしも不思議にて。思ひ續けしる。

衆峰絶頂金剛窟。行者高蹤路轉迷。今日初嘗禪悅食。相盟法喜法身妻。

かくて法喜菩薩役行者拜み奉り。葛城の神岩橋架したまひし所など拜みて。

未どげぬ思ひはかけし岩はしもかくこそ有けれ葛城の神

紹巴。

春の日もはや西なるや葛城の花にとよらの鐘ひく也

やがて下山すべきとて。麓迄迎へ馬などよびて待たせけるに。道を踏違へ。木くだしの道とて。

猶險しき方に下りける程に。迎の乗物辛うじて暮るゝほどに行逢ひて。またむろへぞ歸りける。五日。吉野に赴きけり。これより宗見も伴ひけり。六田の淀。橋のありけるが。中たえて修理せし折ふしにて。けふは船にて渡りぬ。大きな樹を作りこめたる旅店あり。あるじの云ふやう。この木は謂れある木なるよし申せしかば。六田の淀の柳にてはなきかと申しかければ。其の事にてあるよし申しみれば。又あまた柳ども。未だ寒くて。芽も張らざる木どもなり。こにて人々水あみなどしけり。

やど出て五つのかひを吹くからにこゝは六つ田のかすむ青柳行きくして吉野に入りぬれば。關屋の花は散りて所々残り。ちり落つる花を。谷風の吹き上げたる。世離れたるさまなり。こもり勝手の兩社に參り。かねの鳥居目驚かされたり。鳥形の額あり。字形辨へ難し。人に問ひければ發心の門とぞ申しける。入りて行くまゝに。一里ばかりは。今を盛りなる花の木ども數も知れず。思ひ遣りしにも聞きしにも越へたる壯觀とぞ覺えし。愛染寶堤まで登りて見れば。このあたりは。未だ木末ども咲きあへざりしかば。又盛りの木の下に歸りて酒すゝめ。酔の心地に。いよく花も色を増したり。いかなる歌もよみぬべきよし兼て思ひしも。中々ことざましたるやうにて。歌心も失せ果てぬ。心たゞ花にちりつゝよくみんと思ふにたがふみよしの山

とありしかば。紹巴。

さけばちり散れば櫻のかけ深きよしの、花のときは山かな
あたりを見れば。立願にて花の木ども植ゑてまるらせけるよし申せしに。百本の内と札つけたる木。其たけ二尺餘りなる木ども。今三歳四歳の中には。盛りの花の木たるべき由思ひやりて。

咲ちればけふみつくしつ心なほわかきに残す花のみよしの
宿に歸りて。紹巴。

もろこしの芳野のはなに奥もなし

とありしかば。

おなじかざしのさくらいくもど

兩吟百韻をはりぬ。かくて一夜をあかしけり。

六日。吉野を出でける。六田川けふ橋を架しければ。馬など迎へに來りて。たやすく渡りて。

又高田。泊瀬寺。極樂寺につきぬ。

七日。けふは靜かにうち休みて。二十首當座よみけり。

八日。當麻寺に參り開帳し。瑠璃壇など廻りなどして拜み奉る。淨土九品のさま。物鮮やかなり。

さほ姫のをれる衣はやへ櫻こゝの品には手やのこしけむ
染殿へ参る道に。あだの大野あり。馬に鞭うちて行きけるに。萩など生ぬべきさまにもなし。
菟葵燕麥春風に動搖すべきさまなり。

あだなれやあだの大野をけふみれば麥はむ馬の跡ばかりにて
染殿に参りてみ侍るに。本尊も大佛なり。雪霜雨露に犯され。糸をそめ給へる池とても。水も見
えず。糸をかけほし給ひし櫻とて。朽ちて残り。花皆散果てたる下にて。酒などもたせて。暫
くありて。片岡。清水。明王院に到りて夜をあかしけり。

九日。朝に立出でぬるに。明王院のあるじ。あしたの原まで壺を携へて來れり。むかひの峯な
ど云ふ峯。打震みて。まことに名ある所のさまなり。人々歌あり。
かすみけりあしたの原は明ぼの、春をむかひの峯にのこして
紹巴。

あき出づるあしたの原の名残あれや春の一夜をふせるたび人
今朝しも餘寒けしからざるに。温め酒にあらざる盃をひかへて。紹巴。
春ながら身にしみけりな吞込むもあしたの原はひや酒にして
あしたの出立。常よりも取繕ろひたるに。あしたの原はとよめるはいかゞとて。彼の人に代り

て申しかけしり。

しなてるやかたをか程の飯を喰ひてあしたの原といかで云ふらん
各々願を解て立別れぬ。これより達磨寺に参りぬ。達磨太子の像。並びおはしける側らに。
二つの大石あり。一は伏したる石にて。達磨の姿を残り。一は立ちたる石。太子の御形と申し
ける。是より向ひに一の石あり。春日大明神の影向石といへり。さて法隆寺にと志しけり。南
無佛の御舍利出で給ふ時刻定まれり。遅くもやとて。駒うち早め参りけるに。舍利講二三段よ
ませたる時分に。聽聞隨喜せしに。事のをはりに。舍利出でおはしましけり。この寺の脇坊
とて。年老ひ事おかしき人。内陣へ参るべきよし申せしかば。参りて靈寶拜み奉る。様々の物
ある中にも。梵網經。御身の皮を外題の紙に之を用ゐ。御血にて銘をあそばしたる御經。たぐ
ひなく覺え侍り。かくて龍田に行て泊りぬ。日くれ方にたち出で。社頭にまゐり。このあたり
の名所ども教へられけり。ならしの岡。神なび。龍田川。岩瀬。小倉山など見渡しけり。この
處のあるじなる人。二十餘りなる出でて。物語りしたり。親ある人なり。父は慈あり子は孝
ありて。今の世にはたぐひ少きよし聞えたり。歌の道にこゝろざしあるよし聞えしかば。二首
の題を出して人々よめり。

落花隨風

枝にまた返らぬ花を吹きかへしかげさへさすが惜むとぞ見る

名所春曙

名残あれや明ぼの霞む立田やま夜半にもこえて見るべき物を

あかつきに至りて木綿付どりの聲々聞え。所のさま身にしみけり。

十日。信貴山に参るべきとて出立ぬ。かのあるむの父なる人先立ちて。龍田山にて松の枝をひ

き撓めて茶鬻を作り。やがて松の古葉松かさなどいふ。あたりは落ちたる薪に拾ひ焚き。茶具な

ど興ある者ども。酒肴さま／＼持たせて待居たり。あまた／＼び盃廻り。茶などすゝめて立ちぬ。

信貴山に到りて。福生院といふ伴ひきけり。毘沙門につきて。その名もたよりありとて。本堂

に上りぬ。かけづくり三方残る所なく見えて。勝境たぐひなし。これより河内國八尾木の金剛

蓮華寺といふ寺をさして。行着きにけり。

十一日。けふは住吉へとぞ思ひ立ちける。こゝなる人のいふやう。此の八尾と云ふ所は鶯の名

所なり。よの常のは尾十二枚重れり。此の所のは尾を八つ重ね。優れたる由申しけり。

契りあきてこゝにぞ聞かん鶯の八つ尾の翅八千とせの聲

と書置きて。是より神廟棟の木のある寺に参りて。彼の木のもとを拜み。本堂へまゐりて。太

子の御影開帳はなきよし語りしかど。案内知れる人。ひそかに申して開きにけり。

へだてあくどばり掲げて椋の木のみくつけき迄向ふ面かけ

紹巴。

いにしへのあとも木深き中とてもこまひきむくる春の若草

かくて住吉に詣でけり。日よく晴れて。参詣の人々袖を連れ。松原こゝかしこ酒もり歌うたひ。

心地よげなり。爰のさまを見れば。潮はる／＼と干て。男女貝拾ふとて田でたり。あかず眺め

入りて。

永居すなとばかり云ひしあま人をうらみて歸る住よしのなみ

袖のいろに深くそめけり住の江のきしかたのみはみな忘れ草

紹巴。

よりくるも誰かは聞かむすみの江やふかき霞にしづむゆふなみ

浦の景色たちうきを。歸る波にひかれて。天王寺に赴き。知るたよりもなくば。いかがど覺え

しに。只今の別當なる大覺寺の御内なる。野路井といふ人に行逢ふてければ。薬師寺と云ふ所

に宿して。さま／＼のもてなしあり。誠に太子の出向ひ給へるかとぞ覺えし。且は別當の御志

の行方とぞ覺え侍る。やがて所々拜みて歸りぬ。龜井の水のもとにて。神佛亡者などに水まる

らせなどして。

悪しき道六つをかくせる龜のみづ五つのにござりこゝに澄さん
曉。難波寺の鐘とて。心も澄すべきを。日ごろの疲れにや。聞かざりしを。紹巴あどろかしけ
り。いざたなき。慚愧の思ひをなせり。

かへるべき道しるべしてかり枕ゆめどの近き鐘のこゑく

十二日。けふは水無瀬までまかるべき。ほど遠しとて急ぎけるに。この寺の舍利。毎日巳の刻
に出させ給へども。かの別當の御使たる人。ことばり申して。願ひの程にいだし奉る。頂戴隨
喜限りなし。寺僧物語りして云ふやう。此の舍利は七佛の毘婆尸佛の雙眼なり。普廣院(義教)
の御時。都へ上られしかば。其の間龜井の水止りて。御歸りのほどより。元の如く出ける事。
又本尊は近き亂れに碎け給ひしをつぎ奉るに。御足聊か踏違へてつきしを。一夜の間に居直ら
せ給ふ事。近き世にもかやうの不思議あるよし語りけり。秋野と云ふ人。道まで送りにとて。
樓の岸。渡邊の大江まで。酒もたせ來りける。川のほとりにて數盃を傾け。爰をたちて。夕つ
方山崎水無瀬に着きにけり。未だ日も残れり。和漢一折すべしと有りしかば。夕つ
雲やいづれ山ざさかくる花ざくら

迎客燕談春

あめの日や夕べの空もおそからん

水無瀬三位

十三日。早朝に御影堂に参れり。男山八幡に参り。歸るさ釋迦のおはします堂に罷れり。ある
人酒勧めてかへりぬ。此程の旅のつかれ故。心地あしくて。けふは臥し暮しけり。
十四日。水無瀬より久我まで歸りにけり。はづかしの森の邊り。輿を立てたる所にて。其のあ
たりの名所も。大方こゝを限りならんとて。紹巴。

旅ごろも立かくればや寔れこし身をはづかしの杜の木蔭に
かへし。

かりそめに思ふ日數も積りつゝ早はづかしの蔭に來てけり
都出でし日數。二十日に成りにけり。かくて東寺の南大門まで。都より迎へに人々きたり。是
より乗物をかへし。打連れ立て歸りにけり。道すがら障礙なくして歸りし事など申し。野宮の
寺より立出でしかば。こゝに歸りつきて。いづれも名殘惜げに皆別れけり。やがて立歸りても。
獨り住の床はあれて。道すがらの物語りすべきたよりなければ。
語るべき事はかずく涙だのみ古きのきはの妻なしのはな
ぞかひなきや。

老の坂のぼり下るもこのたびを限りと思ふゝかきやまみち
今生の宿望。來世の結縁。満足するものなり。

天文廿二年三月十四日

吉野詣記終

富士見道記

里村紹巴

今年永祿の春も十返りの初め。久しくあらましの富士見る可き事を。頻りに思ひ立ちし日より。記し付る物ならし。此度の心ざしは。都にあり詫て出るにもあらず。行末にて頼める所もなし。奈良の京を離れて。一昔しのあなれより思ひ渡れる。橋立。玉津島。何れか先に定め兼ながら。先づ遠き所よりと心の内成る比。江村堯次興行。

春ぐさのうへはつれなし野べの雪。席に列なる曾谷康敬。張行すべきよし有りしを。秋迄など申しけるに。怪しみあへるに。關の東など云ふ事になりて。賢くも聖護院殿聞し召されて。

おほびえの春さへいかに富士の雪。と。被遊付候て。二百韻可被遊。愚句をもと仰せありければ。春きてやしる人を待つやまざくら

御入峯を祝し奉るばかりなり。

朝な〜風のいろそふやなぎかな
廿九日。殿下より發句可申との御氣色あれば。辭し難くて。

春の日の下くさもる〜いろもなし

夜に入り重ね土器敷そへて。殿下新卿王様。我さへも無くななど。御詞の匂ひも浅からざるに。源氏物語の宇治の巻にかゝらひける。咎められしも思ひ出で。月に擔ぎ出でたらば。踏歌ならましとか云ひあへる。朔日には小野内言上苑日のため。萬句執行。

梅が香やそふもろこしの峰あらし

五日には。玄哉聊か口訣の事傳授。喜びにとて。

色も香も知るにをしまむ花のえだ

花やかなる席。味ひも極りなき會となり。六日に餞別とて興行に。盃進めべきの色めかしさ記すに暇あらず。

かすみにもさはらぬ月の天路かな

七日には。故三條西殿稱名院殿御影前。昌休の印古道分て。夜に入りては。忍び〜の名残を惜む中にも。馬場康清とて若き人あり。三年のあなたより風雅執心とて。獨臥をも慰めらるゝ心の程は。過にし秋の比の會に。

松に蕪ちぎりはあきのいろもなし

彼の人に借老の添寝も。憂き東路のものほし草なり。十日には朝曇りも覺束なきを。皆々誘なはれて出る。袂のこど〜しきも。空恐ろしうて。黄老には立ちながら。櫻の御馬場にて盃取かはし。弱冠は開山まで杯ありしかば。片邊はをくらかし。先きに立て。祇園まで笠も取あへず行き給ひぬ。今日しも申の日なり。富士涌出るも二十日なり。但書事記不詳傳聞之など云ふて。神前にて。觀世宗節同むく太夫も送りければ。聲々の手向行末を祝して。ある坊にて又酔の餘り。今日は暮して。月の桂の端に出でなど云ふて。心敬舊跡。又桂の枝ばしとて。宗祇在京の始め住める所こそよき所とて。酒呑みけるに。大津の馬早めて。迎へ數多來りければ。何となく行きけるに。若き人々は粟田口をさへ行過ぎて。我を松坂と云ひける。後よりの事は夢ばかりも覺えず。策馬の走井過ぎて。相坂と云ふ名を聞きて。醉少しさめ。日光院の僧正の室に入りしなり。十一日の夜。曉待和尚。名も知らるゝ鐘の音に。寝ざめせし朝の營み。善法坊とて情深き心を盡し。花光坊。圓藏坊など誘ひ。關の清水のあたりまで行き。道すがら會も數多くあるべきの約諾もかひなし。せめて發句せよと有りし故。

せき山やたいさくら戸のかため哉

進藤城州より。船よそひて來る由告げれば。打出の濱づたひに行き向ふ所に。栗津久昌院冬

こそ立なづむ駒も嘶くを。野路の笹原へと云ひ合へるに。石山世尊院一首の歌に着そへて。來り迎へ給へるに。會なども兼てはどありしに。思はぬ方の船出ならばとて。物語りしける次。我が寺にて十三年の昔し。金蒼。宗養。予。同吟千句ありしに。獨り残れるに。別れなばど。あじきなげなるに。思ひ出せば秋の名高き月御覽の事も。昨今のやうに覺えて。

秋の月見しかげ消るかすみかな

又秋にはと云て三井寺衆にも行別れけるに。光淨院とて。園城寺外の逆徒をもはからへるのみならず。近き頃は歌道をも心に掛るとて。酒持たせ出迎へられたり。勢田の山岡孫太郎は。よそ目さへたゝならぬ若人なるに。小鷹すゑ馬早めなどして。柳が崎まで又暮へり。世尊院道九近き由縁なりければ。歸り入りて張行あるべしとて。光淨院の發句所望。

枝分けてうぐくやながれ川やなぎ

舟をば渚漕がせ。日も入り方に。坂本の北浦より城州の構に差上りけり。二日ばかりありて。水莖の岡の屋形の霜の降るはも。妹と寝しだになどかこちて。津田の細江。登蓮法師の薄の朽ちせぬ古事に心移せるに。威徳院棹さし向ひて。城州の舟にも盃ありけるよと。乗移り日を暮しけり。佛涅槃の日より。光岳和尚。七回に千句すべしとて。其の第一發句ありしかば。花をけふ摘みてしほれぬ袖もなし

孝子平井加州。同じく威徳院。布施新藏人。平井駿州。己れ／＼心を合せての事疎かならず。嫡孫満座の已後出席ありて。若衆を集め。舞臺など假初ながら構へて。肉身の歌舞の菩薩出現。宗和往生の庭かと思へり。十九日には。心前一人伴ひ。昌叱は都の留守にと云ひて。廻り逢はん玉の緒。山の裾野を別れ行くに。威徳院能せし若衆を持し來り給へり。取り／＼に盃に。一里あまりの道に日を暮し。布施山の城の麓にて。賢友色々のいたはり有て。廿一日阿育王石塔寺勝造坊にて興行す。

あさ露はしぐれに庭の木の芽かな

十年のあなた。山まで楓一見せし歸るさに。觀道坊のあたりにて。

ぬれ／＼ぬ松や一木のむらしぐれ

とせし事を思ひ出で。觀道坊の墓所に詣で日野に着きぬ。蒲生兵部太夫殿。智閑宗祇へ傳授。古今の箱などの事を語りて。興行あるべきなれば。

めぐり逢ひぬ種まき置きしはな盛り

嫡男鶴千代殿。深夜まで御長座ありて。酌取り／＼うたひ給へり。翌朝宗祇仁聖寺と云ふ所に。はる半ばふゆの梅さく深やまかな

ありし木の本一見に行きて。

春なかばふゆの梅さく山ざとの昔にのこれる人のおもかげ
と口遊びて歸りけるに。買秀河原まで送り給へり。布施賢友。河井利康に立別れ。甲賀頼宮を
過る比にぞ。齋宮の昔しを思ひ出ける。三躍の峠より三町ばかり下りて。鈴鹿の御前神さびた
るを拜して。祓へしける假屋の柱に書き付けしる。

ふりはへて急がざりせば鈴鹿山花にいくよの宿りからまし

一里ばかり過ぎて。辨財天川を隔てしあり。俊成卿の丸木橋妙音に故事あり。思ひ合せらる。
同じ程過ぎて。關の地藏とて。行基菩薩の御作。堂のうしろに櫻木と云ふ枯木あり。是や鈴鹿
の關ならん。定家卿の歌故に名あると云々。廿五日。鷺山正法寺。關民部大輔何齋開山本願の
地なり。清庵和尚。前大徳寺大穎和尚。御閑居に滞留せられしに。廿六日に。門前柳色寺前に
て花見せらるべしとて。後の山に上るほどに。十町に餘り。岩屋にこそあれ。羽黒影向の跡と
讚し給ひて。和尚。

年々にすかへる鷺のやまとてやちとす羽黒の餘りなるらん

と書付けて拜殿より下るに。靈雲見桃花悟道も斯る所からとや。暮て夜語の席に。寺外の衆
一折すべき由和尚所望。

花の枝を折れば香もなしいろもなし

有梅軒とて。故ある後胤なれば。中々記せず。予が入寺の日。伊賀へ行き給へるに。留主より
告げければ。夜を掛て歸り給へり。彼の山莊にて。廿九日の朝野營あり。龜山の麓を過ぎて行
けるに。和尚より峰の早蕨谷の所せきまで持たせて。同宿東岡と云ふ所にて持たせ給へるを
取散らし。稻生藏人殿武館に入りし。晦日。一折あり。

あき津舟庭にかすみのうみべ哉

朔。上巳なるに。白子觀音寺に不斷櫻とて名木あり。賢輔句あり。彼の寺にて興行。

後ぞ見ん春はそとにもさくら哉

満座の後。清渚の玉藻拾はんと。門外に出でけるに。網引舟より何よけんなんと求めて歸りぬ。
桃花節には。神戸藏人どの御城に入られぬ。御興行。

末いく代はやし始めのその桃

五日に神宮にして。東靈五折。西川清右衛門 兩三人して興行。河曲郡

山川のめぐり田返す裾輪かな

六日。雨に留まりて。明日朝わたりの八十瀬の末まで。高田孫左衛門盃さし替して別れ行く。
袖濡れくして大福田寺に早々着きぬ。桑名には近郷喧嘩ありて。迎ひの來るを待ち。月に道喜

の宿へ入りつるには。舟あまたして尾州へ渡りぬ。茨江と云ふ川島を眺めやるも。懐かしき心地せり。本府と云ふ所にて。清須より小牧へ着け侍るに。明院兼てより乗物など國境に云ひ置かれたるに。先にも飛脚ありしとて。義元など籠まで。迎ひに出で給はりし。舊議智の故都の内より心安くして。旅の宿とも更に思はず。風雅に心染まぬ人さへ。忍びく。春の日秋の夜に思ひ出るとも盡きざらまし。張行などは發句にて見えなんかし。於ニ妙覺寺。

於ニ善光寺如來別當可休。

庭やうみ春雨のつゆのたまり水

於ニ蜂屋兵庫助頼隆。

待惜むうまや半天はるのつき

於ニ瀧川右京進秀景。

こゑなきも色ある萩の若葉かな

賀島順親興行。

吹けあらし木隠に朽ちば花も無し

松田直張行。

木々をかりて己が枝なし藤の花

於ニ大野木義元。

春ぐさの花もて水をつゝみかな

於ニ神松寺。天神社僧。廿五日。

はる深き若葉もむめはみなみ哉

大野俊秀張行。

山人の手を取り出るわらびかな

三月盡。坂井貴除にて。

明ばなつと思ひけんさへ春の暮

卯月二日。

面かけは誰たちかへん花ごろも

於ニ天王坊。白山社僧。

卯の花の雪はしら根の木のみ哉

於ニ誓願寺。

一こゑやこゝろのうちの蜀帝鳥

於ニ大寺新作庭。御所望。

茂れなほ松にあひあひの花の庭
於ニ木下助兵衛附亭。

くれなるや葉さへ花さへ深み草
富士一見急ぐゆゑ發足とて。張行成らず。加藤貞政所望。

ながしとてうちもねん夜か時鳥
森島貞仍所望。同前。

はる秋のはなやなつの草の露

廿二日。今春太夫勸進能芝居より。九坪松元院に赴けり。春送り夏を向へたるなど云て。聊か送りの衆ある中にも。妙國寺宗直にさへ別れ。日を暮したるに。築田出羽守息酒持たせ給へるに醉を重ねて。明日の一折に。

ほどゝぎす聲うゑわたす門田哉

廿四日。鞍掛と云ふ城をも。出羽守知れる所なれば。十里に少し足らざる道。心の儘にて。田樂が窪とて。穩しからぬ山の峠などに。迎ひ數多待たせけるをも歸して。三河の堺川を前にせる社福寺に入て。廿五日。所化あまた有り。丈室 西山衆 御興行。

風のそよぐひかりか岩に飛ぶ螢

廿六日。長壽院にて。

杉むらの木がらしは茂る端山哉

廿七日。八橋までは。尾州休存玄以なども送りがてらと行連れたるに。あたりには花もなし。少し求めしに。洲の杜若 抽心長とやらんを持て來りつゝ。杜若と云ふ發句せよと云はれければ。

かきつばたあり居て暮す木蔭哉

荇屋より迎ひの馬早めて。午時に無仁齋に至りぬ。今日の發句にて興行あり。又尾州に三井寺 玉林齋徘徊のゆゑありて。山崎の城と云ふにて。興行あるべしとて。所望に付て。

ほどゝぎす諫むるを聞け旅の宿

筆にまかせ畢んぬ。廿九日。岡崎へと思ひ立ちしに。八橋のかきつばた斷絶。遺恨を歎きけるを。代官齋藤吉十郎聞傳へて。八橋面馬場と云ふ在所へも。使に樽そへ。郷人の古老の名主に下知して。可三植置よしありけるに。諸國の旅人根を引て行くゆゑ。跡もなきよしと云々。實にもと思へるは。橋柱さへ削り取らるゝと見えてなり。西は下馬堂と云ふ。跡には松一むら。澤の半ばに時雨の松と云ふ一本あり。餉食ひける木蔭なるべし。東に少しの岡あり。此處に石塔のあるは。業平の印と云へり。在所の人に杜若荷はせて植けるに。田に成せる地を業平と答

へたる田を。則ち今よりして杜若寺に宛行ふよしなり。無仁齋永代の折紙書。早稻を引捨て。手づから植渡して。石塔のもとへあがり。兩郷の樽に露ばかり。予小牧より持せたるを諸共に酌かはし。餉を神前より出し。昔し語り成りて。長坂彌左衛門へ。一甫など矢矧の宿迄こり橋より。川上の左方五六十町を隔て。あかすがの渡りなり。眺め渡りて。仙庵を道去れる人にして。帝都誓願寺一年のこなた。御在國新地の室に入り。端午の前日。石川日向守興行。六日。又鳥井伊賀入道亭にて。

藤かをる黄昏にまたあふちかな
孝精出席先達の作意。名残ありながら。五月雨に成行かば。小川さへ洪水になるべければ迎。歸るさの再會を契りて。朝立に御三人さへ送りに出給へり。同國吉田と云ふ。城守酒井左衛門。同臨川。風呂に入り。山海の景二階にて眺め。釣竿を寄せ來る。港なれば味ひ一入なり。八日に門外の清壽一折興行。

水こもりもす若苗の緑りかな
九日に。仙庵にも二村山近き野中にて行別れ。鹽見坂を聊か下りて。白菅濱名橋の跡。今切の渡りにして。富士見始むる日より。駒に任せて道も覺えず。口つぎのつなたへなり。引間に着

きて曉より雨ふり出し。天龍の漲音あびたしく。見附の里を過てより。淤泥深きこと。夏馬の助けなかりし昔しの唐に渡れるかど覺えて。掛川の里に日を暮し。夜も明方の晴天。東雲に行きて。日坂に至りぬ。商山の古藪を用ゐ。やゝ小夜の長山に上りぬ。雪齋大原和尚開基一字。影前立寄りて獨酌。盃面に狂句のうかべるを。壁に書き付けゝる。

けらなき山もうらみし越て猶甲斐が根見えぬ五月雨の空
麓に菊川と云ふ名も匂ひ浅からざるを過て。金谷と云ふ宿にて。大井川渡す人をかたらひて歸りけるに。小夜の中山。長山と書くもさもこそは。二三里が程山の巔一文字にして。さほ山の面影はさらなり。貫之土佐日記によこほりふせると。男山を川尻より見て書るも道理也。鳥田と云ふ所に。まだ暮やらぬ空ながら。宗長出世の地と聞きて泊り。夫より宇津山に到りぬ。我入らんとする道と云へるは。右の谷を見おろして。今は峯に付て上りぬ。誠に葛楓は茂り。木の下暗き五月雨の餘波に。袖もすゝろに萎れ。心細くして里に着きぬ。關の戸近き。鳥の子を十づゝ重ね上る術よりもあやしき名物あり。俗言に團子と云ふ。忘れ難きまゝ口内に吟むつ。行く程もなく。丸子と云ふ里に着きぬ。昔しはこゝにや有りけん。團子を和して。此所の名どやしけんぞ。獨言に思ひけるなり。又宗長山庄の記。都に所持せし一冊。筆跡芳ばしく。良分入るに。道のほど一町餘り小川をわたり。別墅を訪ふに。此の寺は誓願寺と云ふとて。小

僧を案内者に出されしを伴ひ行き。道の半に柴屋ゆかり妙心寺派嗣法陽叔に逢ひ奉りて。谷を三町あまり左りの方へ入りて。庵室を見巡るに。一休和尚墨跡にて。柴屋と古文字。又宗長像掛れり。影をうつす事。命のうちは戒しめられしが。但し亡き跡にも留めば。萌黄の衣服に墨染を上にして。水巻の足袋に扇子をそばにしてと云へり。賛には逍遙院殿御詠二首。御自筆あざやかにして。庭上には。廿六年を重ねたる石上縁苔。宗長の卵塔は破壊して。古木梅生じたり。一年國の亂れに回祿せり云々。東に天桂と號する山あり。此の僧周桂宗牧の古へをも語り給へり。斯ても一夜はあらまほしけれとも歸りしに。長公畑をひらき庵を結べる片岡を教へ。今がたの如く住居ける。二時の營みの園などに行き伴ひて。暮々に府中の宿に入り。十三日先不二淺間の社頭に詣で、已後。長善寺一花堂山號御住持。御在京の時より尊友故。閑談しばらくして召連れられ。三條西殿于時大納言殿稱名院殿御方候都の事。稱名院殿五年の昔し。今はどならせ給へる事まで問はせ給ひて。退出の折節被_レ遊かけらる。大びえも夏やは見てしふじの雪

傳ひに村松と云ふ所に行きしに。原にあまたの馬あり。神の牧と云へり。少し里中を離れたる院内にて。當妙心寺東谷和尚仰せ下されたる。歴々の非時あり。跡味にとめられたるに。清見寺月航和尚より御使にて。眞土山越え急げとあれば。雨聊かふりぬるを打拂ひつゝ。袖しの浦を打すぎけるに。所から海士人の墨陀川原。庵原より丈室に入り。小夜ふけて花やかなる盃の臺。和尚手づから持出し給ひ。漢和一折ありて寝る。曉きの鐘に起き。急ぎ磯の方へ行きけるに。普光院殿の御座石と云ふあり。快よく夜雨はれて。富士の南に朝日も出で。伊豆三島の北。雲の足高山浮島が原より此方。田子の浦を教へられて眺めやりぬ。磯づたひにこぬみの濱と海士人も云ふらん。實に我が心は岩木の山ならんかし。など云ひて寺に入りぬ。日たけて門外に出でけるに。聽呼を先きに遣はされて。干瀉の岩間に。少し魚の残りたる片つ方に盃浮べ。波に寄りたるみるめなど拾はせ。勧め給へるに別れ兼て。府中に暮してぞ歸りける。廿日に大守に御禮申し。廿一日。三條西に於て御張行。淺からぬ道はこの夏野かな。廿三日。三條殿へ大守渡御ありて。俄かに發句仕れと有りければ。我さへ忘れける故記せず。廿五日。名號百韻三條殿にて御興行。大守出席。晦日。朝比奈下野守興行。大守出席。絶えやらぬ根や年をふる石の竹

五日に。一花堂御興行。

風ふれてはちすは花のくるま哉
七日。富士淺間社司。新宮殿にして。

夏の日も蔭をやめぐるふじの雪

八日。清見寺より佳詩一章度々ありて。今一度は三保の松など仰せあれば赴きける。興津入道牧雲と云ふ人は。清見寺あたりの知人なりしかば。宗長の昔し寵愛にて。艶書など今は懐ろにせるとて。墨染の袖の香も身に入る物語りありつゝ。此の爲め御張行あるべしとて。發句。和尚の御所望。

月すししなげや清見がいそ千鳥

夜に入て明る日まで四十四句。午時に果てし船あまた引寄せ。海士人かつぎ上げたるは。小濤綾の磯の底にもや通ひけん。あわびさたあか都にて目馴れぬさま也。盃に富士の雪を傾けて眺めやるに。裾野かけて隠れなき沖中にて口ずさみを。牧雲齋城のもとにて。十日興行あり。

夏ぐさはゆきに生ひたる裾野哉

山深き片よりし方なれば。蝶のこゑして後も残る日に。宗長牧雲の古へ同じ枕言の歌など。朝の文の筆の便りの注釋の巻物を知らず。蝶どもなれる。宗仙と云ふ世捨人などの物がたりに。

長公の席に陪する心地せり。十一日。興津河原のくぬぎ原打過ぎて。佐田と云ふ方へ行く。函谷關も是には如じとぞ覺えし。近き國々海山残らず見えて。清見寺に入り。御齋を行ひ。狂歌あまたよめり。心前口ずさびにせし發句。

夕だちやしたゝるゆきのふじ風

和尚御脇。

披軒掃暑埃

一折ありて。江川と云ふ近國の名酒。今日までは府中にて聞きしばかりの物を味ひて立ちける。旅の衣に裁かゆ可き色々をさへ贈り給へり。寺より里ならんかし。別れ兼奉る胸臆。言の葉にかずく。現はるれば。などか筆に残さん。都の孝甫とて。宗長舊跡に住みける遺弟。十二日に興行の事なれば。府内に入る。

あどまでも風かうばしき扇かな

上下心を合せ給へる席と見えたり。十三日には。西殿へ召されて。相州の太守より嘉肴。江川魚なりとて。御前にして身のほどを忘るゝばかり下され。翌朝又持たせられ。大黒天子足もとの寶さへなり。頃會席ならぬ日に祇候して。いぶせき旅のやどりを忘れ侍りぬ。逍遙院殿の御嫡孫として。御作意池の波をくませ給ひ。稱名院殿より。和漢有職の家をつがせ給へるものか

ら。などしも斯る田舎渡らひには。年を送り給ふにや。剩さへ源氏の理淺からざる事を。又世に類あらんなど思ふもの。近く國に在るよし傳はり聞くに。不_レ窺_ニ玉淵_一とは誠なる哉。斯く云ふとて。我に賜へる所を知るに非ず。替古の二字の心を尋ねれば。記録を見てもなごか惑ひ侍らん。抑享祿の末。宗祇の名ばかりの人なきにしも非ず。予に稱名院殿今古集。殊に御筆を染られ。文字を許させ給ひて後。やがて薨せ給ひしかば。傳授をば惠雲院殿近衛殿大閤御所より。聊か承たまはりながら。自らになづらへて思ふにや。知り難し。富士の嶽は世と共に盡きざるの名を識し。三條殿名高きの限りあるは如何はせん。比叡の山を二十許り重ね上げたる程にても慰みなまし。今都に誰かはと譬へんも。思ひわびたる草枕のひとり言を記し付るも。淋しさのあまりなり。十七日。神尾以山とて。旅宿の隣くさ屋の酒店にて。汲よるに中垣もなきいづみかな十八日には御屋形御興行。

涼しさをまねくよしるし玉の庭
御満座以後。二十首御當座あり。御席の作法。冷泉殿于時中納言益卿御傳授とて。執行せらるゝ事どもなり。十九日。和漢御興行。廿日。淺間に於て流鏑馬あり。長善寺へ歸るさに参りぬ。何くれとなく。舊儀のあまり。在府事任奉つりし首尾なれば。廿一日歸京の事申し上げしに。瀬名尾

州の仰せ付ければ。旅宿へ忍び入らせ給ひ。秋かけて在府申せとの事。御屋形より帷などの御賄なひをさへ仰せ出ださるとて。私にも種々持たせられ。此の尾州は大原和尚の床下に臥し馴れ給ひしも道理と見えて。二毛の行末さへ思ひやらる。形より心なん増りける。大原和尚の魂も留まりけるにや。今の世には有りがたし。則ち御屋形にお暇申し捨て。木枯の森へ以山同じく子岡を伴ひ。ある川を渡り下草ふみ分けて。建穩心藏坊へ行きにける。情淺からずして一折あり。人に云ひ傳へる間もはや空しきとて。残り多ければ残し置きける。

夏の日のもりに 風の風もがな
夜に入りて歸りぬ。様々の催しぐさもはかなきにつけても。御屋形様にて。宗祇香爐宗長の松木盆。翌日御會席の半に。御手づから持て出させ給ひ。千鳥と云ふ香爐銘物拜見忘れ難くして。丸子に到りぬ。蕎麦品祥英西殿へ日々参上せし故。恩深ければ一身慕ひ給へり。其の日は藤枝と云ふ所に。以山丈人を遣はして。心を運べる寺中に明しぬ。旅宿ならんには違ひて。掛川にても寺に明して。また暮ぬほどに。引間近き頭陀寺に赴きけり。爲雲とて十年あなた永く在洛の舊友なり。嫡子都築宗左衛門頭陀寺へ在府より云越されしかば。昨今天龍まで歴々馬むかひなど數多せるとて。今日打連れてより。都の心地せるなり。行水などより初めて。艶なる事うべならずや。爲雲と云ふ人。宗長尊の弟にして。十四歳より二十二歳まで。宗長の懐に育

てられたる由聞き侍るも。記して一折せり。

又ぞ見んふる枝もしげる萩の露

舊友ながら。此のいくみ近年本意のむかしに立歸るを祝したるばかりなり。廿七日。伊那佐細江見るべしとて。皆々誘ひ行きけるに。本坂越は道止まれるとて。氣賀西光寺に宿し。曉起出でし。

秋ちかきまどを開けば木の間より西に光りの有明の月

廿八日に。山村修理亮わりなく止めて一會。

夏をとへばいなさ細江や秋の聲

暮かけて。爲雲千手院にも立別れ。小伊那佐の時にかゝりて。あまつ港詠めて。鷄鳴濱名の方へ航して。曙朗に修理に云ひかけしる。

遠江をあさ渡りするふなびとはとへば濱名の橋も白波

三河堺川近くまで送られし名残を形見に。返り見て又吉田に入り。朝より岡崎に足を休め侍るに。誓願寺五日に一折とて。

風は秋西にむかはぬそでもなし

七夕の手向を荊屋無甚齋にして。

哀れしるや星に手むけもかり衣御城内にして。野州の鹽石をたかせ。御門前に湛へたる潮を汲ませ給へり。川狩の里魚など。手づからと云ふばかりなる。御もてなし給ひける。八日には緒川清水右京亮の一會にて。

昨日あひし星崎しるし泊りぶね

翌日に長坂彌左衛門。去る夏の時。八橋にて東へ急ぐ時。登りにと約諾せしとて一折せり。

花をいもみ萩に水行る野末かな

十日に。荊屋野州の御嫡子緒川の御城に。參宮して歸るさに。清水權之助へ立寄り日を暮し。

定宿長坂彌左衛門へ歸り。夜の更け行くに。御城より躍り入り給ひ。十一日。仙庵にて興行あり。

萩のこゑ山したみちや濱づたひ

美肴殘餘ありとて。十二日。一箸すいぎ魚膾とこそ云ひて數々用ゐ。濱邊の月にたゞずみ。盃

蘭盆會の手向をば又荊屋にて催せり。緒川より荊屋へ舟十二艘に灯籠を懸して。風流をかけ給

へり。海上の逸興は都にては見馴れぬ事どもなり。十六日。曉の潮に引かれて。龜崎と云ふ所に網を下させ。みるめかづかすべしと有れば行きけるに。珍らしげなる盃さし出したる女に云

ひかけしる。

宿りせばよろづ代もへん龜崎やみるめかひある浦の苦屋に
又二里ばかり南の方。熊野崎とて。三熊野へ向へる洲崎へ漕ぎ出で。大濱稱名寺にて納涼せし
折節。衆僧の御所望に。

三くまのうら風すし秋の海
十七日には。荇屋に於て水野々州と興行。

流れ来て一葉も末は千ぶねかな
十八日。齋藤助十郎亭にて。

聲やいかに秋にかはらぬ松の色
十九日。岡崎より竹田法印よき酒を求め出し。色々を加へ加齋慶忠にそへ給はり。酔にまぎれ
舟押出し。緒川御城にて御會あり。

咲きそふやいく百草の花ざかり
大野へと赴くに。逢坂と云ふ山本まで。緒川同名など送りにと有りて。迎ひの棕原と云ふ人待
つほどに。掛樽取出し立別れぬ。翌日石川參州御興行。

うら風をまち取る岡の葛葉かな
廿四日。御城御興行あるべきを。出陣の前日なれば。種々海中珍らしき物を集められて。酔臥

せし許りなり。此の地は人の志しあると覺ゆる。閑窓老人に便り有りて。宗牧度々といまれる
後歌贈られし上句を。雁くしい湯風呂。其外何やらんくは。夜の紛れなるべし。宜なる哉。
廿六日。於御隱居。野州。

島々もなびく霧間の朝戸かな
遠景唐信などには見及ばぬ。廿七日。小倉導場來相興行。

身に入るや夕汐風の朝すいみ
満座普くことに添出で。舟うたに聲を添へたり。廿八日には閑窓にて暮し。まはしと云ふ所ま
では馬にて行きけるに。圓淨坊連衆たりしに面向ひ。茶の湯などさへ汀に構へられたるを取具
して。舟まで二十町あまりありけるに。木田城よりも濱底苔を敷きて待たれしに。大野近所慈
光寺隣松院も携へしとて。遠干潟に押出され。來相ばかり誘ひて。熱田に入て急ぎけるは。加
藤全朔駿河へ下りけるを。延引しての會とて。度々迎ひのあればなり。

露わけば分しを思へうつの山
二日には。宗長のみ來宿せしに瀧坊にて。

宿かるもをばなが本の名残かな
先師は伊勢千句聽聞せしに雇ひし程の人となん。四日には。加藤圖書助の新地の構へまで。海

ほり上げたる松蔭近くありて。出入の汐早き所なれば。

みつ汐の入江やたにのあきのかせ

半日に果てより。亭主の嫡孫六歳にして。怪しき太鼓の音を打鳴せり。去間成事。記するに暇なし。五日には。座主御坊にして御興行。海藏門にむかへり。海を隠すと云ふより。五六町隔てて、人家となれるなり。

朝ぎりの入海かくす木の間かな

七日に。法華堂本遠寺にして張行。

わたつ海の玉やうかべるそらの月

八日は。放生會と號して神事あり。於社頭御神供以後。神宮寺藥師堂に於て。神興行幸なる。先づ給人樂を奏し。社家の人々御寶物を持ちて御供たり。堂内には社僧四箇法を用る。後に大師護摩壇。聊か西の方に楊貴妃の印とて。五輪の石塔苔に傾きて立てり。九日には。竹田小兵衛とて。去年昌叱許の宿をもせし人なり。庭には葛茂らせ山里びたる所にて。

眞葛はふ庭に松むしこゑもがな

十日に。鳴海瀉近き所にて。道家與三兵衛興行。祖父も宗長道の記に入りたる行方とて。忙はしき身ながら執心淺からず。加藤圖書助馳走なれば。親しき人々を將ひて勸められし。酔の後

に舟にのりて。圖書助庭に舞入り。足元亂れがはしくして。夜更てぞ宿に歸りける。十一日には。休足のあらましを。寢覺の里の上山崎と云ふにて。玉林齋 寺住侶 頼りに張行の事まで望みければ。俄に初一念を。

里とほき山もねざめのきぬた哉

夜に入て鹽瀬を迎るほど。手を取りく讚鞍橋に上る。此の名は常宮本地閻魔王宮にておはしますとて。三途川祖母丈六の像あり。十二日。嘉祐とて日破明院近き社僧興行。日本武尊東にて向火のとき。燧を崇めたる所なり。七社一なり。神祕略之。

いなづまは空にうち出す光り哉

持室坊とて行者興行。

なれく曉づきやすみのそで

嘉祐とは縁者ゆゑ。夜をかけ二百韻なり。十三日に。阿波手の森門前の妙勝寺興行。森の東に反魂香焼跡。又森下に社あり。其の下藪に香のもの入りし瓶あり。

野分にやあはでの森の初かへで

名月には津島の一見に行きけるを。坂井助兵衛田中に榛の木を折かけ。色々を持せられしに。程うつりて宗牧を尋ね入るに。息孝行の人にて。社頭に引きて夜更け行けば。橋の上にて月嘯

きて。醉中に狂句あり。

月をこそ都さぞなのこん夜かな

宗牧に因淺からぬ人にて。都の住居年を経ぬ。桑名へと思へるを。長島一向念佛坊主城敗れしに。尾州の太守出陣なれば。甚目寺以玉かへり行き。時雨さへあはたしき中に。舎のまめやかさ。馬などかひくしくて。熱田に入りて。行末如何にも思ひやり。草履解くほど。仙庵の川より覺束なしとて。智多郡の人のしるべの文あり。又山崎城より玉林齋來り給へり。力を得て安堵せり。淺井四郎右衛門など酒持せ夜をふかしぬ。十八日。大高城より水野防州迎ひ舟を。加藤庭に押入れたり。圖書助の舟二艘並べたるに。嘉祐道家亭主さかづき取亂し急ぎけるに。思ふ方の風吹きて。舷を叩き唄ひかはし大高に入る。是は銘城にして。唐人の傳詩を贈りし所なり。城は松風の里にて。麓は呼つぎの濱なり。仙庵を川より來り迎へ給ひければ。

呼つぎの濱べやきりに渡しぶね

夜半過ぎ西を見れば。長島追落され。放火の光り夥しく。白日の如くなれば。起出で。

たび枕ゆめぢ頼むに秋の夜の月にあかさん松風のさと

明れば防州など馬にて來りぬ。寺中に行着きぬ。廿日。夜半より橋に出で。藁など一把づ敷きて水をまちなど。楓橋夜泊も事かゝらしと思ふ。閑窓老人聳の石川三州。重阿。來相は楠ま

で送るとなり。あけぼの、港を出で。楠に着きたるに。尾州の先勢暮かゝつて云ひ傳へ。騒がしさは中々なり。春通りしに引替へ。ゆき山と云ふに舍りけるに。廿二日辰の刻には河曲郡家は烟りに上りぬ。儀俄と云へば。甲賀にての大野知行なればとまり。尾州まで連歌執心にて迎ひに下りける。祐運の馳走にて。送りなど心安くして。永原へ行きける。前越前守道芥の墓に詣でんが爲なり。

廿六日。三井寺に押寄せたり。花光坊相坂まで。春送り給へるには惜げなり。卯月ばかりに遠行なれば。彼墓前に手向ぐさなどに。髮剃をうゑけるも。徐君を思ひ出してなり。

旅のそら覺束なげにおくりてし人はむなしき相坂のやま

不定世界驚きながら。廿七日如意嵩越しに都に入りて人界ははかなさよ。さてもく目出度やくと云ひ酔ひくらしぬ。心前兩僕片時のわづらひ無く。聊かの災難に逢はずして。留主昌叱縁者の者とおどがひを解き。假のころもを脱ぎても。かたはら淋し。ゆく末如何ならん。

永祿第十。八月廿八日。終記之。

紹 巴

富士見道記終

九州道の記

細川幽齋

今年天正十五。三月の初め。博陸殿下。九州大友島津わたくしの鉾楯を止めらる可き爲めに。御進發の事あり。息與一郎。同玄蕃允參陣の上。家を遁れ入道せし身なれば。供奉の事にも無かりしを。遙かなる御陣のほどを。徒づらに國に在るもそらおそろしき心地して。四月十九日に。船をば熊野郡まで廻して。廿一日。田邊を出で。其の日は宮津にとまり。廿二日。松井の城松倉につきて。明けなば立出づべき旅装ひせしに。雨ふり出で。終日晴れ間なかりしかば。松井子禪門と云ふ者出で、抑留し。盃かずく出してなぐさみ暮し。其の夜は止まりて。廿四日。いと能く晴れ。風も追手になりしと云へば。立出でんとて。足占山の近かりければ。

かならずの旅の行方はよしあしもとはで踏み見る足しめの山
 軍書に欲し必則莫令三問軍吉凶とあれば思ひよれり。かやうにして港と云ふ所より。辰の時ばかりに出船して。其の日暮の程に。但馬因幡の境。居汲と云ふ所に船どまりしける。旅宿い

と所せくて。上中下。らうがはしきかり枕し侍りて。

主従はたびにしあれば里の名の居ぐみにしたる假のやどかな

廿六日。伯耆國厨屋より船を出して。出雲國仁保の關に上り。見物し侍りて。それより磯づたひを行くに。錦の浦と云へば。暫らく船を停めて。

船よするにしきの浦の夕なみのたゝむや返る名残なるらん

かやうに口ずさみて。其渡り近き。加々々と云ふ所の漁人の家に留まりぬ。

哀れにも未だ乳をのむ蟹の兒のかゝのあたりや離れざるらん

廿七日。雨風あらしきゆゑに。加々より船出なり難かるべきよし船人申しければ。さらば徒らに暮さんも物うしとて。船をば浪間を待ち。廻し侍る可き由申して。杵築宮見物の爲め。かちにてたどり行く。道の程三里ばかり経て。木深くて山のたゝずまるたゝならぬ社有るを見廻りて。社人と覺えたるに尋ね侍りしに。是なん佐陞の大神なり。御神躰は伊弉諾伊弉冉の尊と教へけるに。しかく物語し侍るに。日もたけ雨も痛く降れば。衣あぶらんほどの宿り求めてとどまりける。

千早ふる神のやしろや天つちとわかちはむむるくにの御柱

廿八日。佐陞を出で。秋鹿と云ふ所にて。湖水の小舟に乗りて。平田まで行くに。生浦なりと

船人の云ふを聞きて。

磯まくら怨みやあふの浦ちどり見果ぬゆめの覺むる名残に

かやうにして暮れかゝる程に。杵築の社に至りて。寶前を初め末社まで。彼方こなた見巡りて尋ねるに。當社兩神官千家北島。いづれも國造となん云ひける。其の家々も見物し侍り。其後旅宿を借り出で。椎葉ばかりに盛りたる飯など食ひて。休み居たるところに。若州の葛西と云ふ者尋ね來り。對面し侍る。太鼓うつ人にて。若き衆多く同道あり。一番きくべきよしとあれば。左らばとて催しけるに。兩國造方より。所につきたる肴樽酒など。使にて贈られける程に。笛鼓の役者ども來込みて。夜の更くるまで亂舞ありけり。思ひがけぬ事どもなりき。

廿九日。朝なぎの程にきはしつるもの共歸り來て。急ぎ舟にのれ。日もたけにけりと云へば。心あはたしくして。

この神の初めてよめる言の葉をかぞふる歌や手向なるらん

遠く素盞鳥尊到出雲國。初有三十一字歌。とあれば。やうく字の數を合するばかりを。手向にしたりと云ふ志ばかりになん。此の短冊を千家方へつかはしけるに。兩司なれば。一方のみにては如何にやと主人の云ひけるに。俄かの事なれば。同歌を書いて遣りける。又當社本願

より發句の所望なれば。

卯のはなや神のいがきのゆふかづら

かやうに書きやりけるに。千家方より。今の發句は北島にて連歌たるべし。吾方にては百韻興行すべしとて。船の乗る所に追付て。發句所望なり。忙はしきに成り難きよし。度々申せしかども。どころの習ひにや。わり無く申されける程に。人の心を破らじとて思ひめぐらすに。折節時鳥のなのりければ。

ほととぎす聲の行へやうらの波

廿九日。石見の大浦と云ふ所に泊りて。明る朝。仁間と云ふ津まで行きしに。石見の海あらきと云ふ古事にも違はず。白波かゝる磯やまの巖そばだちたるあたりを漕ぎ行くどて。

これや此の浮世を巡る舟のみち石見のうみのあらき波風

夫よりやがて銀山をこえて見るに。山吹と云ふ城。在所の上にあるを見て。

城の名も断りなれやまぶよりもほる白金を山ぶきにして

宿りける慈恩寺。發句所望。庭前に楓のあるを見て。

深山木のなかに夏をや若かへで

温泉の津まで出で。寶塔院にやどりけるに。先年連歌の巻見せられし事などあれば。かたみに

百韻を連ね侍りぬ。

浪の露にさゝ鳥しげる磯邊かな

五日。出船するに。跡にても一折張行すべき由にて。發句所望なれば。當座に取あへず。

浮草のねに曳かれゆくあやめ哉

七日。濱田を出で行くに。高角と云ふ所なりと云ふを。舟より見やりて。石見がた高つの松の木の間よりうき世の月を見果てぬるかな。と人丸の詠せしことを思ひ出して。

うつり行く世々を経ぬれど朽もせぬ名こそ高つの松の言の葉

兎角して長門國にいたり。磯の上島々を見わたして行くに。かり島と云ふ所ありと聞き。誰れ

も世の無常なる事を思ひ出でし。

皆ひとのいのち長門とたのめども世はかりしまの波の轉がた

同じ國の浦。小畑と云ふ港に。唐船の着きてあるよしを。船人の中に語る者ありければ。さら

ば見物せんとて。遙かに船を寄せ。志ばし留めて。

我もまた浦づたひしてこぎとめぬもろこし船の寄りしみなどに

あみの浦波の高く聞えければ。

小鼓のとうの調べやあはすらんうつ音たかしあみのうらなみ

十日。瀬戸崎と云ふ所を出船せしに。風荒くして。高浪船をも越し侍るばかりなり。召具したる者ども。悉ひ心地たゞならで。色を失へる躰なれば。さらば漕ぎ返すべきよしを云ふて。山掛けて舟の入る程。三十町ばかりには過ぎず。されども千里をも行く心地なんしける。辛うじて宿りける在所に歸りしに。猶風荒くなりて。草木をも吹きしぼり。海の面はふすまを張りたるやうなり。何人の乗りたるとは知らねど。先に出でたる船は波に沈みたるなど云へば。命一つ拾ひたる心地して。其の夜は寝ての朝けも。尙きのふの名残にや雨風やまず。波の音高しほに競ひて見ゆれば。船の出づべきやうもなしなど。船人詫び合へり。さらば徒歩にて關の渡りまで行くべき由云ひ合ひ。馬などかり出して。十一日。瀬戸崎を出で。大寧寺大内義隆の果てられしところと聞きし程に。立寄りて一見し。夫より深山を分けこえて。同國妙榮寺と云ふにとまりぬ。住持の和尙出られて。終夜佛法の物語などありて。其のつとめての朝出で行くとて。

かたちなきゆめてふものを心とも法の庭に伏してこそ知れ
心法無形通貫十方とやらん云へば。思ひよれり。きこえ難くや。豊浦宮を過ぐるとて。

水もらぬ池のこゝろのふかきをもとよらの宮の鼓にぞ知る
手洗と云ふ在所にて。かれいひ食ひ侍らんとて。假の宿りに上る時。下々足を洗ふに。豆の

できて痛きなど云ふを聞き侍りて。

さし入れて洗へる足の豆おほみ馬だらひとや人の見るらん

關の渡りに着きて。阿彌陀寺に參り侍るに。其側に寺あり。所の人は内裏と云ひ傳へ侍る。寺僧に案内して。安徳天皇御影。其外平家一門の像ども見侍りける。彼の僧今昔の短冊など見せられしに。知りたる人の歌どもありし程に。

もしほ草かく袂をもぬらすかな硯のうみのなみの名残に

豊前國門司の關にて。

ふるさどに言傳てやらんひと筆もかきや絶なんもむのせき守

兵糧船多くつどひて有るを見て。倉梨の濱は當國なれば。

米ぶねは國々よりもつきにけり上げても積まむくらなしの濱

豊前の柳浦の名主とて。發句所望せしかば。

豊くにの山ぐち知るき早苗かな

同月廿三日。赤馬關を出で行きけるに。雨の名残にや。波風のあらき故に。小倉に泊りて。明る夜を籠めて舟よそほひして。筑前の箱崎をさして行くに。船人は是なん金御崎と云ふ所なりといふ。昔し鐘を載せて汀近く來りしに。遂に取落して今猶この所に在りと云ひ。日和よき時

は。龍頭など見ゆる由を語れり。勅撰名寄には。金と云ふ字を書きたりと覺えけるが。鐘にて有るべきなど、友達どもは語りける。次に万葉に。吾は忘れずまかのすべ神とやらん讀みたる事を思ひ出でし。

くれ渡る鐘の御崎を行くふねに吾はわすれずふるさとの夢
かやうに云ひ戯れて漕行くほどに。夕波荒く立ちて。やうく志賀の島に着き。金剛山の宮司の坊に宿りて。當社大明神の由來など尋ねけるに。春日鹿島も當社に同じ御誓の神なりと物語り有り。縁起など取出して見せらるゝ次に。波あらし潮干の松のかつら瀉しまより續く海の中道。と云ふは是れ當社の御歌のよしなりと。社僧の語られける。又香椎の神詠には。山より續くと一句變りたるなど有り。立出でし見侍りけるに。砂の遠さ三里ばかりも海の中を分けて。島に續き侍り。取分きて細き所は十町許り。廣さは十四五間ばかりも有り見えたり。文珠なども在しませば。橋立の事をも思ひ比べられき。當社は安曇磯良丸と云ひて。神功皇后異國退治の時。龍宮より出でし兵船の楫取して海上のしるべせし神なりき。暫らく打眺めて。

三笠山さしてや通ふ志賀のしま神の恵みのへだてなければ
名にしおふ龍のみやこの跡とめて波を分行くうみの中みち

此の兩首を書きて奉納して。廿五日期風の程に。箱崎に渡りて見るに。松原の遙か續きて。八幡宮は外面に向ひて立ちたり。戒定惠の三學の箱を。昔し埋まれたる所に。印の松とて古木あり。立寄りて。

そのかみに納め置つる箱ざきの松こそ千代の老しなりければ
日高く侍りければ。博多見にまかりける。爰は袖の湊と里人の教へければ。

いざらば共に濡さん旅ごろも袖のみなどのなみのまくらに
日も暮れぬいざ船寄せて寝もせんひしきものには袖のみなどを

廿六日。宰府は天神の住み給ひし所と聞及びしかば。見物の爲め罷りけるに。彼の宮寺は七年許りさきに炎上して。形ばかりの假殿立ちあり。舊跡の有様は。松杉の多く切られたるに。さすが所々に残り居り。其の後ろは青山聳えて。右の方七八町許りも有るらんと見ゆる所に。觀音寺ありて。寔に西都とも云ふべき所なり。飛梅も古木は火に焼けて伐り侍るに。若ばえの生む出で在るを見て。

鶯のはねをやとひて飛梅のかごにはいかで乗らで來にけん
夫れより染川を里人に尋ねて見に行き侍るに。思ひしには替りたる小川の淺き流なり。打渡りて。

老の波むかしに返れそめがはや色になるてふ心ばかりも
思ひ川にて。

暮るゝ夜の螢やあるべもひ川
此所彼處見巡りて歸りける道に。刈萱の關の跡ありとて教へけるに。今度の陣衆名乗らせ歸さ
るゝ事ある由を傳へ聞きて。

名乗らせてやうく返す陣歸り兵糧ごめやかるかやの關
此の次に。竈山はいづくぞと。案内者に尋ねしに。歸るさの右に高き山あり。是なんかまど山
なりと云ふ。昔しは竈門山寶重寺とて。山伏のすみける所なりけるを。近き年より高橋氏と云
ふ者城廓になしけるを。去年島津氏出で。あたり近き岩屋の城を攻落せし時。あけ渡し
けるが。此頃山伏の歸住となりしと申しける。五月雨の名殘。雲の掛りて見えければ。
立つく雲を千里のけふりにてにぎはふたみの竈やま哉
可也山にて。

茂り行くかやの山べに入りしかば秋よりつゆに濡て臥すらん
姪濱より。人の安吉の脇差を遣はし。目利して銘なども能く侍らば。主に成るべきかどて文あ
り。其の返事に。

脇ざしの代をしとへば安よしのなかでたゞしきめいの濱哉
廿八日。姪濱といふ所に到り。夫より生松原見に罷りて。

すゞしさを風の便りに言問はん今いくかあらばいきの松原
姪濱にて。或人。宗養の執筆せられし連歌の懷紙を見せて。奥書所望せしかば。

是も又ながれて末のみづくきの跡のかたみと書きぞくはふる
六月三日。姪濱興徳寺住持耳峯玄熊和尚。和漢興行ある可きとて。發句所望ありしに。公儀
此の所まで御成の沙汰あれば。張行は成り難かるべしと。發句を書き遣はして。入韻所望せし
に。

風かをる南をまつのとぼそ哉

社同六月梅

同八日。利休居士へ關白殿渡御ありて。暫らく御物語ありて後。一折と催されて發句仕まつる
べきよしにて。箱崎八幡の心を。

神代にもこえつゝ涼し松の風

雲間に遠きなつの夜の月

ほのかにも明行くそらの雨晴れて

松

日野新大納言

箱崎の八幡の内。關白殿御座所になりて。各參上せしに。印の松によせて祝言の心を。各によませられける。

つるぎをばこゝに納めよ箱崎の松の千とせも君が代の友
關白殿。箱崎の松原にて涼まるべき由にて。各召具せられ。志ばし御遊興の事あり。おほみき參り。謠どもあり。御當座もありて。

立出るそでのみなどの夕すゝみ片しく程のうら風ぞ吹く
くれ果てし歸らせ給ふ折に。松原に名殘思ふ歌。人々仕まつるべき由あれば。

松原にとまりがらすの聲をさへ羨まれぬる歸るさの道
六月十日餘りの程に。香椎の浦見にまかりて。

うなばらや潮路はるかに吹く風の香椎のわたり浪立つらしも
歸るさには。船をば遙なる千瀉の崎へ廻して。鞆濱へ徒歩にて行けり。

いにしへは爰にるもしの跡とめて今も踏見るたゞらはま哉
對馬の守護家對州より。此の歌一首贈られて。歌發句所望あり。既にはや出船のよし使の云ひければ。當座に書つけて遣りける。
敷島の道すなをなる御代に逢ひてめぐみ久しきはこ崎の松

卒因ニ和歌韻一

始識逢レ君情所レ鍾。向來相約對ニ開窓。帝都門外莫言レ遠。千里同風一樹松。

白なみのうつかた山のしほ風に涼しさそふる夕立のあめ
發句

遠じまに立ちくはゝるや雲の峯

六月廿五日。一折張行すべしとて。溝口大炊允の所望に。

なみの音もあき風ちかし西の海

あまさがる鄙の住居と思ふなよどつこも同じ浮世ならずや。と千宗易より云ひをこせける返事に。

あまさがる鄙には猶ぞ居たむなきどつこも同じ浮世なれ共

廿七日。關白殿花瓶あまた取出されて。草花を生けられたる御座敷にて。俄に一折催されて。發句仕ふまつるべき由あれば。

夏草に花のかならずたもと哉

すゝしき夜半の狭衣の月

志ら露のすだれのひまを傳ひ來て

松 由巳

七月四日。關白殿せきの渡りより御歸陣なり。此の時船にて參陣せしに。馬などもなく。其儘船にて南の海を見巡りて上らんと定め侍るに。秋風日々に荒れて出船ならず。六日まで逗留し侍りて。思ひつゝけしる。

あきと吹く風やせきの渡とまり舟

六日にも。未だ船の出で難き風なれば。周防山口見物の爲め。在所の荷を負ふ馬借出して。船來と云ふ在所まで行き。七日に山口に到りぬ。今夜は七夕の逢ふ夜なりと思ひ出で。曉方のねざめに。

七夕のわかれの袖にくらべ見よ露ながら假す旅のころも手

八日。所々の寺社見廻りて。同國國府の天神まで立出づべき用意せしに。當所本國寺住持。一會興行すべしとて。頻りに留められ侍れば。力なく其日は逗留して。九日に。

もる月も今一しほの木の間かな

十日。山口を出で。國府天神へ着きて。まりふの浦近き田あみ迄。船の來るを待ちて休み居けるに。當社の供僧圓樂坊。發句所望ありて。一面なりとも連ぬべしとて興行し。入相の時分初まり。夜半過る頃に百韻満じける。其の時船着きたる由注進あり。天神の御計ひとて。衆徒喜ばれける。

色わけよ待つこそ風の手向け草

田あみの港にて。まりふの浦を見るに。網の多く掛け干してあれば。

真砂地にあみ張り渡しもて遊ぶまりふの浦の風もたえつゝ

十一日曉。田あみを出で。其日は上の關と云ふ所に船をかけて。明行く空をも待たで。潮に引かれて船出を催し行くに。岩國山と云ふを見遣りて。

あらしきその道なり迎も歸るさは岩くに山も踏みならしてん

夫より嚴嶋近くなりて。社頭を見るに。鳥居は海の面二町許りと覺しき所に建てり。廻廊も柱も。皆潮に浸りてあり。船より之を見て。

遠しまの下つ岩根のみやばしら波の上よりたつかどぞ見る

此の歌を書いて。當社宮司柵守左近將監方へつかはしける。兎角ありて月出でければ。立出で、更くる迄見るに。潮干潮満目の前に變りて。汀二三町許りも遠近になりぬ。瑞籬はたゞ大らみの泉哉とは。宗祇の賢作なり。道理なる哉。又大聖院良政發句の所望ありて。十三日一會あり。當社に鏡の池と云ふあれば。

影うつす月やかゝみの池の水

十四日にも柵守連歌興行すべき由なりけれども。魂祭の日に當れば。心付なきやうにも有べき

とて。辭退しけるに。然らば發句許りなりとの所望を受け。思ひがけぬに。時鳥の鳴くを聞きければ。

秋や又葉山しげやまほとゝぎす

かやうに申し遣はしけるに。さらば晩に饗すべき由なれば。行きけるに。色々の肴求めて盃出され。子息少輔三郎も出座ありて亂舞あり。脇差を出して罷り歸りけり。宿りし所は奥の坊と申しける。今宵の魂祭の手向など構へ置かれ侍りけるに。又時鳥の二聲三聲鳴けるを聞き。爰にはいつもかやうにて有りやと尋ねしに。珍らしき事なりと云ひければ。一首をよみて遣しける。

志での山送りや來つるほとゝぎす魂祭る夜の空になくなり

十五日。宮島神前にて。延年と云ふ事ありと云へば。見物して。夜半頃船をいだし。たゞの海に泊り侍りて。夫より備後の津。公儀御座所に參上して。十八日朝。鞆まで越し侍り。竹田法印。假初の宿なれども。亭などありて涼しき由なれば立寄り。終日簞にありて。暮方に船を出すべき由を云へば。發句の所望あり。

名残ある月やともづな港ぶね

夫より終夜船を急ぎて行き。明がたの程に。備中の國に在りと云ふ彌高山は。礎にはなけれど

嶺つゝきの中に在りと云へば。

曙やふもどをめぐる雲ざりにいや高やまの姿をぞ見る

十九日。備前の中ひらどと云ふ所に泊り。夫より暮るゝ程に宇島門に着き。船をかけてもやがて出すべき由なれば。強て上りもせず。舵枕の月を眺めけるに。物憂き旅寝の事にてあれば。

船にねて何をたのまん月にさへ猶うしまどの泊りなりせば

夫より月の夜船に乗りて行きしに。蟲明の瀬戸とききて。

秋風の身にしむ夜半は鳴く音をも聞くばかりなる蟲明の瀬戸

風あらく成て。楯の浦と云ふ所に上り。人里もなき所に旅寝し侍り。

夕波のたての浦よりゆみはりの月も光りを放つとぞ見る

兎角して。波間に船を出し。播磨の室まで行く道に坂をこえ。杓子と云ふ所に着く。其のあたりに鍋の島と云ふ所あれば。

潮はたゞよき程なれや鍋のしま杓子をなかに入れて見つれば

廿一日。明方を待ちて船を出だし。家島を漕ぎ廻るとて。

如何ばかり船よそひして漕よせんわが家島と思はましかば

姫路と云ふ城を船に見て過行きける程に。飾磨川近きわたり。海の面濁りたるを。船人に尋ねけるに。水上に大雨ふり侍ればなりと云へり。

水上に幾むらさめがしかま川濁りは海に出で、來にけりかやうに打詠め。響の灘をすぎ行きて。高砂の浦に船をかけて。其の夜は泊りぬ。

高砂の尾上のかねも松かぜも響の灘のなみにたぐへて是より松帆の浦見物せんとて。廿二日の曉。船がせて行くに。明石のわたり追風を片帆にうけて。遙々と淡路しまに立寄りて。

行く船の追かぜきおふ明石がた片帆に月をそむけてぞ見るさて松帆の浦近くなれば。船を寄せて眺むるに。明方の月浪に浮びて見えにける。

あらしふく松帆の浦の霧晴れて浪よりあらむ有明のつき又繪島と云ふ磯を見るに。山の重りて島もあれば。

幾重とも波路遙にたゝみなす山やまことの繪島なるらん須磨の浦にて。

須磨の浦里のうしろの山柴やあまの鹽やく煙りなるらん暮かゝる程。波の荒くなるに。和田の岬を漕ぎ廻り。生田の森を船中より見渡し侍りて。

漕ぐ舟の夕なみあらく成りにけりさぞな生田の杜のあき風

去る四月。丹後を出船して九州を歴。歸陣の時は南の路を廻りて。七月二十三日と云ふに。難波に着きぬ。思ひ遣れば。限りなき日の本を。なかば許り廻り來にける事とて。驚きて。

難波江の道にひかれて遙なる豊あし原を廻り來にけり

九州道の記終

紀行

蒲生氏郷

天つ正しき二十の年。前關白ちほいまうち君。入唐し給ひ侍らんと物したまふに。日の本の武士ども残りなく。御供し侍るに。陸奥よりも立ち侍り。白河の關を越るとて。

みちのくも宮古も同じ名どころの白河のせき今ぞこえゆく
と。詠みて出で行く程に。下野の國に到りぬ。いと清く流るゝ川の上に。柳の有りけるを。如何にと尋ね侍るに。是なん遊行の上人に道しるべせし柳よと云ふを聞きて。實にや新古今に。道のべに清水流るゝ柳かげ。と侍りしを思ひ出でし。

今もなほ流れは同じやなぎかけ行きまよひなば道しるべせよ
と。打眺めて行きける程に。此處は那須野の原と云ふ所なりければ。餘りに人氣もなく。物さびしける儘。ふと思ひつらねて。

世の中に我は何をかすのはらなす業もなく年やへぬべき
など云ひくゝて打過ぎけるに。佐野の舟橋に着きぬ。此の里人の出で侍りしに尋ね問ひければ。

此の橋にて。昔し人を戀ひける人の空しく成りし有様。かやうの事と。語るを聞き侍りて。哀れに覚えぬれば。

是やこの佐野の舟ばし渡るにぞいにしへ人の事あはれなる

と。よみて打渡りつゝ行くに。上野をも過ぎて信濃の國に入りぬ。淺間の嶽に烟の立つを見て。我心に思ふ人の事を思ひてよめる。

信濃なる淺まのたけも何をおもふ我のみむねをこがすと思へば

と。物し侍るに。同じ國の木曾と云ふ所を行く程に。淋しげなる家。一つ二つ有りけるを。如何なる所と問ひ侍れば。茲なん見返の里と云ふ。事跡に付思ふ人なきにしも非ざれば。面白き里の名なりける物かなと思ひて。

限りなく問ふをも茲に木曾の路や雲井のあとを見返りのさと

猶行きく。美濃の國垂井と云ふ所に假寝して。

假ねする宿のゝさばのあれはてゝ露もたるものあけがたのそら

とよみて。早や夜も明け行く程に。旅立ちつゝ行きければ。近江の國に到りぬ。爰は我生國なれば。故郷いと懐しう思ひける。

思ひきや人のゆくへぞさだめなき我ふるさとをよそに見んとは

とよみつゝ上りける程に。はや程なく京に着きて。

はるくと思ひし我ぞけふは早やこゝろのまゝのみやこ入して

紀行終

九州の道の記

木下長嘯子

大相國。唐土かたむけさせ給はんとて。天正の末つがた。筑紫に御出あるべき由のこと定まりにければ。日の本の兵は残らず供奉す。自からも。睦月の中の五日頃に。京を思ひ立出なんとし侍りけるに。人の許より。御衣調むて賜ふとて。此の二首をなん。加へられたりける。

玉鉾の道の山風さむからばかたみがてらに着なんと思ふ

あまたには縫ひ重ねしどからころも思ふ心は千重にぞありける

彼の御衣えならぬ物語の心を。筆のかぎり美しく書くて。取る手も薫ゆるばかり。匂ひ焚きしめられたり。返し

君ならで道の山風さむしども誰かいはん旅のそらまで

ころろぞし深き色香のからころもかへすもかたみとや見ん

かゝる情のありがたさよと。或は涙のふるきわざまで思ひよせられ侍る。さて。須磨明石の月を眺めつゝ。播磨の國に知るよしありて。罷りて廿日餘り留まりぬ。其處の親しかりける人の

許へ。面白かりける櫻にさして。

出で、行くあと慰めよ櫻花われこそ旅におもひたつともかく詠み置きて。日敷を経つゝ行くまゝに。備中の國吉備の中山に着きぬ。つれづれの餘り。此處彼處見ありき侍りて。彼の細谷川の邊に至りて。

今日ぞ見る細谷川のおとにのみ聞きわたりにし吉備の中山

其の水上に上りて見れば。小き池の中より。たえ／＼出づる清水なりけり。彼の清水。水無月の比も。絶ゆることなしとなん云へり。其の谷川の廣さ。筆策といふものゝ長さばかりなんありける。其の夜は。神主の家にとまりぬ。翌日は。雨そぼふりければ。行きもやらす。其處に宮造りし給ふは。即ち吉備津大明神と申し奉る。火焚屋に。釜二つを并べすゑおきたりける。其の釜一つ。神供をとゝのふる毎に。夥しく鳴りどよむ由を聞きて。のぞみ侍りける。誠に雷などのやうに。暫し轟きて聞えけり。此ぞ神祕となん言傳へし。其より備後の鞆といふ浦近きわたりに。十日餘り留まりぬ。其の程。彼の浦見に罷りぬ。其處に一夜泊り侍りて。明方の浦の景色を見やれば。近きわたりの島々。薄く霞み。漕ぎ來る舟も由あるさまなり。

忘れめや霞のひまの磯づたひ漕ぎ出づる舟のとももの浦波

さる歌詠みたる由。主に語りければ。感じて之を書きとめける。さて。見し鞆の浦のむろの木は。

常世にあれど詠めるは。何處ぞと尋ね侍りければ。昔は此の浦に在りしと言傳へたれども。

今は跡方も侍らねば。定かに知る人も候はず。されど。あの磯に在りしなど。ふるき人は申し置さける。いざさせ給へ。教へ奉らんといふ程に。罷りたれど。異なる見所もなく。唯波の寄せ來るのみにてぞありける。かく名ある木も跡方なく。何事も昔に變りゆくこそ。物毎に悲しくは侍れ。其のかへさに知る人ありければ。鹿島と云ふ所に立寄りけり。主さま／＼にもてはやし。いざ此のあたりを然るべきかゝりあれば。鞠なん仕うまつらんと。強て申しける程に。去り難く覺えて。装束など取寄せ。日暮るゝまで。鞠蹴などして遊びける。其のあたりなる男女ども。皆集り來て見けり。田舎には。かゝる事もめづらかにや覺えけん。さて。月の山の端に澄み昇りて。さやかなるに。故郷人もかくや眺むらんと思ひ出で、歸りにけり。玉鉾の道も遙かならねば。幾何もあらぬに來着きぬれど。内に入るべくも覺えで。宿の前なりける辻堂の。毀れかゝりたる板敷の上に。夜更るまで立ち。月やあらぬ春やむかしど。獨りぢち居て侍りけり。明くれば。故郷へ文つかはす。親しかりける友達の許にかくなん。

思ひきやあなじ此の世にありながらまた歸りこぬ別れせんとは

同じ國尾の道といふ所より舟に乗りて。面白き浦々に心を慰めて。すこし故郷も忘れぬべき心地してなん下りけるに。春のものどて雨そゝぎしけり。日もやう／＼暮れなんとすれば。人住

む所にもあらぬ。わづかなる沖の小島に舟寄せて。僅かに一夜を明しけり。たぐひなくもの心
ぼそし。浮き寝の哀れも身に知られて。まどろむとしもなく。涙のをり知りがほなるに。時し
もあれ。逢もる車の袂にかゝりけるを見て。

夜もすがら逢もりあかす春雨にうきねの袂なほしぼるなり
見もはてぬうきねの夢の行末をさそひて歸る波のおどかな

波路遙にわけ過ぎつゝ。如何ありけん。此の程の疲れにや。眉の上重くなり。心むすぼれ。
たゆたふ舟の中も。いぶせくうるさかりければ。少し心休めんと。童一人供し。あたりの島
に上りて。此方彼方見ありきけれど。稀にも人の行き通ひける跡さへなかりけり。波の音のみ
凄う聞えて。いと袖の上もまほれがちなるに。昔如何なるものゝまわざにかありけん。五丈
ばかりありける石の面に。

哀れなり雲路つらなる浪のうへにまらぬ舟路を風にまかせて

といふふるき歌をぞ。書きつけしる。又人も迷ひ來て。かゝる所の哀れを身に知りけるよと。
いと悲しう推量られぬ。其の濱にありて。手ずさみながら。小さく美しくしき貝どもの多くあ
るを。拾ひもちて。やう／＼元の舟に來にけり。隣の國安藝の嚴島に詣で。一年筑紫に下りし
時宿りける。坊の主を尋ね侍りければ。一昨年身まかりぬと。弟子なりける法師の語りける。

今思へば。其の頃七十ばかりになん見えつる。憾むべき齡ならねど。又歸り來ぬ道は。いと悲
しうなん。相見て物語りなどせし程は。六年にぞなりにける。何事も。はかなき夢とのみなり
はてし。皆歸らぬ昔となりにけり。彼の坊の泉水。心を盡し。草木など植ゑおきたり。

なき人の手づから植ゑし草木ゆゑ庭もまがきもむつまじき哉

と詠みければ。皆人袖をなん濡しける。其の庭の中に自からいと大きな石あり。苔むし物ふ
りたる上に。いと面白き松。ひとり立てり。作り成さば。此の外の事はさもありなん。是には
如何ならん匠の人も。え及ぶまじかりける。種しあれば。岩にもやと眺められし。其より又舟に
乗りて下りけるに。朝霞深く立ちこもりて。吾が友舟も有りや無しやと。覺束なきまでたどる
に。霞の中より雁の聲かと聞えて。唐櫓の音したるもおかしきに。船人聲高く引きながめて。
何事と得も聞きわかぬ謠歌ひつゝ。漕ぎ來るも目覺むる心地す。霞やう／＼晴れわたりて。眺
めやれば。遙かなる沖に泛ぶ舟も。鷗千鳥などのやうに。小さく見えて。よそ目ばかりやと云
へる。さることぞかし。其の日暮れにければ。或る浦に舟を寄せて。今夜は月の出潮に。湊へ
漕ぎ出でんと。艤ほひしける程に。自からは濱に上りて。清き磯間にたゞみければ。程近く
海人の漁りする火見えたり。さては彼のわたりや。浦人の里ならんと尋ね罷りけるに。家もは
かくしき柱は立て作らず。唐櫓などいふものを打渡し。唯一重に。まばらなる蓬を引掛け。

岩の角を耳にあて。身を眞砂まごこに附けてぞ臥しける。彼が身に生れたらましかば。如何いかはせん。己おのれは住家すまかと思へば。さまで憂うれからぬにこそ。やう／＼月も澄み昇りて。渺々べうべうたる眞砂に光りあひ。玉を敷きたる如くに見えける。或人。海邊の月といふことを詠めといへば。

おく網あみのなかに沈める月影をおのがものとや海人の引くらん

と詠みて。數多度の波枕なみなくらかぢまくら楫枕かぢまくら。しほたれ袂干す間も覺えで。あくがれ行くに。文字の關にもなりぬ。さのみ舟の中波の上も堪へ難くて。赤間が關に上りにけり。或寺に。先帝の御貌並に一門の公卿殿上人。局内侍以下まで。はかなき筆の跡にのみ寫しおきたり。世隔たりたる事と思へど。其の時の心憂さ。沈み給ひしありさまで。數々に思ひ出でられて。うら悲しく覺え侍りければ。

どころせく袖ぞぬれける此の海のみかしをかけし波の名残りに
其より陸路を。駒の足に任せて急ぎける程に。豊前の國企玖の高濱にとまり侍りしに。海近き所なれば。折節波風すさまじう。夜もすがらうちも臥されず侍りしかば。

夢にだに都のつてはさもあらで波の音のみきくの高濱

ならびの國。筑前の箱崎の松原。聞きしより見るは。猶景氣異なり。彼の社頭は。西面海邊に向はせ給ふ。戒定惠の箱埋まれて。まるしに植ゑられけん松は神さび。申すも中々愚かにぞ侍

る。愚詠一首つゞけまほしく覺え侍りしかど。所のありさまにけおされて。本意なく止みにけり。其より程近き博多といふ所に。四五日ありける中に。袖の溼とこと／＼しく云はれたるは何處ぞ。尋ね見ばやと申しければ。主心ある人にて。よく案内して。且曰く。今こそ潮のさし來て。水も少しは侍れど。常は無下にいふかひなく侍りぞぞ申しける。誠に唐土舟寄せつべき浦とも覺えず。又菅原の大臣住み給ひし。宰府といふ所は。近くに侍るにやと問ひければ。此より三里餘りやあるらんと申す。さらばよき程なり。拜み奉らんと詣で。此方彼方名所とも見ありきしに。業平の色になるてふと詠みし染川も。其の形なくなり。水さへ涸れはて。昔の跡といふばかりなり。思川。これも聞きしばかりにはあらねど。見所多かりけり。彼の伊勢がおもひ川と詠みたりしも。水無くあせなば口惜しかるべきを。絶えず流るゝこそ。人の言葉の誠も顯はれて。優には侍れ。さて歸り來る道に。朝倉山の邊にて。

むかしをや忘れはてけん郭公きけど名のらぬあさくら山

道の行手に。獨りかく思ひつゞけゝる。一日二日ありて。名護屋に罷りけるに。道すがらの名所ども。尋ね問はせければ。此ぞいきの松原とは申すといふ。さる事あり。太宰帥隆家。筑紫に下りける時。扇賜はせ給ふとて。枇杷太后感。涼しさはいきの松原と詠まれし所にてぞあれ。誠に歌人は行かずして名所を知ると。諺に云へる如く。松原の景氣。海に近く少し高くさ

しあがりたる所なれば。涼しかるべき境地なり。玉島川。松浦川。何もやがて海に流れ出で侍るなり。松浦川は。七瀬の淀と詠めるに違はず。いと大なる川にてぞありける。彼の松浦佐用姫が領巾振りしより名にいはれけん山も。けぢかき程に見えて。いとおかしきさまなり。鏡の神にと云へるも。都にて思ひおこしし程は。いと遙かにて。如何なりけん宮居ぞなど。心あてにせしことも。面影うかびたるやうに覺えて。いとすぐれたりける。此の日名護屋に至りて。草枕結びさだむる程だにも侍らぬに。郭公一聲おとづれて過ぎければ。

ほととぎす初音きくにはなぐさまで出でし故郷なほぞ戀ひしき

汝も歸らんには如かむと啼きしなるべし。故郷のたよりもとめて。かくなん言ひつかはしける。あまさかる。鄙の長路に。おどろへて。心つくしの。旅のそら。草葉をわくる。たもとより。おくるゝあとの。涙のみ。かゝる袖こそ。わびしけれ。今日手を折りて。數ふれば。己が故郷。立ち出でし。日數の程も。今はしや。とをとて六つに。なりにけり。たのむこととは。鳥羽玉の。夜のころもを。かへしつゝ。夢のたゞちの。逢ふことを。玉の緒にして。過ぐれども。それさへうとく。なりゆけば。何によりてか。さゝがにの。命をまばし。かけもせん。なほも見まくの。ほしかるは。まだ二葉なる。なでしこの。花のうへなる。夕露の。思ひおくにも。いとしく。心の闇の。晴れやらぬかな。

わかれつゝいく年ふとも命だにあらばふたゝび歸らざらめや

九州の道の記終

紀行丙辰

林道春

武藏野

名にあふむさし野は。月の入べき山もなしといへば。まことにそくばくの蒼莽をすぎて又蒼莽なり。此國の稻毛。葛西。越谷。岩筑。河越。鴻巣。忍なども。皆むさし野の内にて侍る。いづれも御獵場なれば。毎年爰にならせ給ふ。

國野同レ名稱ニ武藏。尋常旅客宿春レ糧。雨餘草色連ニ天地。郊外雲烟没ニ邑莊。富士雪遙花稍小。筑波陰茂薔猶長。殘星點々夜叢火。微月纖々照射光。共往芻蕘多幾許。齊飛鳧雁百千行。豫遊兼習ニ驅馳範。養放皆知ニ鷹鷂方。雲夢青丘俱芥蒂。子虛烏有本荒唐。斑鳩入レ網風前霰。白鷗懼レ黏泥上霜。暴虎何曾逢ニ太叔。非熊庶幾載ニ師望。菽隲任レ見宜應レ採。耕穡於レ時亦不レ妨。仁愛只今覃物處。豈論ニ五柞與ニ長楊。幸逢ニ四海爲レ家日。處々風烟似ニ故鄉。

春風にまたおひそふる若草の色や霞にまがふむさし野

淺草

爰に寺あり。たふとき観音ましますとて。人の多く參詣すと申ければ。大士の日。人にさそはれ余もまかりける。げにも人のいふやうに。男女の群集する事。京の清水よりもおほく見えける。むかし此所より牛鬼の出で。走りありきし事を。心に不圖おもひ出で。馬こそ大士の化現なれ。何とて牛は出けるぞと。おかしかりき。爰の觀音院ある人なりければ。まばし立よりてやがてかへりぬ。

法威能救衆生憂。小白華山彼岸舟。若把馬郎令渡水。應同海底有泥牛。

神田

此社は。平親王が屍骸をうづみし所にて。其靈をまつると語りつたへ侍る。

昔聞鐵額是蚩尤。何事將門廻逆謀。草木山川無寸土。一堆埋骨幾春秋。

愛宕

いづれの時にか。京なる愛宕を。遠江國なるこ坂に勸請し。それより駿河國うつのに移し。又武藏國にうつして侍りし。是は勝軍地藏の法おこなはるとて。ことに武士の崇敬する故に。始はわづかなるほこらなりしを。漸くつくりひろげて。今は大厦になりぬ。

京洛移遷坐武州。築壇構閣陟山丘。誰知幣帛神封物。却作沙門活命謀。

増上寺

髣髴給孤園。飛廉倒大門。遠公名已久。善導法猶存。悲願雖扶女。哀鳴屢繫猿。始知蓮社内。更有國師尊。余入寺時。庭前有猿。

隅田河

都鳥は角田河の物なれば。好色の人。とりて家に飼て侍るを見るに。まことにはしどあしどあかき鳴の大きなる。この鳥。蛤を好みてよく食けるなり。

漾々溶々一葉身。河邊秋景只懷春。自從在五詠歌後。流水飛禽愁殺人。

金澤

金澤の絶景は。東州の佳境にて。事好むもの。丹青の手をかりて屏風に寫し。市杵島。天橋立にも。いかでか劣るべきなど。もてなしあへり。北條氏天下の權をとる時に。文庫を建て。金澤文庫といへる四字を。儒書には黒印ををし。佛經には朱印をつきて藏め置ける。越後守平貞顯。この所にて清原教隆に。群書治要を讀ませける。余が見侍りしも文選。清原師光が左傳。教隆が群書治要。齊民要術。律令義解。本朝文粹。續本朝文粹。續日本紀などのたぐひ。其外人家に所々ありけるも。一部と調ひたるは稀なり。一切經も取ほごして。纒残りて金澤にあり。古記典籍の厄に逢る事。いにしへより今に至るまで。幾度といふ事を知らず。蘇我氏が亂は。

我朝の一秦とも申すべき。宅嗣が芸亭は名をだにもきかず。宇治の寶藏。蓮華五院の寶藏なども。跡さへぞなき。誠に祝融に奪はれ。陽侯におぼるゝのみならず。兵燹にほろび馬蹄にふみ散らさる。心あらん人。むかしを思ひ出ざらんや。されば人の語りしは。先聖先師九哲の影。六經の註疏。今に足利にあり。小野篁が東國へまかりける時に。足利に讀書の堂を作りしが。今に残りてあるぞ是なるとなん。余もまかりて見むとのみ。あらましにて年月をすこしぬ。

懷古淚痕羈旅情。腐儒早晚起蒼生。人亡書浪幾回歲。境致空留金澤名。

鎌倉

鎌倉にいたりて。あなたこなた見ありき侍りしに。頼朝の墓とて人の教へければ。鴨の長明が草も木もなびきし秋の霜きへて。といへる事を思ひ出て。

滿目鎌倉城郭亡。雲烟漠々樹蒼々。逍遙昔聽遊龜谷。報賽今無詣鶴岡。草偃匣中三尺水。苔深墓上五更霜。君公不識包桑計。千載英雄淚濕裳。

江島

藤澤より馬にまたがり。海濱近き所にて。漁父の舟をかり。江島に渡りて見れば。あなた海の岸の下に。大なる岩窟あり。つい松をともして。深く入るほどに百歩あまりにてやみぬ。むかし龍神の棲ける所となんいひ傳る。この島の辨財天女は。世にかくれなき事なり。

借問島中人。不知此孰神。蜿々遺蹤在。君其問水濱。

江島從來神女居。風鬟霧鬢駕雲輿。遊人若有登仙意。水宿應傳柳毅書。

神世いかに今むつまじしみわたつ海の八重の鹽路に言傳やらん

此所に。曾我十郎が妾虎が舊跡ありとて。一の石を人々集まり見て。もたげ。轉ばかしなどして。むかしより虎石と名づけ。今にあり。

十郎慷慨愛於菟。血氣武人犀甲驅。妾婦當時誓星否。隕成此石似望夫。

永仁四年に。此山の鐘を鑄て銘をきざみし其序に。當山蓋山嶽之神秀者也。孝謙皇帝御宇天平寶字年中。萬卷上人草創。擇地三所權現松壻並薨。といへり。中比炎上せしを。北條氏再興して。十二州の鎮守とす。山上に湖水あり。神靈のすむ所なりとて。古しへより。人のつゝしみ畏れて。今に入る事も侍らず。舟を浮べて。めぐりありく事はありとなん。後別當の語りしは。仙人四代この山に住て。駒形の深祕をあらはし。役小角も爰に來りて其跡をのこし。熊野權現と此神と一跡にてまします。くはしきことは記録にありと申しき。

長坂脩途不可攀。惟天設險甲東關。回頭木末待吾僕。信足湖邊濯浴顏。鯨背浪

高伊豆島。馬蹄雲起筥根山。相逢盡道歸耕事。歲々年々幾往還。
雪か花かあけぼのかすむ筥根路を越れば峯のあとのしら雲

走湯山

走湯山は。伊豆の山の事にて侍る。爰にまします神をば。走湯權現とぞ申しける。昔鎌倉右大將。伊豆箱根を信じ。常に齋繫の禮をいたし給ふ。二所參詣といへるは是なり。此どころに出湯あり。石はしる瀑の如し。走湯の名も温湯によりての故にや。又一里許西に温泉あり。その所を熱海と名づく。人のよろづの病あるもの。浴すればたゞ驗あり。先年余も人にさそはれて。湯に入り侍りし。其湧く所を見るに。潮の進退によりて。岩の間より烟むしあがりて。人の近づくべくもあらぬほど。あつきに熱湯わき出て。流れ走るを。箆をかけて家々にとり。槽に湛えて。人々に入らせけり。

絶境靈蹤亘古今。尋名吾輩亦登臨。走湯權現救人處。便是驪山神女心。

三島

伊豆の三島は。むかし伊豫國より遷して。大山祇神をいはひまつる。いつぞや相國の御前にて。三島と富士とは父子の神なりと。世久しくいひ傳へたりと沙汰ありければ。さては富士の大神をば。木花開耶姫と定め申さば。日本紀のこゝろにも。協ひ申すべきなり。竹取物語とやらん

にいへる。かくや姫は後の代の事にてや侍らん。凡三島といへるは。豫州攝州この國と。三所にあらはれますよし。神名帳にありと覺へ侍る。

祭儀如^レ在^レ幾千年。青幣相連引^ニ白綿。天下神明垂跡處。流行似^レ得^ニ地中泉。

蛭小島

平治の亂に。兵衛佐源頼朝この所に流されて。廿餘年の間。仇を報いむ事を謀りしに。治承壽永の比。兵を起し平氏を攻滅し。安徳帝福原を落させ給ひて。西國にてうせ給ひし事を思ひ出て。

包^レ羞忍^レ恥左遷身。養^レ虎遺^レ患只此人。吹起多年東國燼。福原城闕作^ニ烟塵。

大島

術ありとて頼むべからず。役優婆塞が鬼神をつかひしも。廣足が讒によりて流され。力ありとて頼むべからず。鎮西の八郎が大弓をひきしも。信西がはかりごとにてうつさる。されば此島は。伊豆の沖にありて大島と名つけ。いにしへより風浪のたよりまれなれば。遷客投荒の所とす。近比。仙洞の脱履ましまさざりし時。宮女の和姦の罪によりて幽閉し。死を給ふべきなど。天氣まきりにありしを。大相國寛仁の心まし／＼しかば。申宥められて。あまたの宮女を流し遣はされし新島も。此澳にあり。彼松浦佐用姫が。玉島山にひれふり。御息所の淡路の武島に

住み給ひしも。かくやらんと人々いひあへり。

迢々南海濱。舉目不知津。小角來驅鬼。八郎譎化神。土人畜獸類。風俗混魚鱗。寄語一漁叟。天涯奈汝身。

富士沼

相國の御前にて。平家物語の事のありしに。平氏鳥の羽音に驚きて。にげ去りしは。富士沼の事にて。今の善徳寺は其所なり。齋藤別當が。東國に精兵の多き事を語りしによりて。平家の兵ども臆病神のつきて。かくの如くありけるなり。御前に侍りける。某を御覽じて。辯士をして敵の美を談ぜしむる事なかれど。兵法にいへるは是なりと仰せける事も。只今の様に玉音耳にとまりて覺え侍る。

關國中分源與平。東方氣勢盡豪英。何須禱入公山上。竿是旌旗木是兵。

富士山の名。ひとり我朝に鳴るのみならず。遠く中華まできこゆ。赤人が歌は萬葉にのせ。都良香が記は文粹に見えたり。徐福。藥を尋ねてこの山にとまり。是を蓬萊山と名つくる事は。義楚が帖にあらはし。六月雪花翻素霧。何所深林覓白鷗。といへるは。宋濂が曲にあらざや。加レ之。羽客釋流の此山に跡を殘す事は。役處士がはじめて攀躋りしより以來。空海。圓珍。岩

石をきごみて佛軀を彫るもの山上に多かり。白衣天女の形をあらはし。淺間大神の跡を垂まします。誠に我朝無雙の名山なり。近代叢林の詩僧。この山を題せし中に。富士千仞雪陵贈。幾度思登病未。能。送汝錫飛三伏裏。歸來分我一壺冰。といへるは信義堂なり。大地撮來無寸土。當空還見此山成。海潤纔浸半邊影。多少漁舟載雪行。といへるは乾峯なり。絶頂雪殘春夏秋。暮烟一抹畫眉脩。吾疑上有望夫石。不。耐。閑愁。獨白頭。といへるは岩惟肖なり。六月雲間積雪新。東遊未踏玉嶙峋。畫師今有移山力。一洗京塵困暑人。といへるは惺瑞岩也。富士峯高宇宙間。崔嵬豈獨冠東關。唯應白日青天好。雪裡看山不識山。といへるは彦希世なり。富士耳聞身未遊。畫圖相對與悠々。東關千里吟鞍上。晴雪超人三五州。といへるは沅南江なり。五須彌外有須彌。呼作士峯吁是誰。六月雪飛寒徹骨。擘開芥子欲藏之。といへるは澤天隱なり。莫言北闕隔東關。富士朝々如對顏。四海一家皆帝力。千秋白雪御前山。といへるは三横川なり。士峯秀出海之東。名在景濂詩句中。若把白鷗論白雪。扶桑六十一雕籠。といへるは九萬里なり。天台四萬八千丈。若在吾邦立下風。といへるは瑾雪嶺なり。巧拙は具眼の人の知る事なれば。書ならべて置き侍るなり。其外騷人墨客の。詠むもらせるはあるまじきにや。此比人の作れるとて。青天忽見素羅笠擔中十五州。といふ句を聞きはんべるぞ珍らしきにや。我輩の今更口をひらかむ事は。人の涎を舐て事あたらしきやうなれど。さり

とていはざらんも。懶惰のおそれあれば。聊申つゝけ侍る。かの不_下與_二浮雲_一齊_上。といへるは此たかきにや。嵌空大始雪。とあるは此雪にや。衆山之巔_嶺なるを知るは。此山に登りての事にや。天下をすこしきに歩する人もあるべきにや。蓮花は早く崆峒は薄しといへるも。此山に對しての事にや。

一山高出_二衆峯_一巔。炎裡雪冰雲上烟。大古若同_二仁者_一樂。蓬萊何必覓_二神仙_一。

富士川

我國に名を得たる大河は。あまたあれど。殊に富士川は。海道第一の急流なり。舟に乗て渡るに。渡し守ちからを出して竿をさし。櫓をおし出すとき。岸より見るものは。あはやと危く思ひ。船中の人はいまひ。魂の消る心地ぞまける。

往來停_レ馬此脚躡。天下滔々豈獨吾。河畔爲_レ通_二名利路_一。涪陵慙愧一樵夫。

薩埵山

尊氏。直義。中あしくなりて。此所にて合戦ありし事をおもひ出て。

弟兄爭_レ國亂如_レ麻。萬馬奔馳薩埵涯。一樹東西枝指後。海山風雨棗棠花。

興津

興津は。多胡の浦の事にて侍るべし。湯井より薩埵を過ぎ。爰に至るまでに。海濱鹵斥の地に

て。小民賤女の鹽焼くまわざを見るに。老杜が汲_レ井歲槽々。出_レ車日連々といへるは。げにさる事にや。盤中の飡の皆辛苦なる事も。思ひ合せられて。いよくありがたくぞ覺えはんべる。

蚩々海畔氓。鹵裡若_二煎烹_一。昔汲_二孔明井_一。今調_二傅說羹_一。

清見關

延暦の比。奥州の逆賊高丸。駿河國までせめ入り。この關に陣をとりしを。坂上將軍打破りて。高丸奥へ逃退きし事。久しければ語りも傳へ侍らず。此所に寺あり。京なる惠日山の示長老の弟子開_レ聖。この寺を開き清見寺と名づけ。又は巨鰲ともいへり。近比妙心寺に屬するやうに聞え侍る。

經歷巨鰲山。入_レ門心自閑。禪徒今住_レ寺。寇賊昔攻_レ關。三保窓櫺裡。大洋机案間。起鞭征

馬去。斜日照_二人顔_一。

三保

此所にまします明神は。神籍にのする所の美穗神社是なり。羽衣の松とて。むかし天より乙女のくだりて。此松に羽衣を忘れしを。漁父のひろひ得たる事。いづれの文に有るやらんと。人の尋ねしに。かの能因法師が。有度濱に。天の羽衣むかしきて。と詠めるはこれなるべし。三保は駿河國有度郡にあればなり。

綽約冰肌神女容。聞名自_レ古問_二遺蹤_一。漁人洗_レ耳是何曲。仙袂飄々風入_レ松。

久能山

この山の状を見るに。海岸孤絶の所にて。觀音老人堅坐の地なれば。補陀洛山とも申すなり。一里あまり東に寺あり。久能寺となづく。聖一國師藁科の産にて。この寺の堯辨法師を師とし。台教を學びしが。入宋の後。達磨宗を傳へて。東福寺の第一祖たり。世の人猶も久能の示長老とて稱しける。宋より渡しける瑪瑙の羯鼓を。此寺へ送られける。又源豫州も。薄墨といへる横笛を。寄進せられしが。いづれも池魚の殃にうせけるとなん。寺僧の書置けるとて。勸進帳のありけるを見侍りしに。あらく_レかくなむありける。其外推古天皇の御時草創せしなどあれど。大やう疑はしければ。よく心をとめず忘れ侍る。

遠尋_二幽寺_一到_二斜陽_一。過客居僧談兩忘。身是此山清淨色。何求無垢在_二南方_一。

久能宮

寂然長隱久能宮。明德惟馨神國風。億兆小臣望不_レ及。帝鄉路遠白雲中。

何圖忽輟_二國中春_一。哀慕憑_レ誰寫_二御容_一。臣妾叩_レ頭將_二伏拜_一。雲車高駕鼎湖龍。

駿河文庫

餘烈遠遺賢聖風。能令_二術業有_二專攻_一。誰言馬上治_二天下_一。只聽爐前讀_二雪中_一。寒水月明千歲

意。日星道行六經功。請君更勿_レ問_二他事_一。人是儒門五尺童。

狐崎

源頼家の。梶原平三景時を誅せんとせられければ。正治二年正月。梶原。相模國一宮を逃出て。駿河國清見關にいたる。折節的場より歸りける甲乙人行あひて。怪しみ思ひ。矢を射かけ追ければ。梶原。狐崎にて返し合せ。蘆原小次郎。飯田五郎。吉香小次郎とあひ戦ひて。景茂うたれぬ。國內の兵ども。集まり攻めければ。景國。景宗。景則。景連も死ぬ。景時。景季。景高は。うしろの山にてうたれしを。山中より其首をさがし出して。道路に梟しける。梶原は辯口ありとて。武將の近習なりしが。廷尉の事を常にあしく申せし事。人のあまねくいふ事なり。

源君兄弟本連枝。何事一朝恩愛衰。猶有_二讒人遺誠在_一。不_レ投_二豺虎_一死_二狐崎_一。

淺間

和歌に。志豆機山とよめるは。是なりと聞えし。醍醐帝の時。富士本宮を爰に遷して。新宮と申すよしかたり侍る。

乘_レ輿時々詣_二淺間_一。黄昏唯見一僧還。風光應_二是靈神愛_一。前有_二清流_一後有_レ山。

臨濟寺

蘭若隔_レ林隣_二府闈_一。遊人眼裡對_二孱顏_一。立談不_レ及_二世間事_一。亦是浮生半日閑。

建穂寺

此寺は。むかし役行者の草創せしやうに。いひ傳へたり。中比より。密家の者移りて。今にいたるまであり。

此地元來法界宮。水雲心性似虚空。吟眸所々不知暮。石徑霜深古寺楓。

八幡

此神の垂跡。國々にあり。殊にいぢるきは。宇佐。箱崎。男山。譽田。鶴岡。その外もあまた多し。此駿河國に勸請しけるは。いつの時の事にか侍るやらん。此秋河内の譽田の縁起を。社僧江戸へ持下りしを見侍る。神功皇后の縁起二卷。譽田の宗廟の縁起三卷。永享年中普廣院寄進せらる。五卷ともに土佐が繪にて。宗廟の三卷は。普廣院親筆に事書をうつされけり。唯今爰の八幡を見て。かの縁起の事を思ひ出し。聊あるし侍る。

無方變化本非恒。五彩靈鳩金色鷹。神不惑人人却惑。唯嫌巫祝有依憑。

久佐奈岐

延喜式に。駿河國草薙神社といへるは是なり。むかし日本武尊。吾孺國に下り給ひし時。この所にて夷賊おこり。原野に火を放ちて。尊を焼殺さんとしければ。尊はき給へる劍をぬき。遠かたやしげきをもとをやり鎌の。利鎌をもちて打はらふ事のごとくと。唱へ祓ひて。劍をふり

たまひければ。あたりの草盡く。なぎはらはれて。夷賊の方へ烟なびきて。尊は恙もましめさず。さてこそ初は天のむら雲の劍と申せしを。草薙の劍とは名づけられ。尊これより奥へ下りて。東夷をたひらげ。のぼり給ふ時に。かの劍を熱田の神宮へおさめ給ふ。我國歷代傳寶の三種の神器の其一なり。其尊を焼むとしける所をば。焼津と名づけ。草をはらひたまふ所をば。草薙と名づけて。何れも駿河國にあり。

欲爲黎民一解倒懸。東征到處幾山川。腰間一自蛇龍動。雲氣吹消蔓草烟。

宇都山

在原業平この山を過し時。葛楓いと去けりて道もなし。修行者にあひて。歌をよみて言傳ける事。人のあまねく知れる事なり。俗に内屋ともかけり。

山中回首費吟呻。遺愛葛楓秋又春。今古冥々名與境。業平訶後更無人。

大井川

大堰河は。駿河と遠江との境なり。明日香川ならねど。霖雨ふれば淵瀬かはる事。たび／＼なれば。東の山の岸を流れて。島田の驛河原の中にある事もあり。西の方に流れて。金谷の山にそふ事もあり。一すぢの大河となりて。大木沙石を流す事もあり。あまたの枝流となりて。一里ばかりが間に。わかるゝ事もあり。さればいにしへより。徒枉輿梁もなり難き故に。往來の

人馬。川の瀬を知らざれば。金谷に待つもあり。島田にとまるとあり。渡りかゝりて溺る者もあり。辛うじてむかひの岸に至るもあり。島田の民あのが家は漂ひ流るれども。旅客の囊をむさぼる故に。洪水をよるこぶ。賣炭翁が單衣にして。年の寒きを待つが如し。河水の家を流し。田をそこなふ故に。防鴨河使。防葛野河使を置かれし昔の事も。唯今思ひ出ざらんや。

尋常揭厲必過腰。叱馬呼奴魂欲銷。來往就中何處苦。無舟無筏復無橋。

小夜中山

圓位法師が。いのちなりけり佐夜の中山。と詠せしは爰にての事なり。

坂道升降是早天。夢殘馬上不_レ成_レ眠。此山無限西行壽。能使下詠歌千古傳上。

西坂

西坂を新坂とも書けり。此所の民。わらび餅をうる。往還のもの飢をすくふ故に。いにしへより。新坂のわらび餅とて。其名あるものなり。或は葛の粉をまじへて蒸餅とし。豆の粉に鹽かて、旅人にすゝむ。人その蕨餅なりと知りて。其葛餅といふ事を知らず。諸越に、疾神を買ふて。老芋を得たる人もありけるとかや。

婆叫ニ焦兮婦喚_レ烘。停人鄙食在_ニ途中。憑誰救得西山餓。馬首吹來餅餌風。

中泉

見付。濱松の間に。中泉といへる所は。鳧雁の多き所にて。遊獵によろしき地なれば。大相國年毎に。放鷹せさせ給ひてありしが。余も御供に侍りしに。芒碭雲一去。鴈鷺空相呼と。此たび打誦すべしとは。思ふべしやは。駿遠二州。今は中將殿の知らせ給ふ國なれば。封建のむかしも。今にあらざらめかも。

春蒐冬狩跡猶遺。霜露凄々野草衰。鴻鴈自來還自去。更無_ニ人放_ニ決雲見_一。

池田

美濃の青墓。遠江の池田。駿河の手越。いづれも長者遊君ありて。むかしは。往還の武士。輕薄の少年。鞍馬を門につなぎ。千金笑ひを買ふ所なれば。かの江口の津にも。いかで劣り侍らん。矢島大臣のめされし湯谷も。此池田の宿のむすめにてはんべる事。世にかくれなし。今は此宿。天龍の河の東のはたに。形ばかり残りて。わづかなる小民ども。渡りを守りて居侍りける。大天龍小天龍とて。二の河ありけるが。新田左中將の。尊氏と戦ひ負て。のぼられける時。うき橋の桁のなかりけるを。飛越られけるも。爰のことなり。江都か輕捷の有りけるにや。濱松のそばなる細流を。小天龍の事なりと。今ぞいふめる。

池田驛長本倡家。處子嬋娟天下誇。腰似_ニ楚王宮裏柳_一。面如_ニ巫女廟前花_一。古今不_レ盡洪河水。淵瀨相移兩岸沙。治亂興亡非_ニ我事_一。征鞍暫憩且嘗_レ茶。

今切

遠州荒井の濱より奥の山。五里ばかり海となりて。大船も出入る事。むかしは山に續きたる陸地なりしが。中比山より。法螺の貝おびたしくぬけ出て。海へ入りける。其跡かくの如く。海となりて。今切と名づくるよし。古老言ひ傳へたり。我國は。伊弉諾伊弉册のうみ給ひ。大已貴。少彦名の造られけるといへば。其むかしは。いかゞ侍りけむ。もろこしの華山を。巨靈が擘開して。水をやりける事も侍るにや。

一葉扁舟寄旅身。潮波通信遠州濱。海山何借巨靈手。我國元來造化神。

潮見坂

白須賀より。西のかたへのぼる一の坂あり。大洋眼前にあれば。潮見坂となづく。余嘗て詩を作りて云。

波浪雲天俱一色。東南溟海更無山。聖門有術人何敢。潮見坂頭停馬看。

律にかゝはらず。快活のやうなれども。山看の韻。世俗の思ふ所。通韻は廣きが故に易く。切韻は狭き故に難しとなん。三百篇。楚人の詞には。協韻のみ多かり。いかに聖人の刪修。屈宋が文を慕はずして。沉約江老のいやしきを學ばむとや。世間流布の韻鏡にも。協通の音を專とし。洪武正韻。洪武韻府にも。むかしにかへり。中比の韻をあらためたらず。志あらん人の。

いかでか我に同じからざらん。まかはあれど。初學の律偶に拘る者は。先なやみて。後に得べき事とおぼへ侍る。されば不律にあらんよりは。先づ律をまもるべし。絶句を學ばむよりは。先八句を作るべし。意到らず。風高からざれば。古にあらず。句到らず。情深からざれば。律にあらず。是詩學の捷徑なりと。さる人の語りしは。誠にもげにもとおぼしくて。耳にとまら侍る。

天地豈識幾層瀾。舒卷古人方寸端。滿目不遮潮見坂。大鵬飛盡水漫々。

參河國

まほ見坂より三河の間に。纒なる溝あり。是なん遠江三河の境なりといふ。いつぞや。菅野の眞道が史を見侍りしに。持統天皇。三河國行幸ありとあるせれど。いづれの郡郷。いづれの村里といふ事を知らず。眞道は光仁桓武の時なれば。世久敷して。知らざるにや。事略して書もらせるにや。口惜。

先王若蒙慰民生。定有壺漿箆食迎。遺恨翠華巡狩跡。未聞行在頓宮名。

吉田

江戸より京までの間に。大橋四あり。武藏の六郷。三河の吉田。矢矧。近江の勢多なり。ひとり矢矧のみ土橋なれば。洪水によりて絶る事もあり。此比新に板橋となりけるにや。爰にしも。

誰か周處が三害をやめて。留侯が一編を傳へむや。

行々何日窮。相送數州風。馬過曉霜上。龍橫道路中。川流無晝夜。人物有西東。一枕還郷夢。家書久不通。

長澤

昔在轅門見玉鞍。豈圖今日淚闌干。林間應是甘棠意。遺愛歲寒千百竿。

矢矧

矢作は。岡崎の西一里ばかりにあり。建武の時。足利氏鎌倉にありて。天子の命に違ひしかば。新田氏節刀使を奉て東征し。此所にて。鎌倉の軍兵と戦ひ勝て。鷺坂まで逃るを追打て。官軍利を得し所なり。後に箱根。竹下の戦に。官軍敗績して。中書王の走り給ひし事こそ。まことに不幸ならずや。

森々白刃是昆吾。波激河邊千万夫。恩賜旌旗如日色。東隅雖得失桑榆。

八橋

三河國八橋は。杜若の名所なる事。左五中將の歌にてかくれなし。今岡崎より池鯉鮒にいたる道より。北の方一里ばかりに。それなんむかしの八橋なりとて。所の人。遙かに指をさして。教へ侍る。久敷田となりて。今は杜若なし。三四年前。余が作りける詩にも。古人遺跡鐵鑪歩。

只有三河杜若名。となん。

六々歌中第幾仙。風流千歲慕幽玄。世間一瞬皆陳迹。杜若爲薪澤作田。

熱田

日本武尊。東よりかへり給ふ時。尾張の稻種宿禰がむすめ。宮簀媛が家に宿しましますより。此社の神といはひ申なり。然るに世俗の説に。熱田を蓬萊といふなれば。楊貴妃を祭るといふ。されば。宋大史が日東の曲にも。國に楊妃が祠ありといへり。是社のみならず。巫覡の託宣。世間の傳説は。おうやう覺束なき事多かる。

東征功就凱旋時。宿所曾徵宮簀媛。誰道馬嵬坡下鬼。一朝來此立靈祠。

桑名

熱田より。海路七里渡りて。伊勢國桑名に至る。むかし清見原天皇。吉野より潜幸ありし時。皇后も伴ひたまひて。天皇は此所より。美濃國不破關に赴かせ給ひ。皇后は此地に留まり給ふ。天皇。大友の王子と位を争ひ。不破の關にて。東西の兵相戦ひしに。天皇利を得させたまひて。位につかせ給ふ。天武天皇是なり。皇后は天智天皇の娘。大友王子と連枝にたまします。女主にて。後に持統天皇と申しなり。桑名にはせし頼宮。今はいつれの所なる事を。人に問へども知れる者なし。又聖武天皇の時。藤原廣繼。西國にて野心をおこすと聞えければ。官

軍をつかはし。退治し給ふ。天皇は伊勢太神宮に參詣まし〜て。祈らせ給ひ。それより。此桑名に渡御ありて。美濃にかゝり。近江路を経て還幸なりぬ。その間に。廣繼伏誅のよし。提書を馳て奏しける。日本紀續日本紀を見侍りし事を。聊か爰に去るしける。

曾聞二帝此停車。憾在吾邦未見書。今問先蹤一人不識。誰廣風土補方輿。

石薬師

四日市場より。三里ばかり西に。薬師の石像ある所を。石薬師と名づく。余が心に。不圖思ふやう。浮圖をかさね。五輪をきざみ。退凡下乗をたて。佛菩薩を石にて造るは。所々に多けれど。碑銘墓誌石表などは。一もなし。嵯峨の二尊院に。源空沙門が行状なりとて。苔藓の間に。文字織に残りて侍る。誠に今の人の祖先を問ふに。曾高の名をだにも知らず。遠きを追ふの心なきこそ。かなしき事なれ。諸州諸郡をありき見侍りしに。寺院佛閣は。いかなる小民村里にも。あまた侍れども。庠序學黌とては。名をだにも聞かず。ましてむかしの礎もなし。延天の比までは。都には大學を建て。國郡には國學を立て。二仲の釋奠行はれしに。いつの時に。かく捨れけるぞや。足利の學校さへ。近比まで。誰にても得業の人居侍りしに。此四十年より。僧法師の住所のやうになりぬ。浮圖五輪のために。石を刻まんよりは。螭首龜趺を建てよかし。蕃神黠胡の爲に。堂を造らむよりは。精廬家塾をせよかしと。心あらん人の。腹

ふくるしほと思へども。いひ入るべき穴をほらずや。

一地衆生承願恩。温公會比薬師尊。若磨此石作鍼去。甘草人參不足言。

庄野

石薬師の西。龜山の東に。庄野あり。此所の民家に。火米をちいさき俵に入れて。毎戸ならべておく。其俵の大きさ。こぶしの如く。又は槌の如くなるもあり。輪子のせいに包み。縛へてあるを。旅人買とりて。家づとにすといふ。先年余が僮僕。馬のあとにかけて來りしを見て。昔の伏波は。慧苴を一車にのせ。伯顔は。梅花を檐頭に挿みしに。今此小俵あまた取來ること。ほゝゑむばかりをかしくて。彼法道仙人越智の大徳が。俵米を飛せし事も。思ひ出られてありしが。今又都にのぼり。苞苴の物とし。我をまつ小兒の。歡笑を見むとのみにて行きぬ。

唐人詩句漢人書。記得燒耕火米畬。可慰孩提求口實。終朝咀嚼齒牙餘。

鈴鹿

關地藏より。鈴鹿の坂の下まで。あまたの河あり。八十瀬の河とは是なり。爰にまします明神は天武天皇の行逢ひたまへる。老人にてや侍らん。世の婦人小子の口遊める鈴鹿御前の物語とやらむは。おぼつかなし。此所にありし鬼を。荳田丸が討從へたりといふ。是も又おぼつかなし。むかしより。由賊ある所と言ひ傳ふれば。それを鬼とは言ふにや。伊勢三郎も。鈴鹿の山

賊なりけるとなむ。

九折盤紆鈴鹿坡。行人征馬恐蹉跎。祇今四海恩風遍。八十瀬河無白波。

土山

土山といへど。山はなし。鈴鹿より西の坂を下りて。二里ばかりにあり。釋詁毛傳などに。石山を土の山とよみ。土山をいしの山とよむ事を思ひて。

行李東西久旅居。風光日夜憶郷閭。梅花繫馬土山上。知是崔嵬知是岨。

水口

去歲八月四日。大相國二條の御所を出御ありて。翌日此所に着かせ給ふ。其日より。打續き雨ふりければ。三日逗留まし／＼けるに。夜更るまで御前に余も侍りし時。學而の篇をよめど。仰せければ。跪つき開きはんべりしに。能竭其力。能致其身とある所を。みづから御讀ありて。能といふ字に。心をつくべきなり。なほざりにては。忠孝たち難し。親には力をつくし。君には身をいたすといつは。いづれかまされるといふ。評論あるべしと仰せけるに。余もかの趙苞が故事を引て。答へ奉りしが。只今忘れ難くて。すゝろに袂を志ぼり侍る。

愛生從子親。義立自君臣。侍讀古年雨。淚痕今日人。

草津

石部より草津にいたりしに。馬につきたる奴隸共の。語りしは。近江國は。本より相撲の者多く有て。石部。草津。出合相撲をとるに。石部勝つ時もあり。草津勝つ時もありと。いふを聞て。事のおこりを。人の尋ねしかば。當麻の蹶速。野見宿禰より初めて。那都羅。善雄力を比べ。俣野。河津に至るまで。其名聞を侍る。年中行事にも。相撲の節會とて。内裏にも行はせ給ふなど。やう／＼物語りし行くほどに。勢田になりぬ。相撲の詩を作れど。人のいひければ。

氣似烏兔出野塙。力如鼈背戴方壺。龍紋絶贖今猶古。聞否少年相撲徒。

勢田

勢田は古戰場なり。承久の役には。皇輿の敗績して。外に蒙塵ありし事を悲しみ。孝謙の御宇には。内相が奔らんとするに。橋絶て。高島にて亡びし事を喜ぶ。是のみならず。日本紀を見れば。天智帝崩御あらむとする時。大弟は沙門とならせ給ひて。吉野山に入らせ給ふ。大友皇子。その時は太政大臣にてありしが。天智の譲りをうけられしに。大弟吉野より潜に出て。和州。伊賀。伊勢を過ぎ。濃州不破關にて。尾州の兵を召集め。皇子の兵と戦ひ勝て。近江の瀬田まで攻のぼり給ふ。皇子みづから。此橋の邊に陣をとつて。合戦ありしが。大弟の兵勝つに乗りて。皇子敗北して。竹中に入て。伯林雉徑の跡をふめり。大弟は清見原天皇是なり。壬申の亂とは。此時の事をいふなり。懷風藻は。勝寶年中に編集せしが。其中に。大友皇子は天智

帝の長子なり。壬申の役に。天命遂げずして薨じぬといへり。舍人親王は。皇考王父のために文を婉こまて。南董なんどうが筆をいかし思ひけん。懷風藻は。親王の時を去る事。遠からざれば。其事の實じつを隠かくさるゝにや。近比たいみん大明に。燕王えんわうが建文けんぶんを殺して。白帽子けんぼんを戴いたけるも。異域いせき同日の物語ものがたりなるべし。

勝敗興亡憂更憂。千年人事落_二碁楸_一。積骸爲_レ帶血爲_レ水。都入_二勢田橋下流_一。

比_ひ 敵_{てい} 山_{さん}

湖水の邊ほとりより。比敵山を見て。いつぞや人の和韻をし侍る詩を。爰こゝにゑるして云。興公昔作_二四明遊_一。能使_二遺文後世留_一。杉洞窟深蛇鱗動。竹生島泛浮萍幽。三朝烟草君王殿。一夜風波内相舟。只有_二舊時今不_レ改_一。山雲湖影日悠悠。一二は孫興公が天台山の賦の事を用ひ。三四は登覽とうらんの景をいひ。五六は懷古くわいこの感慨かんがいをのべ。尾句は景情けいじやうを合せていふ。此詩を作りし時は。余が年二十七八にてやありけん。久しく公務の暇いとまなくて。吟咏ぎんえいする事もなし。古人三日の間にも。舌本ぜつぽんはしとこそ言ふに。まして余が筆硯ひつげん塵積りて。年經としぬれば。口中のむばら。いかでか詞林しりんにまむはらむ。まかれども。江山のたすけもあれかしと。思ふ心のゆくにまかせて。紀行の詩。今日までにて。若干首そくばくしゆに成りぬ。

良嶽從來守_二紫宸_一。先王立作_二國家鎮_一。雲波五色三津浦。星斗千年七社神。湖水朦朧空得

月。山櫻寂寞自過_レ春。好風景景非_レ無_レ意。吾亦東西南北人。

大_{おほ} 津_つ

大津をすぎて。相坂にいたり。肩輿かぞより清水の流れを見て。

九陌大津隈。忽々繁は往來_一。一亭群馬聚。十里遠帆開。鮒上_二任公釣_一。繪傳_二張翰盃_一。潺湲相坂水。烏帽掃_二塵埃_一。

元和二年十一月 日

羅浮子

丙辰紀行終

東めぐり

我身奥州信夫の里の片傍に。心なく月日を送る者なりしが。叶はぬ渡世に支られ。心に任せぬ旅の身と成る。實に一生は是れ風の前の燈火。朝を過ぎ夕を知らぬ。朝顔の露稻妻の影。明日を知らざる身の行方。還らぬ事の定めなければ。名残惜さはなかくに。身の遣る方もなければ。藻に栖む虫の我からど。思ふ心を種として。道ある方に迷ひけり。漸々往けば二本松。梢を傳ふ松風の。心細くも行末を。布引山と聞くからに。一首の歌に斯くばかり。

我すがた人目にさらす布引をきて見る袖のなみだなりけり
と打詠じ。猶しも爰は本宮と。聞けばなかく故郷に。在りし昔の舊の身は。斯程に物は思はじと。泣音定かに高くらの。東に見ゆる安積山。麓にありし山の井の。清水に影を映すにぞ。寔れ果たる我姿。昔歌人の詠めにも。安積山かげさへ見ゆる山の井と。詠じ給ひし言の葉を。想ひ出れば優しくも。簷洩る水を凌ぐらん。檜皮の里を過行けば。心も融けぬ郡山。西を遙に眺むれば。其名高くも會津山。雪白妙に打見えて。消るばかりの我心。東を見れば名に聞きし。

田村の郡淺倉や。阿武隈川の釣の舟。關路の浦に曳く網の。目毎にもろき我涙。行方如何にと
須賀川の。哀れと誰か白河や。二所の關にも着きにけり。然れば浮世の定めなさ。昨日信夫の
里を出で。今日白河の關を見る。移れば換る世のならひ。我故郷の戀しさは。日々夜々に勝れ
ども。語り慰さむこともなく。假寝の床のをりくりに。夢にならでは白河の。關なら我を止も
せず。道ある方をしるべとし。思ひ立田の旅衣。袖に泪の絶えしなく。物憂き事を白坂や。上
り下りし身の行方。何國を宿と知らざれば。慈悲ある方を宿として。より居の里の嬉しきに。
泊り定めぬ習ひとて。つくく蘆野を便とし。打越え行けばいつか又。戀しき人に太田原。花は
なけれど作山に。程なく今は喜連川。啼音と共に打渡り。氏家の里をこゝぞとは。今白澤の淵
瀬にも。沈み果んと淺ましく。過行くまゝに今日も早。入相の鐘を宇都宮。末は雀の宮なれば。
問ひも越すらん石橋の。光絶えせぬ小金井や。日光山を右手に見て。物憂き旅を下野の。室の
八島に立つ煙。くゆる思ひは我ひとり。心を盡す筑波嶺の。峯より落るみな川の。落ちての後
は我が如く。幾世に物や思ふらん。小山の里を通るにぞ。霞隠れの晴間より。ほのかに見ゆる
森の草。繁る思ひの葉末にも。せめて心を慰むは。山と云はれてさながらに。霞かゝらぬ山も
なし。我も浮世に在ればこそ。思ひの色やかゝるらん。掛れば晴るならひぞと。我と心を慰め
て。乙女の里を過行けば。猶も心に協ふらん。間々田の里に遙々と。着い馴衣袖寒き。秋の浦

輪の心地する。野木の里路にこがれ來て。涙もろとも栗橋を。渡る我身の物憂さを。何時か幸
手の里なれや。心のまゝに世の中を。杉戸の里と聞くからに。立寄る影の朝夕に。迷ふ我身に
優しやな。今宵の宿を粕壁に。早越谷の里なれば。由ある人に草加をば。名残をしくも東雲の。
明もやらぬに立出て。八聲の鳥と諸共に。泣くく通る道すがら。昔源氏の蓬生の。詠じ給ひ
し言の葉を。思ひ續けて斯くばかり。
志のしめにちきわかれぬる曉はなみだ露けき蓬生の宿
と斯様に詠じ過行けば。早ほのくくと夜も明て。淺芽が原に着きにけり。
ほのくくと淺芽が原のすり衣着てはうらみの敷ぞ身にしむ
と堪ぬ思ひを賤が身は。千住の里の西東。小塚の川の北南。眺めも果ぬ田の面に。植し早苗は
いつの間に。畔田と成りて今は早。尺の穂長の末茂る。我は思ひの末しげり。泪の種を蒔くや
らん。眼くれ心も身に添はず。行方如何にと白露の。葉末に結ぶ淺草を。打越行けば程もなく。
武藏の江戸に着きにけり。芝品川の境なる。音に聞えし大佛茶屋のあたりに宿を借り。月日を
明し暮せしが。扱も物憂き旅の身の。頼む便もあらばこそ。明暮まづか唯獨り。心細さは蜘蛛
の。最果敢なくも故郷を。出る月日を恨むれど。還らぬ昔知らざらぬ。行末なれば力なく。身
を打見ては。

あはれげに憂き時つるゝ友もがな人の情は世に有りしほど
と善くこそ是れは言れたり。訪慰さむる人はなし。餘り淋しき折からに。宿を立出で通町。金
杉橋を打渡り。左手を見れば増上寺。額の面を眺むれば。三縁山と打たれたり。扱本堂の見附
には。華鬘の幡の限りなく。玉の瓔珞列なりて。光り輝く佛前に。蓮の花の咲亂れ。間を忍び
てほのくゝと。香の煙の立昇る。其行末を眺むれば。五色の雲に映ろひて。彌陀の來臨ましま
すは。實にも極樂世界かど。目を驚かす許りなり。然れば阿彌陀の古へは。どうしやう國の帝
王を。はんそく王と申せしが。せんとう太子と申しける。王子一人おはします。さいしやう國
の獅子王の。乙女太子に相馴れて。御子二人もち給ふ。一千年を経て後に。乙女太子の御入滅。
是を出離の種として。正覺深く取り給ひ。阿彌陀と現む六十の。御願を起し給ひつゝ。十二願
をばあひなれて。跡なくならせ給ひける。乙女太子に譲らるゝ。藥師如來の昔なり。御子しや
くまの太子王。觀世音とも成り給ふ。次にちくはの太子王。勢至菩薩と成り給ふ。残りし四十
八願を。彌陀本願の誓ひとて。凡夫を救ふ御誓ひ。命の長き佛にて。無量壽佛と名づけたり。
斯く有難き佛前に。老僧數多列座して。初夜より後夜に至るまで。鉦打鳴し經音の。休む事更
になかりけり。斯る殊勝に引かされて。忘れけるかな歸るさも。時を移して立花の。寺こそ是
れは我朝の。寺の始まりなるとかや。此始まりの寺よりも。まさりて見ゆる増上寺。參り下向

は門前に。市をなすかと疑はれ。心なからぬ我等まで。生は必ず死の基ひ。此世は假の舎りな
り。もとゆを屹度此寺に。今より後は墨染の。法衣に身をもやつさばや。世を厭はんと思へど
も。流石愚人の果敢なさは。今はの時に至りては。つなぎも止め貪慾の。切られぬこそはうた
てけれ。漸々往けば神明の。鳥居瑞籬を打過ぎて。本社になれば巫女の舞。神樂を奏し給ひけ
り。されば神樂のはむまりは。地神五代のことかどよ。天照太神日月を。奪ひ給ひていかにせ
ん。天の岩戸に引籠り。國土常夜の闇となる。物憂かりける折節に。大力王と云ひし人。神樂
を工み舞はせしに。神も納受ましゝて。岩戸を開き給ふ時。大力内に差入りて。日月雙に抱
き取り。虚空に上り給ひける。日だきそのの明神と。是を崇めて紀伊の國。山東に齋ひ奉る。
巫は三心圓滿の。姿を學ぶ振る鈴は。無明の睡を覺すなり。五人の神樂男子をば。五智の如來
を表したり。扱八人の八乙女は。八大會の徳を象る。猶もと拍子さつゝの。聲は天地を和合
にし。神穩かになる風情。然れば物見の庭に立ち。面白さよと云ふ事は。此時よりも始まれり。
目ざすも知らぬ常闇に。岩戸を開き給ふ時。人の面の白々と。見えにし事を其まゝに。面白く
とも傳へたり。神樂もすぎて神明に。深く起誓を掛まくも。宇田川橋にさしかゝり。左手を見
れば愛宕山。崖高ければ峯深く。一片の雲に相同む。並木の枝は葉を比べ。長なへなる景色か
な。猶も東を眺むれば。漫々たりし海上に。月下の波も白妙に。渡海の船の限りなく。さそふ

追手に帆を揚げて。上り下りや水の音。波間を分る釣の舟。漕れて物や思ふらん。西を遙かに眺むれば。扶桑を照す日輪は。山端に移りましませば。諸寺に響く入相の。時も移れば四ッ谷とや。月の隈なく差出て。今宵を照す赤坂の。御影をうつす溜池に。麻布の森の木末より。下す嵐に立つ波は。西の久保にや宿るらん。然れば世間の語にも。水は窪みに身を寄する。鳥は梢を暮ふとは。善くこそ是は言はれたり。猶も南に隠れなき。目黒の不動明王は。誓ひあらたにましませば。貴賤群集は限りなく。参り下向をしぼ谷村。金玉櫻さくらにて。今は春べの景色かな。北に方りて隠家の。霞が關と聞くからに。心を留て眺むれば。櫻田咲くや山の手。出入御門建ちければ。霞の門と名づけたり。斯る舊跡里々を。愛宕の山に立寄りて。峯の松風吹戦ぎ。身に染みんくと有がたく。過行くままに新橋の。水に映らふ影見れば。衰へ果し姿かな。西を遙かに眺むれば。流石名高き御成橋。魯般が雲の梯も。斯やと思ひ工みなり。東を見れば木挽町。引くに靡くか優しやな。されば引かれて靡くもの。車は牛に引かれつゝ。千里を靡くならひなり。堅田の浦に引く網は。寄せ来る波に靡くなり。太刀折紙に金銀を。臺に積上げ引く時は。慾に靡けるならひなり。冬は寒さに風引けば。小袖に誰もなびくなり。施行を引けば小遣ひの。靡く風情を見るからに。小野の小町の古へに。見し玉簾の裡ぞ床しきと。詠む給ひし言の葉を。想ひやられて哀れなり。愛

岩参りに袖引けば。なびかぬ人もなかりけり。然れば靡ける品々に。或は君を三保の浦。絶えぬ思ひの悲しさや。袖引きなびく事もあり。月見花見の庭に立ち。時の詠歌に言寄せて。心の中を引き引かれ。忍びに靡く事もあり。神や佛に参詣し。茶屋のおかゝに眼を引けば。見初ぬ人を靡かする。間の使を催ほして。或は艶書の言の葉に。千賀の浦見にあらねども。見る目はかりの戀故に。憂身は何に櫓の葉の。其柏木の心なく。思ひ掛たる八ッ橋の。蜘蛛手に物を思ひけり。扱もやつらき賤が身の。行方は何と鳴海瀉。鹽垂衣袖濡れて。乾く間もなきにてあるやらん。眞偽あるは落葉衣の袖添へて。木陰に積る初霜の。打解け語り申さんと。くろみ交たる水莖を。見るから心浮きうかれ。日こそ多きに今宵しも。飽かぬ契りになら坂の。兎手柏の両面。互に見えつ見やはれつ。比翼連理の語らひも。引かれて靡くならひなり。さらば我身も引かばやと。づしのちやうりの袖を引き。耻かしながら生國は。田舎者にありけるが。貧者の家に生れあひ。渡世を説て山を越え。境を隔て遙々と。爰に越路の雁が音も。遣ひ果けり今は早。お茶屋の代りも持ぬもの。憐れ振舞給へかし。亭主對へて傷はしや。遙々なりし道すがら。お足もぞや盡きぬべし。お茶の代りも何ならず。是れ聞召せと潔く。茶碗二ツにたて出す。又もと乞はし斯あらめ。初めよりして二服まで。出せし事の不思議さに。是は如何にと問ひければ。亭主對へて旅人の。貧者の家に生れ合ひ。渡世説させ給ふよし。二服進らせふくくど。

渡世心に任すべし。殊に二服に子細あり。夫れ天竺の事かどよ。きつ大盡と云ひし人。八万四千の薬をば。残らず覺え侍べるに。弟子一門の者共に。六万二千傳へつ。二万二千を許さしりし。死で其後殘し置。二万二千の念力の。きはが茶毘所に生にけり。寒熱二つ調へて。五臟六腑を慥かにし。病忘り智慧優り。忽ち醫徳あるにより。三服までは過るなり。又一服は不足とて。二服に是を定めつ。今の世までも傳はりて。濃茶薄茶と名づけたり。されば茶と訓む文字こそ。茶毘のたの字を碎きつ。一字を去つて茶と訓めば。草にもあらず木にもなく。茶の湯の道具十二色。是も藥師の十二神。斯る謂れの物なれば。心靜かに休らひて。二服のお茶を聞し召せ。旅の勞れもやみなんと。慰め給ふ志。優しく見えて奥床し。されば優しき情には。誰も親しむならひにて。名殘をしさは限りなく。立詫たりし有様は。羽脱の鴨の水波に。浮れて上り難たるか。山下町を眺むれば。西の見附の御門より。出入る人のとりく。東にかゝる鍋町に。絶ず焚にし火の光り。浮身を焦す物憂さに。北に廻りて日蔭町。夫こそ誰も數寄屋橋。立越え行けど我思ふ。人は一人も紺屋町。鍛冶橋さして行くもあり。南に方る加賀町の。境を分く武山町と聞くからに。人の心もふしく。山王町に行くもあり。久保町さして行くもあり。我は遙の旅を経て。腰をひくく弓町と。今こそ實は白眞弓。元重藤に絲包み。扱塗籠の色々を。見るから心引留て。弓の昔を尋ぬるに。それ天竺の事かどよ。鐵輪王の御時

に。こうはんへうをど申しつ。二人の臣下ありけるが。大悪人と聞えたり。帝逆鱗宜からずして。退治あらんと詮議ある。折節君の庭前に。不思議の木こそゆしゆつする。長は七尺五寸にして。枝もなければ葉も見えず。帝敵覽まし。彼木の下に立寄りて。御手を掲げ給ふ時。此木俄に抜出て。後先曲み庭前に。横はりてぞ見えにける。奇體なりける例には。山鳩一ツ舞下り。鶯の細蔓啣へ來て。彼木に掛て飛去れば。鎗箭一手天降る。之を取擧げ悪人の。臣下を退治あるとかや。又震旦は黃帝の。御代に始まる我朝は。異國退治の御時に。神功皇后桑の弓。蓬の矢にて攻伏せて。それ天長く地久しく。雨土塊を動かさず。國穩かになりければ。此時よりも始まりて。心の儘に世を渡る。京橋行けば君が代は。長崎町と聞くからに。人數ならぬ賤が身も。いつしか爰に桶町の。安堵の住居ならばやと。今きて見るや具足町。春は小櫻夏は又。卯の花緘秋來れば。木々の梢も色づきて。紅葉を學ぶ緋緘の。冬は峩々たる深山邊の。木樵炭焼く有様か。黒系緘筋兜。きらびやかなる月星の。建物繪様色々に。物好深く見えけるが。八丁堀の行末は。靈岸島と聞えけり。漸々行けば中橋に。先は目出度き扇屋の。行末廣き町並に。曇り掛らぬ鏡屋を。立寄り見れば賤が身も。うつろひ易き染物屋。あひそめけるか薄色に。別れて今はあひたらず。身に染々と其形を。思ひそむれば紫や。一入思ひ深かりき。かはやの棚のみつまきの。澄み濁るをば人や知る。我は不思議に旅立ちて。武藏の江戸に來る

絲や。唐打なりと聞く程に。昔を思ひ續けしり。

から糸のくるほどならばとまれかし人の情はよるにこそあれ
と斯様の事を聞く時は。我もとまらば人も又。情あらんとある方の。軒端の下に立寄れば。本
道外科目の薬。南蠻膏薬うつし物。手本の御用墨筆の。天下第一と書きにける。看板數多掛り
けり。かゝりし物は表具屋に。新筆古筆掛ならべ。縁取渡す疊屋に。近江表と聞くからに。我
知る人に逢はばやと。其方の空にさし掛り。東を見れば箔屋町。末は平松町とかや。魚青物と
りくゝに。變らぬ色は久方の。正木の蔓長き世の。譬なりけり常磐木の。中にも爰を高砂の。
松の風情と打眺め。一首の歌に斯く許り。

松がねにやどる小鳥の音を立てしうりかふ物はさかな青もの
と斯様に詠し通町。物の本屋を眺むれば。内典外典和歌の道。數を云はんは限りなし。古へ今
の言の葉と。異國の事を引きまかせて。筆に任せてつらぬけり。引て連ぬる數珠屋には。言葉も
さのみ交されず。言ふより早く水晶の。玉にも曇る事あらば。事畏こくも裏表。通さん事の耻
かしや。通して其身名を揚る。弓の天下の矢數こそ。八千餘矢と傳へ聞く。かゝる矢數に劣ら
ぬは。結ひ花に唐物屋。紙屋時繪屋指物屋。鮫屋藥屋檜物屋は。薨を並べ見えにける。猶行末
は萬町。今ぞ始めて陸奥の。果まで隠れなかりける。日本橋にも着きにけり。橋の音を尋ぬれ

ば。震旦國と天竺の。境に在りし流砂川。長さ八千餘里とかや。此川岸の横たへに。三世の諸
佛集りて。石の橋をぞ架らるゝ。扱本朝の宇治川に。是を學びて架にけり。始まりなりし宇治
橋に。優りて見ゆる日本橋。西を遙に眺むれば。方百町に鐵石の。築地橋は十重二十重。麓の
堀の漫々と。やはせの海に相同し。金銀瑠璃の御屋形。五重の天守丈高く。切利天にも及ぶか
と。數千万里に見え渡る。豊なる代の例には。葵の御紋現はれて。立寄る人の影までも。光り
耀く有様は。君の恵みぞ有難き。されば昔の傳へにも。一花開けは天下皆。花の盛りか萬代の。
猶安穩ぞめでたしと。斯る事をや申すらん。天が下なる諸大名。薨を並ぶ棟かどの。譬へを取
るに例なし。から國までも残りなく。治まる御代の事なれば。民の籠も賑はひて。立居色めく
市ヶ谷の。末は武藏の原なれば。今道廣き治りは。咸陽宮の粧ひも。斯やと思ひ知られたり。
種々の大名家々の。しつけ作法を尋ぬれば。家老は上を敬ふに。上又彼に禮厚し。是を見るか
ら侍は。猶又彼が下知に就く。仲間くゝの物頭。組子に禮の厚ければ。組子猶又従へり。下
より上を計らはず。行儀正しき有様は。上を敬ふ計りなり。上又下に慈悲深く。めでたかりけ
る世の中や。されば上たる人々の。好の品々多くして。其家々に變りけり。弓馬の家の習ひに
て。弓馬鎧太刀刀。黄金にあかせ物好の。分限くゝに應むつゝ。好かぬ人こそなかりけり。扱
其外の好の道。利根才覺覺えある。人を抱へてすりきりて。結局道具に好くもあり。算勘たけ

く利ばいして。金銀たむる好もあり。内の物をも結構に。流石家居も中邊に。其身を少しうつ
たかく。賢者のふりをするもあり。内の物をば中邊に。人にもさのみ附あはず。分別達を好く
もあり。新參古參の嫌ひなく。ひきなき者は荒増に。けしやうの者を抱へつゝ。こうきをせん
についとうし。世間を渡る好もあり。君子の流れたりとても。新參なればあらまじしに。古參の
者を使ひ立て。家を任する向もあり。卑しき者の子なれども。眉目のよきをば小姓にし。後に
厭氣のつく時は。是は古へさる方に。由ある者の子なれども。其身自力の叶はねば。我等を頼
み申すなり。御抱へあれと宣ひて。大名頼む好もあり。先祖を正し氏をひき。其上證據を立て
させて。人を抱ゆる好もあり。茶の湯立花に身をやつし。振舞好をするもあり。謠ひ鼓に笛太
鼓。能や囃子を好くもあり。誰も嫌はぬ好の道。若衆婦女で止めたり。
斯程ゆゑしき御代なれば。貴賤万民世の中を。榮花に渡る江戸橋に。立休らふか四日市。川の
彼方の舟町を。始めて我は水馴棹。さしひく汐を打眺め。往けば程なく禰宜町に。左近が歌舞
妓舞ひすまふ。薩摩虎屋が操りの。始まりたるかどかのうけに。名にし負ふ難波津に。鳥の一
聲をりしもに。啼く鶯の春の曲。春鶯囀を奏せんと。謠ふ難波のわにのうや。齡ひ久しき老松
の。枝に遊ぶか雛鶴の。雲の絶間に舞ふ風情。立止まりて三井寺の。今宵の月に鐘を撞く。鐘
の謂れは如何なれば。昔釋尊山に入らせ給ひし折節に。三億衆生悉く。登山させん相圖には。

鐘に過たる事なしと。仰せ出させ給ひしに。しゆたつ長者が工みつゝ。鐘を鑄させて參らする。
されば此鐘撞くよりも。帝大臣百官。老若男女悉く。登山せぬはなかりけり。夫は始まり是は
又。田原藤太と云ひし人。龍宮より戻り來り。此三井寺に納めつゝ。今の世までも傳はれり。
されば初夜後夜晨朝と。扱入相の鐘の音に。涅槃の四句の經文の。音づれけるを聞く時は。菩
提の道の鐘の聲。月も數添ひ煩惱の。睡を覺す衆生やと。善知鳥安方櫻川。西行櫻女郎花。軒
端の梅に杜若。花月鉢の木花がたみ。千壽重衡矢たてかも。江口百万玉葛。とき／＼するは道
成寺。數を言はんは暇惜し。春の始めつ方よりも。年の暮まで一日も。怠る事のなかりしは。
普く照す日の本の。影ゆたかなる謂れぞと。立休らひて見る時は。賤が心も吉原に。二八ばか
りの上臈の。肌には白き薄小袖。上は様々物好の。色は花田の常陸帶。宿と揚屋の其間を。回
り／＼て我君に。結び逢はんと引廻し。禿遣手を召連れて。町も狹しと通らるゝ。斯る折節年
の頃。二十餘りの侍の。淺黄の小袖紅の裏。綸子の表白裏の。衣紋氣高く繕ひて。鮫鞘卷の
大小に。金鏢掛けてさし挟み。梨子地蒔繪の印籠に。紫糸の唐打を。誰も嫌はぬ珊瑚珠の。
緒留諸共引きこふて。右の小脇に宿らせて。長崎足袋に練の紐。たてあかぬと結び留め。編笠
深く傾けて。をひら鼻に當て。かの上臈と道すがら。話をしてぞ通らるゝ。彼は如何にと尋ぬ
れば。或人答へ吉原に。此上臈のみめかたち。例し少なき川竹の。流れに沈む御身にて。是を

太夫と申しけり。此町並の習ひにて。人に異名を附くるなり。後に見えける侍の。異名を云へばとられん。あれに見えける上臈は。格子の君と申しけり。是をばはしの上臈と。其くはしきを語りけり。されば遊女の古へは。後鳥羽の院の御時に。鳥の千歳若の前。彼等二人が舞出し。始め水干立烏帽子。白鞆巻をさいたれば。男舞とぞ申しける。中頃よりは品をかへ。水干ばかり用ひつゝ。白拍子とも名づけたり。扱其後はたはれ女や。人の心も浮れ女の。遊女遊君今は又。傾城など申しつゝ。人の心を傾くる。文字にみやこ傾くと。書きたる程の事なれば。傾きぬるも道理や。されば都の耻かしや。我は遠國草深き。鄙の住居に馴れく。月日の境花紅葉。情の道も知らぬ身の。立休らふも由なしと。しり褰けて足早に。とび澤町にさし掛り。往けば程なく傳馬町。町屋に躰はなけれども。是ぞ實の本町や。聞きしに優る町並を。我もきて見る吳服屋の。袖を列ねて行く未は。戀しき人に大橋の。渡り逢はんと思ふにぞ。賤が心もなか／＼に。浮世障子の曇りなく。晴がましくも一見を。瀬戸物町と南なる。小田原町を何時の間に。後にして漸々行けば石町の。未は馬喰町とかや。侍數多打連れて。爰に栗毛の馬もあり。或は月毛鹿毛かす毛。皆せめ馬と打見えて。奥州駒の逸物に。作の鞍とて色々。金覆輪を取るもあり。梨子地蒔繪の鈿螺に。其家々の紋を置く。昔は伊勢の鞆と。皆人用ひ給ひしが。今は松虫鞆に。金地の證明珍が。轡の好み様々に。上綱鞆細筋の。手綱大方紫

に。障泥鞍覆馬氈をば。獵虎豹虎色々に。駈足地道一流の。手綱の秘密鞆の曲。心の儘に騎連れて。道ある方に通町。芝より出で、皆人の。榮花を此處に須田町へ。其間長き有様は。堯舜御代に相同じ。町の並びを尋ねれば。八百八町あるとかや。數を云はんは限りなし。漸々行けば枳形の。門を開くを見るからに。開くる物を尋ねれば。春花開く夏は又。扇を開く秋來れば。嵐に連る村雨を。厭はん爲に傘を。開いて通る彼方より。達者來ると見るからに。道を開いて通しけり。冬は寒さに小座敷に。屏風を開き引廻し。蓮の葉形に開いたる。杯出す折節に。勝手に樽の口開く。判官殿の御内なる。辨慶加州金澤の。富樫の庄に着きし時。笈を開いて其後に。勸進帳を開きつゝ。時を移さず悦びの。眉を開くぞ嬉しけれ。嬉しく開く品々は。思ひし人の宿りける。妻戸を開き相馴れて。別れになれば又何時と。書來る君が玉章を。開いて見るは嬉しけれ。又初春の藏開き。寶を入れし長持の。蓋を開くも嬉しやな。賤が田開き夢開き。出家の論は詰開き。目を見開いて開くらん。開きかねては寺開く。武藏の江戸の觀音は。三十年過ぎて後。御戸を開かせ給ひけり。をかしき申し事ながら。色音論の版は二條烏丸秋の野に。苗氏を云へば二つ橋。家名は版屋清兵衛。是を開いて世に出す。されども賤が心なく。書集めたる筆の跡。御覽の方も恥かしや。恥かしかりし験には。人に言葉を交さむと。顔振向けて筋違に。橋を渡りて明神の。本社に參り伏拜み。我行未は湯島とや。思ひ入たる天神の。鳥

居を過ぐる折節に。昨日今日かの新發意の。鉢を開いて立たれたり。是はと思ひ立寄りて。神の前なる鳥居には。如何なる謂れあると聞く。新發答へ然ればこそ。心あらんず徒は。鳥居に就て阿鑊叫の。文を稱へて参りには。内を通れば下向には。外を通るが慣ひなり。生死は誰も離れねば。往來に内を通りては。死して生るゝ學びにて。輪廻を嫌ふ心なり。されば世間を御覽せよ。落花は枝に返らずや。破鏡復び照さずや。流るゝ水と降る雨と。人の盛の古へは。再び返る事もなし。又玉垣と申せしはくはかいを表す。世の中の善根あらん徒は。慈悲の心を厚くして佛果に至る。是は又方十界を表すと。語り給ひし折節に。若者數多集りて。西三番の勝相撲。武藏の江戸に有合と。名乗る聲こそしたりけれ。神の前なる相撲には。如何なるあると聞く。新發意答へ相撲こそ。兩部大日奮震の。兩部の不二の其姿。直に見せたる學びにて。神面白く思すると。云ひし所に在りし人。志しとて新發意に。一錢與へ通る時。笠にて是を受止る。如何に新發はなかうを。笠に受止め給ふ事。如何なる事と云ひければ。人皇四十五代をば。聖武天皇年號は。正曆三年衣更着の。初めつ方の事かどよ。田村の御内のかしけと申せし人の有りけるが。俄に思ふ事ありて。出家に成らせ給ひしが。其面影を忍ばせて。笠を匠みて召されける。俄に有りし笠なれば。皆人之を不審して。召したる笠を脱せつゝ。見ぬ人更になりけり。されば見るから此笠に。一錢半錢齋米を。うつさで通る人もなし。斯る昔を聞く時

は。出家の笠に物を乞ふを。不審あるべき様もなし。若しも不審の事あらば。問はせ賜へと言はれしは。幼けれども耻かしや。勸學院の雀こそ。鳴く音を聞けば蒙求の。智者の傍の童べは。習はぬ經を讀めるとは。今こそ思ひ知られつゝ。心ばかりの鉢を入れ。本社に参り手を合せ。深く祈誓を下谷なる。東叡山に心ざす。實にや是こそ御城の。鬼門を護る世の中の。惡魔を祓ひ賜ひしは。實に有難や君が代の。久しかるべき例なり。西を遙に眺むれば。我をば誰も不忍や。何と命も池水の。身の遣る方のなき儘に。北はと問へば善光寺。傍に近き谷中寺。佛法はんどよの靈地にて。いつも絶せぬ法の聲。東に見ゆる淺草の。觀世音にも参らんと。初めて爰に車坂。廻りめぐれる道すがら。つくづく物を案ずるに。播盆廻る播子木と。われが浮世の廻り様。扱も忙しく閑もなし。暇なく廻る臉には。袖裾めぐる針いとみ。きれくにくるびて。人の見る目も恥かしや。腰をめぐりし木綿。良とは更に譽られず。巡りて良きは大名の。郡巡りと寺方の。檀那巡りに止めたり。我は止むる物もなく。巡りて淺草の。駒形堂は是かどよ。お庭に早く着きにけり。並木の花は數咲きて。梢に光り映りまし。形を影の争ふは。連理の枝か相生の。松かど是を疑はれ。吉野の峯の春とても。是には争で優らんと。行けば程なく南には。是ぞ不老の門の前。月日遅しと學んだり。北に東照權現の。七寶諸貨を鑲めり。東に塔を組上げて。雲井を分るむすびかね。二世の奇縁を結んだり。西は九品の淨土か。憂身の

罪を磨くらん。玉の臺を表したり。御堂になれば手水鉢。力及ばぬ大石を。船の形に造りなす。水は底ひの泉にて。心涼しく漏行くは。音羽の瀧も是ならぬ。心清くも垢離を取り。鏝口鳴し手を合せ。歸命頂禮觀世音。二世安樂と祈誓して。内の見附を眺むれば。獅子に牡丹に竹に虎。栗に猿猴水に犀。鹿に紅葉と舞鶴二つは。君の齡を千年まで。久しかれどぞ舞ひ遊ぶ。斯く有難き法の庭。めぐりくつて東なる。淺草川に立寄りて。川の流れを眺むるに。折節寄する小舟あり。便船乞ふて行く森の。言の葉あらはれば。何と浮世に墨田川。梅若丸の墓標。柳櫻をこきまぜて。今に絶せぬ念佛の。耳に聳えて哀れさに。心なけれど梅若の。跡吊らへる験かど。六字を置て斯くばかり。

名ばかりは梅若丸とあとにのみ身はさきだちて古つかどなる
と斯様に詠む舊跡を。此處や彼處と眺むれば。日も西山に傾きぬ。元の住家に歸らんと。船漕戻し遙々と。川邊を出る折節に。東に見ゆる入海の。漫々たれば魂も。空に駿河の富士山か。須彌の山かと疑はる。大船浮び見えにけり。あれは如何にと問ひければ。船頭答へ然ればとよ。其名隠れもあらばこそ。あれは龍頭鷲首と申す御座船なりけるが。船の昔を尋ねれば。震旦國の皇帝に。くはてきと云へる臣下あり。或時くはてき庭上の。池の面を眺むれば。頃しも秋の末つ方。下す嵐に誘はれて。柳の一葉水に浮く。然るに蜘蛛と云虫の。何處ともなく落ちける

が。一葉の上に舍りつゝ。吹來る風に身を任せ。汀に寄りし有様を。實にもと思ひ初めしより。皇帝船を匠まるゝ。匠みし主を其儘に。皇帝丸とも申しけり。又皇帝は其時の。匠みし船に召されつゝ。波浪を凌ぎはるゝの。しうふを易く平らげて。御代に治まる年月は。一万八千歳とかや。斯る目出たき皇帝の。御船にまさる御座船の。幾千代掛て君が代の。久しかるべき例なり。又我朝に比びなき。一つの御船なりければ。日本丸とも號けたり。彼入海に浮び出で。棹さす人もなければ。我と川邊に出入れば。安宅丸とも申しけり。然れば文字に船と書き。きみにすゝむと訓みければ。君の恵みを重んじて。我とすゝむの優しやと。語り賜ひし船頭の。心の程の床しさに。我は田舎の者なるが。江戸一見に登りたり。されば此頃世間には。如何なる事か流行るらん。語り給へと言ひければ。口の利きたる船頭の。申す事こそ面白し。扱は田舎の人やらん。自體我等は渡し守。人數ならぬ者なれば。世間の様もさながらに。いざ白浪に漂うて。月日を送る者なれば。浮世に流行る言の葉も。何と答へ申すべき。されども天下安全に。國も豊かに民榮え。目出たき御代の例には。賤山賤に至るまで。花鳥風月歌連歌。或ひは詩歌管絃に。心を掛けぬ人もなし。掛て流行るは何なれば。名を得て古き掛物と。鮫を掛たる大小を。さゝぬ人こそなかりけれ。何より流行る豆板を。皆天秤に掛にけり。かけて手前は吉原や。夜の通ひの止みければ。風呂屋の女流行物。斯る榮花を四書七書。五經なんど弄そ

ぶ。己れは萩の露ほども。身の行ひは爲さずして。古への孔氏の道は斯なりと。おもはれぶりの講釋す。聴く人とても心には。慾に耽ると知りながら。人にきようを知らせんと。頭を傾け聴くもあり。せめて道こそ立てずとも。仁義禮智を背かむと。誠に發起の人もあり。佛法後生に傾ぶいて。題目念佛寺参り。慈悲を施す人もあり。されば諸寺も多けれど。法華の御寺御門跡。上手の醫師諸白と。丹波烟草に肥後煙管。觀世が仕舞金春が。謠ひは今の流行物。されば謠へる品々に。我等如き船頭は。沖にて謠ふ船歌の。陸には細り片撥を。謠はぬ人もなかりけり。唄唱歌に琴の音は。皆家々に音づれて。目出たき御代の有様を。誰もきて見る編笠と。棧留縞の羽織こそ。夏冬掛けて流行りけれ。色々流行る其中に。たうたい人の好かれしは。鶉を集め掛並べ。椿を數多植並べ。鳥の鳴く聲花の色。聲と色との争ひに。心を寄せぬ人もなし。斯る折節傍はらに。椿を好きし男あり。此人知音の御方に。鶉を好む御寺あり。如何なる者や仕たりけん。狂歌を書て建てにけり。

この寺の鶉のまりにかさいづるつばきをつけてさすれよからん男の方へ斯くばかり。

此家のでいしゆのはなにつばきつけ見るにうまぬはうづらなりけり。斯様に書て建てにけり。二人の人が参會し。貴殿愚僧が事のみを。世の人譏り落書に。弄そ

ばるゝ口惜や。所詮由なき其方の。椿を引換へて。鶉を秘藏し給へや。されば鶉に仔細あり。伏見の院の御時に。諸鳥合せのありけるが。帝殿覽ましくて。諸鳥の聲を聞き召し。孰れ愚はなけれど。中に取分鶉こそ。一聲吹ける其中に。二十五絃の琴の音を。一々調べ出すなれ。斯る名譽の鳥なれば。琴の鳥とも云はゞやと。御簾近く置かれ。

ことさらにひくや鶉のひと聲は

と仰せ出され。御寵愛尋常ならず。其上佛の教へにも。觀其音聲皆得解脱と。一切經の第一に。示し給ひし法華經の。普門品にも説かれたり。此文の意。即時に聲の音を聞かば。皆即ち解脱を得ると説き給ふ。かゝる教へを聞く時は。聲に過ぎたる事あらじ。椿好をばやめたまへ。男答へて御寺の愚なりける仰せかな。昔壽永の夏の頃。千花の揃へ有りし時。椿の花は色毎に。百は百色千葉に。蓑をも照す花なれば。例し少き事なりと。恒春色と號しつゝ。其巻物に傳はれり。特に花ある物どもの。詩歌連句に聯れる。其數限りあらばこそ。昔歌人の詠めにも。

花下半年樂。月前一夜灯。

など花をば月に准へたり。斯る由ある物なれば。心なうして花の色。見分る事は成りがたし。されば歌にも。

君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をもしる人ぞ志る

と斯様に詠む置かれたり。斯る由ある花の色。譏り給へば御寺の。心無きにも似たるかや。今より後は引換へて。花を寵愛し給へど。争論半ばなりけるに。京橋邊におはします。上臈一人有りけるが。此上臈は流石にて。源氏を談む眉作り。花鬘總角花結び。何に付けても暗からず。彼の御寺の檀那にて。常に出入りし給へり。年も盛り□□八千代を重ねん細れ石。巖と成りて諸共に。苔のむすまで契らんと。思ひし中もありつるが。定めなき世のならひとて。夫は跡亡くなられけり。馴れし情を忘れかね。三十ばかりの頃よりも。世を憂き事と振捨て。獨住居をせられける。折節夫の命日に。回向の爲と志ざし。彼の御寺へ往かれしが。花と鳥との争論の中ばなりしを聞し召し。流石女の心なく。申すべきにもあらねども。其名を得たる花鳥の。優り劣りはわけ難し。珍らしからぬ事なれど。昔北野の天神の。菅丞相に御座の時。こち吹かは匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

と詠む給ひし御歌に。名残を惜み奉り。遙か九州筑前の。宰府の郷へ御跡を。慕ひて飛びし不思議あり。扱又鳥の不思議には。孝謙天皇の御宇に。大和の國高天の寺の事かどよ。軒端の梅に黄鳥の。宿りを成して啼く聲は。

初陽毎朝來。不相還本栖。

と啼く。文字に寫し見給へば。

はつ春のあしたごとには來れどもあはでぞかへる元のすみかにか
と斯様に詠む傳へたり。かゝる昔を聞く時は。花鳥二つの戯れに。優り劣りはわけ難し。されば歌にも。

あら玉の年たちかへるあしたよりまたるものは梅にうぐひす
と春きにけうを待ちわびて。諸人寵愛し給へり。殊に鶉の啼く聲と。花の色とを觀するに。色ある人を世の中に。戀せぬ物のあらばこそ。聲と色との別ちをば。比翼の鳥の語らひか。連理の枝の契りかど。是ぞ榮花の初めなる。此争論を止まりて。例の如くに翫そび。榮花に□□給へやと。仲裁せさせ給ひける。心の中の奥床し。されば二人の人々も。此仲裁の名に愛て。頓て和合せられける。よく／＼物を案ずるに。人に榮花を成させんと。若し觀音の再誕し。仲裁せさせ給ふかど。皆人之を疑はる。兎角天下の流行物。榮花を巧むばかりなり。されば巧める験には。常時も絶せぬ嫁取と。扱舞入の其後は。暇なく流行る産婆。子孫繁昌民榮え。目出たかりける世の中や。見奉れば御風情。凡人ならぬ氣色かな。頓て安堵を遊ばして。榮花にいらせ給へどよ。彼方此方の由もなき。長物語りする中に。船は程なく着きにけり。暇申すぞさらばとて。船漕ぎ出す船頭の。心の中の恥かしや。我も名残は惜けれど。又こそ参り合はばやど。船より下りて程もなく。元の住家へ立還る。頃は寛永二十年。初春なれば未久に。目出た

かるべき君が代を。御裳濯川の流れより。長かるべきと思ふにぞ。人数ならぬ我等まで。爰に安堵の身となりて。願ひし儘の思出に。はやあふ州の者なれば。心に協ふぞ嬉しけれ。

東 日めぐり終

野ざらし紀行

松尾芭蕉

千里に旅立て路糧をつゝまず。三更月下無何に入るといひけん。昔の人の杖にすがりて。貞享

甲子秋八月。江上の破屋を立いつる程。風の聲をいゝ寒氣也。

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせ却りて江戸をさす故郷

關越る日は。雨降て山みな隠れたり。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

何某千里といひけるは。此度路の助と成て。萬いたはり心をつくし侍る。常に莫逆の交り深く。

朋友に信ある哉。此人。

深川や芭蕉を富士に預け行く

馬上の陰

富士道のべの木槿は馬にくはれけり

千里

富士川の邊に。三ツばかりなる捨子の哀れげに泣くあり。此川の早瀬にかけて。浮世の波を志のぐにたへず。露ばかりの命まつ間と捨置けん。小萩がもとの秋の風。今宵や散るらん。明日や志をれんと。袂より喰ものなげて通るに。

猿を聞く人すて子に秋の風いかに

いかにぞや汝父にくまれたるか。母にうとまれたるか。父は汝を悪むにあらじ。母は汝をうとむにあらじ。只是天にして。汝が性のつたなきをなけ。

大井川越る日は。終日雨降りければ。

秋の日の雨江戸にゆび折らん大井川

千里

二十日あまりの月かすかに見えて。山の根際いどくらきに。馬上に鞭をたれて。數里いまだ鶏鳴ならず。杜牧が早行の殘夢。小夜の中山に至りてたちまち驚く。

馬に寝て殘夢月遠し茶のけむり

松葉屋風瀑が伊勢に在りけるを。尋ね音信て。十日ばかり足をとむ。腰間に寸鐵を帯びず。襟に一囊をかけて。手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり。俗に似て髪なし。我僧にあらざといへども。鬢なきものは浮屠の屬にたぐへて。一の鳥居の陰ほのぐらく。御燈處々に見えて。また上もなき峯の松風。身にしむばかり。深き心を起して。

三十日月なし千とせの杉を抱くあらし
西行谷の麓に流あり。女共の芋洗ふを見るに。

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

其日のかへるさ。或茶店に立寄りけるに。てふといひける女。あが名に發句せよと云て。白き絹出しけるに書付侍る。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

閑人の茅舎をとひて。

葛植て竹四五本のあらしかな

長月の初。古郷に歸りぬ。北堂の萱草も霜枯果て。今は跡だになし。何事も昔にかはりて。はらからの鬢白く。眉皺よりて。只命ありてとのみ言て。詞はなきに。兄の守袋をほどきて。母の白髪拜めよ。浦島が玉手箱。汝が眉もや老たりと。暫く泣きて。

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

大和國に行脚して。葛城郡竹の内といふ所にいたる。此所は彼の千里が舊里なれば。日頃とまりて足を休む。藪より奥に家あり。

綿弓や琵琶に慰む竹の奥

二上山當麻寺に詣で。庭上の松を見るに。凡千年もへたるならん。大さ牛をかくすともいふべけん。かれ非情と雖も。佛縁にひかれて。斧斤の罪をまぬかれたるぞ。幸にして尊し。

僧あさがほいく死にかへる法の松
獨よしの、奥にたどりけるに。誠に山深く白雪峰にかさなり。烟雨谷を埋んで。山賤の家處々にちひさく。西に木を伐る音東に響き。院々の鐘の聲。心の底に答ふ。昔より此山に入て。世を忘れたる人の多くは。詩にのがれ歌にかくる。いでや唐土の盧山といはんも。亦むべならずや。或坊に一夜をかりて。

礎打て我にきかせよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は。奥の院より右の方。二丁ばかり分け入る程。柴人の通ふ道のみ僅に有て。さかしき谷を隔てたる。いと尊し。彼とくくくの清水は。むかしに變らずと見えて。今もとくくくと墮落る。

露とくくくこゝろみに浮世すゝがばや

若是扶桑に伯夷あらば。必ず口を嗽がん。もしこれ許由に告げば。耳を洗はん。山を登り坂を下るに。秋の日既に斜になれば。名ある所々見残して。先づ後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年を経て志のぶは何を志のぶ草

大和より山城を経て。近江路に入て美濃に至るに。今須山中を過て。いにしへ常磐の墳あり。伊勢の守武がいひける。義朝殿に似たる秋の風とは。何れの處か似たりけん。我もまた。

義朝のこゝろに似たり秋の風

不破。

秋風や藪もはたけも不破の關

大垣に泊りける夜は。木因が家があるむとす。武藏野を出し時。野ざらしを心に思ひて旅立ちければ。

死にもせぬ旅寝の果は秋のくれ

桑名本堂寺にて。

冬牡丹千鳥よ雪のほどとぎす

草の枕に寐あきて。まだほのぐらき中に。濱のかたへ出て。

雪うすし白うを白き事一寸

熱田に詣づ。社頭大いに破れ。築地は倒れて草村に隠れ。かしこに繩をはりて。小社の跡を志るし。爰化石をすゑて。其神を名のる。蓬志のぶ心のまゝに生たるぞ。なか／＼に目出度より

も。心とまりける。

志のぶさへ枯れて餅かふやどり哉
名護屋に入る。道の程諷吟す。狂句。

凧の身は竹齋に似たる哉

草まくら犬もしぐるゝか夜の聲

雪見にありきて。

市人にいで是賣らん雪の傘

旅人を見て。

馬をさへながむる雪のあした哉

海邊に日暮して。

海くれて鴨の聲ほのかに白し

爰にわらむをとき。かしこに杖を捨て。旅寐ながらに年の暮ければ。

としくれぬ笠着て草鞋はきながら

といひくも。山家にとしを越して。

誰が婿ぞ齒朶に餅おふ牛の年

奈良に出る道のほど。

春なれや名もなき山の朝がすみ

二月堂に籠りて。

水取やこもりの僧のくつのおと

京に登りて。三井秋風が鳴瀧の山家をとふ。

梅林

梅白しきのふや鶴をぬすまれし

檜の木の花にかまはぬすがた哉

伏見西岸寺任口上人に逢ふて。

我衣にふしみの桃のしづくせよ

大津に出る山路を越て。

山路来て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望。

辛崎の松は花よりおぼろにて

晝の休らひとて。旅店に腰をかけて。

躑躅生てその陰に千鱈さく女

吟行

菜畠なはたけに花見顔なる雀かな

水口みなぐちにて二十年を經し故人こじんにあふ。

命いのちふたつ中に活いきたるさくらかな

伊豆の國ひるが蛭こじま小島の桑門さうもん。是も去年の秋より行脚あんぎやうしけるに。我名を聞て草の枕まくらの道連みちづれにもと。

尾張の國より跡あとをしたひ來りければ。

いざともいざともに穗麥ほむぎくらはん草枕

此僧えんかくらわれに告て曰。圓覺寺大顛和尙たいてんわしやう。ことし陸月りつぎのはじめ。遷化せんけしたまふよし。まことや夢こ

こちせらるゝに。先づ道より其角かどがもとへ申しつかはしける。

梅戀うめこひて卯の花拜うづはなむ涙なみだかな

贈二杜國子

白芥子しろけしにはねもぐ蝶かたみの形見哉

二たび桐葉子きりばやしがもとに在て。今やあづまに下らんとするに。

牡丹藥しんぷか深く分け出る蜂はちの名殘なごり哉

甲斐の山家に立よりて。

ゆく駒うまの麥むぎになぐさむやどり哉

卯月うづきの末庵すえいはりにかへりて。旅たびのつかれをはらすとて。

夏衣なつみいまだ風かぜをとりつくさず

野ざらし紀行終

伊勢紀行

落柿舎 去來

日あたくかに。風涼しき頃とて。妹の伊勢まうでするに催され。八月廿日あまり。宵より臥す。

伊勢までのよき道づれよ今朝の雁 千子

といひ出たれば。

辰己のかたに明る月影 去來

白川橋に來ぬ。やうく家のさまかはり。過ぎし野分に軒庇こぼれがちなり。

白川の屋根に石ちく秋の風 去來

能因が詠歌はさらなり。津守何がしが。關までゆかぬ白川さへ。はるか北の山里なりと。千子が難じぬるを。七夕つめに宿からんと聞ゆるたぐひ。感興同じかるべしと言ひはべり。大津へ出るほど。馬車行きかひ。句作るべくもあらず。松本より船路へ心よせて。汀にといまる人多し。

八月や矢橋へ渡る人とめん 千子

いひ捨てゆく。

霧よりはこなたへ廣し鴉の海
秋風もこゝろまゝなり鴉の海
遠近の氣景に。をかしくも言ひ出ず。草津に休らふに。

姥餅會無皺

あるじの女房。我が方につらさしむけて。是なん姥があもなる。唯今白の中より。ちぎり取り
てつめたからず。などのしる。千子がたえずやをかしかりけん。あるじに代りて。

紅粉を身にたやさねばいつとも皺の見えざる姥がもち哉
千子

日高く石部にどまりて。足あらひ物くひなどしけれど。夜はまだ戌にみたず。

秋の夜も寝ならぶ旅のやどり哉
去來

千子はじめて。父母の國わかれ來ぬる憐も。大かたならねど。とかく言紛らかしつゝ。

長き夜も旅草臥に寝られけり
千子

横田川朝のうちに渡るぞ。冬のこゝちしぬる。水口過ぐるほどは。ねふたくて物言ひ出でず。

土山に馬のかひかふて。蟹が坂のぼる。

蟹坂一跨蟹

千子はこゝらの氣色目もやらず。古郷ながめ勝なるを對句せめければ。

嵯山七卷 嵯

鈴鹿山にのぼりぬ。けふは旅人の數もこえず。右左の松柏生しげり。稍猶みどり深く。秋の聲
のみすさまじし。

小鳥さへわたらぬ程の深山かな
千子

と吟むけるを。王氏の佳句おそるべしと。けちながらそれになよりて。

奥山や五聲續く鹿をきく
去來

此ほどりは別人も見えず。秋の草咲みだれて。言ふばかりなくめでたし。

萩すゝき山路を出る笠おもしろ
千子

東のかたは岩角立かさなり。露しづくなめらかにして。足とむへくも覺えず。

馬の口よくとれ霧の谷ふかし
去來

あり盡して。鈴鹿の明神を拜む。宮司に燈明の料つかはしけるに。納めながら。夜になりてあ
しなると言ふ。業なれてをかし。坂の下は猶道近ければ。關に宿りぬ。向の家若き老たる女
のあつまりて。白挽てうたふ。更るまで昔やはなして聞きぬ。

泊りく稻する唄もかはりけり
千子

よるの雨やみぬれど。雲霧おほひみちて。馬に荷も見えず。

朝きりや處のものに雨とはん
風吹つるまゝに。日影名残なくさし出。人々うき立。半はむさし野のかたへわかる。我どち
の駒は南へさしむけ。楠原標本の宿々に。乗かへて豊國野をすぐ。

去 來

芝草の露もちかゆるそだち哉
津の町にまばし飢たすけて。雲津の川原に出づ。馬駕籠うちとめ。舟よぶ人多かりぬれど。
向にさしとめて見むかず。深川の翁の。よし朝の心に似たり秋の風。なさけなきにやありけん。
船長がつらつきも。をさくちとるまじく憎ければ。聲高になりて。

去 來

秋風に耳の垢とれわたし守
どかくして渡り。暮て松坂に着きぬ。里富み人猛に見えしも。さすがにひなびたり。

同

藁たぐひひきによはる砧かな
けふは宮詣でせむと起出ぬれば。末の月東に見ゆ。

去 來

曉の三日月見たる途すがら
一ふしはいつれの虫もつかまつる

去 來

櫛田稲木の川かち渡りして。明星が茶屋に休らふほど久し。やゝ足かろくゝなるまゝに。湯田
野にかゝる。

今よりは棘もからず花すゝき

里ちかければ知らぬ初茸

去 來

小侯の村すげなう通る。宮川の渡し守。きのふの船長に似るべくもなし。

芋洗ふ人より先に垢離とらん

去 來

水むすぶ手ぬぐふばかり秋の風

千 子

衣脱ぎかへ。かしらなど結ふて。内外の宮の御前にかしこまり。時うつるまで涙おとしぬ。百
二十の社々。高天が原。天の岩戸。残りなく詣づ。神路山。いすゞ川。目はなすべくもあらぬ
ど。石も木もあり。かたくのみおぼえて。風景にこゝろよらず。日暮るゝまでめぐり。宇治の
里にかへる。今宵は家づとの品々買取りて夜更し。明の日千子が。いまだ伊勢の海士しらぬを。
口をしがれば。二見にまはりいづ。岩はなさしおほひ。まほ海引めぐりたる汀。むらくちひ
さき家見ゆ。其角が。しのすゝきのしを敷寐や五月雨。時しもかはり。處へだてぬれど。思ひ
出て詠められければ。

見るくも帆數そひけり霧の海

千 子

晝より雨はなほる秋かせ

去 來

田の中に稻あふ馬のかゆほえて

同

堤をさぶく道いそぐらん
といひをはりぬ

千子

伊勢紀行終

西北紀行

貝原益軒

名區佳境の勝れたる處を見るは。只其時暫し心を慰むるのみかは。幾年経ても折々に。其所々の有様を思ひ出れば。さながら今日の前に見る心地して。珍らかに懐かしければ。老の身の後年まで忘れざらん爲に。此年巡りし國郡の境地を。拙き筆に任せて書留め置ぬ。是れ身を終るまでの思ひ出にせんとなり。又我と志を同じくして名所に遊覽する事を好める人も。いまだ見ざる所多かんめれば。斯る人の爲にも成れかしとて。聊か記して後覽に供ふる事爾り。元禄二年我が年既に下壽に及べり。豫てより丹後若狭近江に遊觀の志あり。閏正月廿五日。餘寒猶烈しけれど。つとめて京都東洞院の旅館を出。勘解由小路を西へ。二條御城の郭内より大學寮の舊跡(今は酒井讚岐守殿邸と成る)を過ぎ。朱雀を南へ四條を西へ。壬生の地藏堂(心淨光院又寶幢寺と號し。或は壬生寺と云)の邊を過ぐ。此寺に壬生忠岑が硯あり。此北に忠岑が宅の跡あり。壬生の西の田の中に雀森(小也)あり。西院村(秀吉公の築き給ひし京都封疆の外なり)を經る。此北に山内村あり。紙屋川(西院より五町許り西小川也)を渡り。丹波へ行く

には此路迂遠なれども。嵯峨と堅木原の間を見ん爲梅津の東を通る。

梅津村(京より二里あり)の東に王墓とて大なる墳あり。是れ古の天子親王の御陵ならん。其御名を知る人なし。陵大なれば中世以後の陵にはあらじ。

桂川。舟にて渡る。此河水最潔よし。故に都より爰に來て。布帛を洗ひ晒す者多し。宋景濂が

日東の曲に。渭水西流曲似。鉤。と云へるは此川なるべし。是より松尾の社右に見ゆ。

西芳寺(松尾の南なり)。此寺は厩戸太子の開基。夢窓國師中興せりとなん。兩山の谷間に在

て佳景なり。堂前假山水あり廣し。夢窓手づから經營する所也。今世假山水を愛する人。是を

以て模範とす。又嵯峨の天龍寺の方丈の後庭の假山。臨川寺の假山も。共に夢窓製せりと云。

山田村(上下兩村あり)の南に車塚と云塚あり。是れ文徳帝の御車を埋めし塚なり。凡そ御陵の

側に車塚。他所にもあり。

御陵村に文徳帝の御陵あり。小山の如し。是れ田邑の御陵也。御陵の上に小祠あり。此南に川

あり。常に水無くして霖雨の時水出る川也。土人たんだ川と云ふ。是れ田村を誤りてたんだと

云なるべし。山田村と云ふは。即是田村なるべし。

堅木原(御陵村より十三町許南なり)。是れ丹波へ行く大道の宿驛也。茶屋あり。塚原村。

沓掛村。是より五町許り西路の左に大石あり。里人は是を酒顛童子が腰かけ石と云。

おいの坂。是れ山城丹波の境也。本名は大江山也。大江の坂を。誤つておいの坂と云なるべし。

大江山生野の道の遠ければ。と小式部が詠しは此處の事なり。生野も。天の橋立に行く道にあ

り。又丹後にも大江山あり。昔酒顛童子が住たる所也と云。夫は天の橋立に行く道にあらざれ

ば。小式部が歌によめる大江山にはあらず。大江の坂の嶺より少し西に地藏堂あり。其側に龜

山城主の休所あり。地藏堂の少し北に。山城丹波の境あり。嶺より京都及び山城諸山。能見を

て佳景也。地藏堂の西南に一村の松林あり。是れ酒顛童子が首塚なりと俗にいへり。

王子村に(おいの坂より十五丁ばかり)闇がりの宮とて小社あり。鳥居あり。

篠村(此邊桑田郡なり)。八幡宮あり。足利尊氏都沒落の時。此社に詣で願書を籠め。供に在し軍

士共矢を納めし所を。矢塚と稱して社の西に小塚あり。愛宕山を東に見。保津村を北に遠く見

やる。保津は嵯峨川の上の北にあり。保津山名所也。丹波の奥より材木薪等を採て。船筏にて

保津に出し。保津にて筏を組直し材木薪を多く積み。山間の狭き川を下りて嵯峨に出る。其間

瀧の如くなる急流多く。又岩間の曲れる所多くして危し。然れども筏士ども能乗習ひたれば。

乘誤る事なしと云り。保津より嵯峨へ二里あり。龜山。久世出雲守殿(五万石)の居城也。町長し旅人の宿驛也。茶店あり。民家卑し。龜山より

北東の山の根に。出雲と云ふ里あり(龜山より一里あり)。此所に出雲の大社を勸請すと云。此所の事。宇治拾遺徒然草などにも見えたり。

宇津禰村。

並河村。

大井村(此邊仙洞御領なり)。正一位大井大明神の社あり。延喜式神名帳に。桑田郡大井神社と

あり。

小林村。

小川村。

高卒塔婆。

川關。

八木村。此西北の山に内藤法雲が城趾あり。鳥羽(園部領也)。馬驛なり。今夜は鳥羽に宿す。京より是まで八里あり。凡そ此國は京に近くして。大江の坂の山一つ隔たりぬれど。民俗人家凡て大に異りていぶせく陋し。廿六日雨降る。卯の時に鳥羽を出づ。鳥羽より關へ二里半。大谷へ五里。凡そ丹波より嵯峨へ出る材木。多くは大谷より谷川に漬て出し。關にて筏に組んで。保津(大谷より七里半あり)まで下して嵯峨に至る。保津より川上は瀬廣し。保津より川下は山

間を流れ行く故却りて狭し。又大栗は船井郡高崎(鳥羽より一里半あり)邊より出づ。是れをててうち栗と云ふ。

室川原。

小山。

園部(鳥羽より一里あり)は小出伊勢守殿在所なり。宅あり。町長く民屋良からず。京より九里。

是より西に篠山道あり。但馬へ行く道なり。

三戸野嶺(園部より一里)上下一里あり。坂は峻しからず。坂の上に民家あり。其所を嶺と云ふ。

俗に云山椒太夫が關を居し所也(此邊船井郡也)。

須知村(園部より二里あり。民家多し)。

曾根村。

印内村。此西に紅新田とて民家少しあり。其邊に廣野あり。紅野(或云蒲生野)と云。方一里

ありと云。紅村は名所也。

山内村あり。是れ土佐大守山内氏の先祖の住めりし所也と云。此邊藥種多し。澤瀉を田に植て

利とす。

中尾村。

檜木山村。
尾細。

水原。

大久保村。爰に遠見岩。強盜岩など云大石あり。中世此邊盜賊多かりし故此名ありと云。此邊朝倉山椒多し。又子の小なるをば。里民びんせうと云。びんせうは何國にも之ある尋常の山椒也。朝倉の木には刺少く。びんせうの木には刺多し。是よりほうその嶺(大なる坂にて嶮し)を越え。茨木村を過ぎ。千束に至る。日既に薄暮なれば爰に宿りぬ(鳥羽より千束まで八里。京より十六里也)。

廿七日の朝つとめて宿を出ぬ。今日も又雨降る。

生野村(名所なり)。民家頗る多し。大江山生野の道と詠めるは此所の事也。

岩崎。

長田(名所なり)。

福知山に着く。山上に城あり。城下町廣からず。朽木伊豫守殿の居城也。大河其東北に流る。

川舟多し。是より舟に乗りて丹後の由良に下ると云ふ。此河は三野嶺より西北の水。并に南丹波より流れ來る水なり。三野嶺より東の方の水は。龜山川に出て嵯峨に流れ出づ。鬼が城

は福知山の北にあり高山也。福知山より鬼が城の嶺まで一里あり。荒河村。是より西の方に但馬路。乾に丹後路の岐あり。うるしが鼻。

天津あり。天津より鬼が城の山上まで半里ばかり。山上西北に岩窟あり。其内暗し。十間餘は人の出入容易し。夫より奥は上より土石落やすく暗し。故に委しく見たる人なしと云。天津より十丁許り行きて。境川と云所に民家少しあり。是れ丹波丹後の境なり。谷川を限りとす細流なり。石表を立て境川より宮津まで六里一町三十間と書り。

工庄村。

河守(福知山より三里半あり)。

外宮(河守より一里)。此所與謝郡眞井が原なり。社は南向茅葺也。京より廿三里餘。是れ豊受太神宮御鎮座の初めの地。雄略天皇二十一年神託ありて。其翌年伊勢の山田に遷し奉る。伊勢に御鎮座の後も其まゝにて。爰にも祭り奉る。此社の前なる小川を宮川と云。社は小山の上に在り。昔は四十末社有しと云。今多くは頽廢して纔に残れり。社職四十人許りあり。諸方より參詣の人多く賑はし。社の後にも川あり。其源は此國の大江山より出。内宮の西を流れ來る。此社の立たる小山は谷の間にあり。恰も中島の如し。外宮より半里行けば。内宮町長し宿驛なり。

御社は町より三丁ばかり坂を登りて山上にあり。本社は茅葺南向也。今五十末社あり。昔は八十末社有しと云。社職三十餘人あり。境内廣し。豐受太神宮此下に在す故に。内宮は伊勢より爰に後世勸請したるならん。内外宮共に宮造り略同じ。内宮の西の谷間四丁ばかりに岩窟あり。土俗は天の岩戸と號す。道嶮し。井あり。産湯の釜など云ふ石あり。社の北の山を燈が嶽と云高山也。内宮の北三里許りに綾部と云所あり。宮津へ行く道にはあらず。領主九鬼式部少輔殿の宅あり。此邊より漆。蒟蒻。荏の油等多く出づ。今夜は内宮の旅館に宿す。廿八日内宮を出づ。

二瀬川(内宮より一里許り。大江山の麓也)。左に大江山見ゆ。土人御嶽と稱す。高山也。二瀬川より麓まで八町許りあり。麓に池あり(長四十間横廿間許り)。馬場の跡あり。其邊に礎石残り。是酒顛童子が住し所也と云。山上に岩窟あり。入口方四間許りあり。葛蘿生茂りて人の行く事不自由なり。酒顛童子は古の盜賊なり。夜叉の形を真似て人を威し。人の財寶を奪ひ。人の婦女を掠む。近世近江の伊吹山の邊にも。斯る賊聚りて。鬼の形を學び人を惱ましけるが。加賀の井彌八郎と云勇者に切殺されしと云ふ。

北向嶺(土人普甲嶺と稱す)。内宮より嶺まで二里あり。かんだの瀧あり。此坂上下三里餘ありて甚だ嶮難なり。且石徑なれば行人辛苦す。嶺より東南を望めば。諸山重疊として目前にあり。

り。其中に大江山のみ高く見ゆ。少し宮津の方へ下れば。丹後與謝の海見えて佳景也。嶺より宮津へ二里あり。下る所の坂急にして石多く最も辛苦す。

宮津は阿部對馬守殿居城なり。京より廿八里あり。町頗る廣し。海邊にて魚鹽器材乏しからず。諸國の船爰に集る故に商家富り。民家を借りて暫し憩ひ。久世の渡に赴く。

久世の渡は。宮津より船にて行けば西北一里に近し。宮津より西に出る小坂の上に。犬堂とて小堂あり。石碑あり(先領主永井信州尙長の立る所。其文は弘文院之を書く)。

五臺山久世戸寺。俗に切戸の文珠と稱す。樓門に海上禪叢と書る額あり。本堂大なり。五臺山と書ける額あり。又二層の塔あり。堂前に鐵の水盤あり。徑六尺高さ二尺ばかりあり。寺僧の云。古は此寺に僧多し。其時の浴盤なり。此寺昔は眞言宗。今は禪宗なり。古は此地も島にて有し故切戸と號す。今は切戸埋りて陸に續けりと云。然れども此西に入海有つて。文珠堂の前僅かなる切戸より潮通じ船も通る故に。其渡る海を切渡と云なるべし。此切渡を俗に久世の渡と云。丹後國風土記には久志と云ふ。是より東海を與謝の海と云ふ。西の入海を阿蘇の海と云ふよし。丹後風土記に記せり。東海は橋立より宮津の方の入海なり。外海に直につけり。

阿蘇の海は。橋立より西の狭き入海なり。

天の橋立。文珠堂の側より一丁ばかりの海を船にて渡り。明神に參詣す。社大ならず。社の側

に。磯の清水とて井あり。和泉式部此所に来りて歌を詠めり。橋立の松の下なる磯清水。都な
りせば汲ましものを。と詠す。清水の前に石碑を立たり。其文は弘文院の作る所なり。又式部
が歌をも石碑に記せり。是又永井尙長の立る所なり。毎年六月廿五日に祭禮あり。此神社の邊
は橋立の幅頗る廣し。松多し甚だ麗し。是より北の方山下の里江の尾まで。十丁許りの間海中
に。一條の低き沙原の洲あり。是れ橋立なり。横は七八間。十餘間。二十間に足らず。老松茂
れり。此十丁ばかりの所。恰も海中に橋を架せるが如し。故に橋立と號するならん。江の尾の
さき。中村(成相寺の麓なり)より成相の觀音堂まで十六丁の坂を登る。其路甚だ峻しくして輿
馬に乗る事成がたし。山上に寺六坊あり。世野山成相寺と號す。眞言宗なり。本尊正觀音は。
文武帝十三年。當國世野山より此處に移せり。此觀音は順禮第廿八番の札所也。眞應上人開基
す。文武帝御建立なり。此寺にも鐵の水盤あり。久世の渡に有るが如し。此坂中より。天の橋
立切戸の文珠與謝の海阿蘇の海。目下に在つて其景。目を驚かす。日本の三景の一とするも宜
也。今日雨天なれども。幸にして山上に登りし時。雨歇み雲晴れて山水の景色能く見ゆ。成
相村は西南の谷にあり。與謝の海は南北三里許り。東西一里餘の入海なり。橋立の西なる阿蘇
の入海は。南北半里東西一里ばかり。此入海の周圍二里半餘ありと云ふ。其海の入口は。橋立
明神と切戸文珠との間。僅かに一丁ばかりの切戸なり。今日歸る時は日既に暮て船には乗らず。

陸地を歸るに松明を取らせて。坂路を上り下り船路より遠し。戌の時許りに宮津に着て宿す。
翌廿九日。早旦に宮津を出て若狹の方へ行く。
栗田村(宮津より一里濱邊に在る里也)。是より西一里許りに栗田嶺(或は長尾嶺と稱す)。山上に
宮津領と田邊領の境あり。七曲八嶺とて。甚だ峻難の坂路五十丁を経て。由良の港に到る。其
間に俗に云ふ山椒太夫が子三郎が墓あり。海邊に遊小濱など云所あり。由良は宮津より二里三
十町あり。民家三百餘あり。石浦(由良の内也。本村より半里)と云所に。山椒太夫が屋敷の跡
とて石の水船あり。
中山(渡りの里と云。名有る所なり)に大河あり船にて渡る。此前に丹後國分寺の跡あり。今小
堂に彌勒の像のみ残り。中山の町を過ぎて田邊に到る。牧野因幡守殿の居城なり。豊臣家の
時。細川兵部大輔藤孝の居城なり。慶長五年幽齋の籠られしも此城なり。城下に民家多し。
四六市場(田邊より二里半)民家三十許りあり。家居最わびし。今夜は爰に宿す。
明る廿九日宿りを出づ。由良より是まで東西五里南北一里許りの入海あり。凡そ丹後若狹の内
所々に入海あり。
小倉村(市場より半里)に一の宮の社あり。是れ丹後の一の宮なりと云。大森明神に七圍の楠木
あり。

河原村に。河原山金剛院とて眞言寺あり。大寺なり。是より十丁許り行きて谷間に。丹後若狹の境あり。

西北紀行上終

西北紀行下

貝原益軒

松尾山の觀音堂大也。若狹國なり。麓より十八丁の坂を登る。一條鳥羽兩帝の御歸依有りし所也と云ふ。觀音堂を守る僧坊一あり。山上にも民家あり。是れ西國三十三所順禮觀音の第廿九番也。此處冬は雪深し。觀音堂の前に高さ七尺許りの石燈籠あり。雪に埋れて見えざる事多し。又石燈臺の上に二三尺も降積る事もありと云ふ。凡そ丹波丹後は國中多く平地少なし。松の尾の山より東に下りて。丹後若狹の境あり。濱邊に下りて。見つまと浦に至る。是より越前の岬見ゆ。高濱民家千軒ありと云。和田村あり。本郷村は廣き谷間也。四方半里もありぬべし。若狹國に斯様の平地は稀なり。凡そ此國は横狹し。古は此邊若狹の府也と云。此南に若宮と云所あり。昔は民家千軒有りし所なり。今の本郷は。若宮より此所に移る。本郷より和田まで一里の間入海なり。和田の東の山を犬見山と云。島の如し。西の方に一條の路有りて陸に續けり。此邊勝れたる佳景なり。繪に畫ましかば宜からん。是より小濱へは濱邊を行く。其間磯邊に小き圓石のみあり。是を長井の濱と云(或は碁

石が濱と稱す。

小濱の城は。當國の主酒井氏修理殿の居城なり。昔京極氏築けり。城下の町頗る廣し。小濱の町の西南の外三町ばかり前の高き所に社あり。熊野山と號す。本社は神明なり。其少し西の方に役の小角の像あり。脇侍に白比丘尼(又八百比丘尼と號す)。十八歳の像あり。奥の院に岩窟あり。白椿山と云。後瀨山是なり。古歌に。玉椿を詠る名所なり。昔は此山の下入江なり。町の海と稱す。今の小濱の町も。入海有りて白濱也しと云。八百比丘尼の事。世俗の語り傳へに云く。古へ此邊に六人の福徳長者あり。時々參會して寶物を競べ争ふ。食膳も又珍奇を盡す。或時人魚を料理す。五人の者は人魚を知らず。怪しき物とて食はず。其中の一人。人魚の肉五六片これを懷にして家に歸り。妻子に見せて捨んと思ひ隠し置けるを。一人の女子。人魚は藥なる由を聞て。竊かに取て食しける。是より長命にて。八百年生て此所に住せしと云り。長生せし事は有なん。それも世俗の妄語多ければ。正史に記さる事。八百歳は信難し。武内宿禰の三百二十歳。倭姫命五百歳。日本上代にも例しなき長生なり。白比丘尼若し眞に八百歳ならば。此兩人にも超て我が邦の彭祖なるべし。丘處機が曰く。長生の術ありて長生の藥なしと云へる。此事宜なり信ずべし。人魚を食ひたるとて八百歳は保ちがたし。常光寺(淨土宗大寺也)。京極宰相高次の寺なり。

建康山空印寺。酒井讚岐守忠勝入道空印。并び其父備後守忠利法號建康院の寺也。初め建康寺と號す。酒井空印の子息修理大夫忠直。改めて建康山空印寺と號せらる。堂の側らに岩窟あり。其前に鳥居あり。窟中に八百比丘尼の石碑あり。空印寺の後の山後瀨山なり。青葉山は其對ひにあり。海邊なり。是又名所なり。高成寺。禪宗なり。青葉山の麓にあり。

或は云。小濱の城初めは後瀨山の上に有しと云ふ。此所海邊にて諸方より船着く故に。品物多く名産も多し。今夜は小濱に宿す。主人を呼んで此里の事を問ふ。凡そ異郷に行きて其里の物語りを聞くこそ。心を慰む業なれ。博物の助けとも成り。又後の思ひ出となるも楽しむべし。小濱より京へ十八里。越前の敦賀へ十二里あり。當國三方の郡に湖三あり。御形の湖。小濱より六里東北に在り。長さ二里深し。敦賀よりも六里あり。鯉鮒多し。其次に勾子の湖。長さ三十丁横十四五丁。御形の對ひの山を隔つ。其間一里許りあり。其次にひるがの湖。是は勾子の湖と並べり。廣さは勾子の湖と同じ。其水甚だ深し。ひるがの湖には。潮満れば海水入る故に。海魚も河魚もあり。翌朝二月朔日。小濱を出て近江の今津の方へ行く。遠敷(小濱より一里許り)。上下の祠あり。山上の神宮寺。是れ古への僧實忠が住せし處なり。神谷。小濱より二里半。道の側らに大なる石塔あり。應安四年五月七日と彫り。姓名なし。此

所の川を北川と云。小濱より東二里半の間平原あり。是れ若狭の最も廣き所なり。熊川(小濱より四里半あり。熊川より朽木へ四里。今津へ五里。此邊四十八町を一里とすと云ふ)。宿驛なり。町長し。女を禁むる關所あり。券なければ女を通さず。熊川より八町許り東に。上大杉下大杉とて民家續けり。其半程に谷川あり。是れ若狭と近江の境なり。若狭國長さ十七里横は一二里。或は四五里。所に依りて廣狹あり。山中村(近江の内)。朽木監物殿所領なり。關所あり。朽木氏の家人番を勤む。芳坂(山中より一里あり)。是より朽木谷へ行く道ありて山中に入る。追分村(山の中に民家あり)。大溝と今津へ行く道あり。故に追分といふ。是より大溝へ四里。熊川より爰に二里半あり。京に行くには是より直に。朽木谷を越えて山城の小原に出るが本道なれど。我竹生島に渡らんと思ふ志ありし故。先近江の今津へ行く。今津は湖中に出たる町にて。西の方僅かに陸に續く。島の如し。民家四百餘戸あり。今夜は今津に宿す。此邊今津貝津中村に。加州大守の采地二千三百石あり。翌二月二日。今津より船に乗りて竹生島に渡る。凡そ淡海の湖は。勢田より貝津まで南北二十里。東西の廣き所九里あり。今津と佐和山の間東西最廣し。湖の北の濱は。西は貝津中は大浦。東は鹽津なり。此三所皆湖邊に民家ある所にて。北の山を隔て、越前に隣れり。此湖の形は能く琵琶に似たり。堅田より北十七里は東西廣し。

琵琶の腹に似たり。堅田より勢田まで四里は東西狭く。一里の内外あり。譬へば琵琶に鹿首あるが如く狭し。勢田より宇治までは彌狭し。琵琶の海老尾に比し。竹生島を覆手に比すと云り。故に此湖を琵琶湖と云。大津の邊より山田矢橋の方を見たるよりも。堅田より北は甚だ廣大にて恰も大海の如し。今津より勢田へ十七里。大溝へ四里。京へ十七里。越前敦賀へ十里半。今津より貝津へ四里。貝津より敦賀へ七里半。此間荒茅山なり。敦賀より京へは二十七里半あり。今津より船にて竹生島に到る。湖上三里あり。竹生島は周圍六十丁許り。山の高さ凡て十間ばかり。其高さ何處も均しく高下なし。山上は皆常磐木茂れり。下の山根は大なる岩石圍りつき。岸高くして屏風を立たるが如し。東の方神社の下に纒かに狭き入江あり。船の着所なり。神社佛寺に登る處只一所あり。其餘は皆石崖のみにて登るべき地なく。又船を停むべき所なし。山上の林木山下の石壁。其形繪に畫たるやうに鮮明に麗はし。社も寺も皆高き所にあり。民家は一字もなし。社前より遠く望めば。湖水渺茫として人寰遠く隔たり。境地潔淨にして人里遠く俗塵を離れ。恰も浮世の外に出たる心地して。仙境に入りたる様に覺え侍る。眞に世に勝れたる靈地にて怪しき佳境也。其形勢は筆にも詞にも及び難し。竹生島の社縁起の説に。寺を岩金山太神宮寺と號す。神社は巽に向へり。社僧の寺十坊あり。皆岩間に立てり。宅地甚だ狭し。社領三百石。公より御寄附なり。此神は市杵

島姫なり。一説に素盞鳥尊の御子宇賀御魂命と云。延喜式には淺井郡都久夫須麻神社と稱す。浮屠は是れを辨財天也と云。辨財天は。天竺にて水邊に在る神なれば。凡そ日本の水邊山上に在る神を。本名を稱せずして辨財天と稱する處多し。安藝の嚴島。相模の繪の島などは是なり。辨財天は福を授け給ふ由稱する故。人皆利を願ひて尊べばなり。此神の事又別に神祕の説あり。以上の説とは變れり。是れ正説とすべしと云ふ。凡そ高山大川大湖など自から神靈なくんば有べからず。社に慈惠僧正書寫の紺紙金泥の般若經一卷。小野篁所書之法華經。紺紙金泥一軸にて全部備はる。稻穀の中に佛三體作り入れ。又榎殼の中に三佛あり。或は榎殼の内に十三佛を作り入る。胡馬の角。空也上人所持の水晶の念珠。延喜帝御寄進の露の硯有り。又玄象の琵琶の撥とて有り大なり。象牙にて之を作る。小枝の笛(大小二あり。小は高麗笛なり。小き枝あり)。あり。觀音堂あり。大にして美麗なり。是れ西國順禮三十三所の一なり。今の堂は豊臣秀吉公建立し給ふ。予東近江へ遊觀の志あれども。今日逆風吹て行き難し。竹生島より今津に漕歸り。今津より陸行し。西の方朽木谷に入るとて。先づ今津の西荒川村へ行く。今津より三里あり。其間に南北一里東西一里半餘の茅野あり。熊野山野と云ふ。土地佳と雖ども田圃なく。民家なし。荒川は朽木谷の口なり。日既に暮ぬ。雨も降しかば。今夜は荒川村に宿す。此里は常に旅人の通る所にあらざれば。主人の家も。設けも最わびしくて。一夜の宿りも堪がたし。如何なる者にてかあらんと疑ひしにや。宿を貸まじと防ぎしを。兎角言ひて宿りぬ。斯る通路にあらざる邊土を通れば。斯様の惱み多し。翌朝二月三日。荒川を出て朽木谷に入る。朽木谷も近江高嶋郡なり。此谷南北は長く東西狭し。朽木(荒川より一里半)。朽木監物殿の居宅あり。朽木氏は宇多天皇の後裔佐々木氏の庶流也。朽木町狭し。是より北へ行けば若狭道なり。朽木の柗は。朽木の奥にあり名所なり。今も材木薪を伐る。朽木より京へは南に行く。十二里あり。朽木の町にて挽物を作り。漆にて塗る椀盆などあり。漆多ければなり。京へ出し諸國に賣る。樞實又當所の名産なり。周林院とて禪寺あり。京極家の女。秀吉公の側室松の丸殿の妹。朽木氏に嫁す。死後周林院と號す。此寺に葬る。方丈の前に假山水あり。後奈良院享祿元年。將軍足利義晴。三好が亂を避て京を出奔し朽木に來り。朽木民部少輔植綱が許に住居せられ。五年を歴て天文元年。朽木より歸京せらる。此寺は義晴の居住し給ふ宅なり。假山は即ち義晴親ら築かれしと云。物舊て新好しからず。其製巧なり。昔時公方より桐の紋を朽木氏へ賜はる。朽木より山城へ行くには南へ轉ず。此谷水南より北に流れ。朽木より又東に轉ず。其川荒川を過ぎ舟木に出て湖水に入る。川下を吾迹川と云。大河にて船渡しなり。船渡の所まで朽木町より三里餘あり。吾迹川は名所なり。朽木より北の方若狭より出る川も。朽木に到りて南より出る川と一に成りて吾迹川に落る。凡そ是より南北

る者にてかあらんと疑ひしにや。宿を貸まじと防ぎしを。兎角言ひて宿りぬ。斯る通路にあらざる邊土を通れば。斯様の惱み多し。翌朝二月三日。荒川を出て朽木谷に入る。朽木谷も近江高嶋郡なり。此谷南北は長く東西狭し。朽木(荒川より一里半)。朽木監物殿の居宅あり。朽木氏は宇多天皇の後裔佐々木氏の庶流也。朽木町狭し。是より北へ行けば若狭道なり。朽木の柗は。朽木の奥にあり名所なり。今も材木薪を伐る。朽木より京へは南に行く。十二里あり。朽木の町にて挽物を作り。漆にて塗る椀盆などあり。漆多ければなり。京へ出し諸國に賣る。樞實又當所の名産なり。周林院とて禪寺あり。京極家の女。秀吉公の側室松の丸殿の妹。朽木氏に嫁す。死後周林院と號す。此寺に葬る。方丈の前に假山水あり。後奈良院享祿元年。將軍足利義晴。三好が亂を避て京を出奔し朽木に來り。朽木民部少輔植綱が許に住居せられ。五年を歴て天文元年。朽木より歸京せらる。此寺は義晴の居住し給ふ宅なり。假山は即ち義晴親ら築かれしと云。物舊て新好しからず。其製巧なり。昔時公方より桐の紋を朽木氏へ賜はる。朽木より山城へ行くには南へ轉ず。此谷水南より北に流れ。朽木より又東に轉ず。其川荒川を過ぎ舟木に出て湖水に入る。川下を吾迹川と云。大河にて船渡しなり。船渡の所まで朽木町より三里餘あり。吾迹川は名所なり。朽木より北の方若狭より出る川も。朽木に到りて南より出る川と一に成りて吾迹川に落る。凡そ是より南北

數里は朽木谷なり。深山幽谷の内なり。橡生(朽木の南二里にあり。土人朽木橡生と云ふ)。

温井村。此邊に昔は町井柚木と云ふ兩村あり。寛文二年五月朔日大地震の時。東の山崩れて村里を埋み。兩村の人皆死すと云ふ。東の山は比良の高峯の西側なり。又谷の西にも高山あり。其間に谷川流る。町井柚の木は川端に在し村なりと云ふ。此邊も高島郡なり。篤信昔し京に在し時。彼里の男の京に來り語るを聞けり。大地震せし日。我れ朝より山に登りて薪を伐る。大地震に愕きて里に歸りしに。山崩れて里は皆土に埋もれ。我が父母兄弟親類其外里人。皆土に埋もれて死ぬ。我一人死を免かれたりとて泣々語る。其南に坊村あり。

坊村より山城嶺までは志賀郡也。此邊を葛川谷と云ひ。朽木谷と同谷にて名を別にする。坊村に北嶺山息障明王院と云寺あり。又葛川寺と號す。開山は叡山の相應和尚なり。淳和天皇の後旅子の御創立。其後又清和帝御建立なり。古き所なり。本尊は觀音なり。脇侍の不動あり。相應和尚所作也。毘沙門は慈覺大師所作也と云。地主權現の社あり。大なり。此神を色物明神と稱す。舊來在し神社にて當寺の鎮守なりと云ふ。山門の僧百日行法して爰に來て碑傳札を立つ。昔は高貴の人も多く參籠あり。鹿苑院義滿。慈照院義政。常徳院義尙等也。女中には義滿の室

藤の富子并び群臣の札。本堂に掲て今に在り。山中にては珍らしき大なる宮寺なり。

崩坂。高坂の間十七八丁あり。其間に中平とて頗る廣き地あり。民家あり。海道より西二里に。大見(山城の内なり。近江と同訓にて音の上下異なり。奈良の近里に檜と云所あるが如し)。桃井など云ふ村山中にあり。山城近江の境なりと云ふ。海道にはあらず。大見村より薪を多く京へ賣る。大見木と云皆黒木なり。又は小出石村小原へ出して賣る。夫より又京へ持出し賣るなり。又此谷より黄蘗も出る。中華より來るより皮厚く性佳し。

龍華橡生と云所あり。荒川より是れまで七里の間。凡て朽木谷也。信濃なる木曾路の外に。未だ斯る長き谷は見ず。谷の内兩山の間。纔かに五丁三丁或は一丁半丁あり。此邊に奇草多し。又川烏と云鳥あり。龍華橡生には民家多し。山澗の間に小山あり。其山を廻りて民家あり。日も漸く曛に迫れば此里に宿を借りぬ。此里は朽木谷は既に過て。南北兩山の間にある谷の中にあり。此澗水は。近江の龍華へ出る。此故に叡山の續きの山爰に至て絶たり。叡山と比良の高峯の間續かす。朽木にも橡生村ある故。紛れざらん爲にとて朽木橡生。龍華橡生と云ふ。譬へば山城の宇治田原。大和の奈良田原。河内の關が原。丹南松原など云が如し。龍華橡生より谷川を下り堅田へ出る道あり。明ぬれば二月四日の朝。龍華橡生を出づ。是より山城嶺へ半里餘あり。嶺に山城近江の境あり。是れ龍華越なり。

小田石村を過ぎ。山城の内椽生より一里。是れ大原の谷の川上なり。

大原の勝林院。極樂院。音無の瀑。來迎院の東五丁ばかりにあり。大岩七間許り。水は上より

石に沿ふて落る故水音無し。瀑急ならず。佳景なり。

瀨井の水。東大原にあり。

瀧の清水。勝林院の西五丁。寂光院の東北二丁許りに在り。近年石欄を立たり。方二尺ばかり

りの井なり。水甚だ淺し。

寂光院は草生村にあり。西の方の谷中なり。高き所に在り。此寺に建禮門院の御木像。併び阿

波内侍の木像あり。建禮門院の陵は。寺の厨の少し上高き所にあり。小なる墓なり。堂の前に

昔は小池あり。汀の櫻とて池の頭に櫻ありしが。今は池も櫻もなし。對ひの山夏の比緑樹麗は

し。建禮門院の櫛花摘に登り給ひしを。後白河法皇の下より見給ひし山是なり。里人は名付けて

翠黛の山と云ふ。此寺は尼守る閑寂の所なり。又芹生の里は草生村の内に入り。民屋四五軒あ

り。委しく尋ねざれば知れ難し。小野と云所。小原の内東の方山の麓にあり。古歌に詠せし。

小野の篠原も此所なり。惟喬親王の住給ひし小野是なり。業平の歌詠し所なり。伊勢物語に見

えたり。又源氏物語浮舟の巻に。浮舟が住し事を書し。此小野の事なり。小原より八瀬に下

り谷川に沿ひて出るは本道なれど。其處は昔し屢々見し所なれば。今日は志津原の方を見んた

め。八瀬には行かず江文明神の前より。西の小坂を越え。補陀落寺の舊跡を右に見。志津原長

谷八鹽の岡(長谷に在り)。朗詠谷(花園村にあり。此所にて公任卿朗詠を作られしと云。此地

に閑居せられし歌あり)など巡觀し。谷口を山鼻の里を過ぎて。京都へ歸りぬ。

右山城の西郡。丹波。丹後。若狹。西近江。山城の北郡。凡そ五の國を八日の内に遊觀せり。

元祿二年二月日。益軒貝原篤信書。今茲寶永八の年。我犬馬の齡既に八十二。重ねて此紀行を

顧みる。老極まよりて後。昔觀し所々の景迹を思ひ出るも懐かし。

西北紀行下終

椎の葉

椎本才磨

日記にはあらぬ草枕。須磨明石の秋の夕暮を。年比見まほしく。今年此葉月末の五日に。難波江や北の岸より便船乞ふて。秋風の烈しくもなく。空靜かに雁の聲。帆にあげてなんと思ひわたり。紅月素波に漂ふて西に漕浮べたり。

蘆の花折りて船出の被せん
日の暮れぬ程に。尼が崎に着く。此あたり大物の浦とかや。岸に添ふて沙魚釣る男の。宿賃さ
んど言ふを幸の事に思ひ。案内させて。彼が舎に入りける。難波よりは。僅三里には過ぎぬ艫
せしに。早旅寐の心地。昨日の今日に似ぬ秋の夕べ。憐れにも心細かりけり。亭主心遣ひ淺か
らずして。此所は入江に近く。夜寒一入なればとて。手釣の魚など調じ。盃持て出で。交る
く酌交して興殊に移りゆき。古今の物語。取集めたる中に。判官西海の波に漂泊ありし昔。
此浦の哀れ。靜が舞。辨慶が顔。見るやうに語るも目醒しくあかし
志ころ打つ宿にありあへ古烏帽子